

高田城三の丸遺跡

2005

岡山県真庭郡勝山町教育委員会

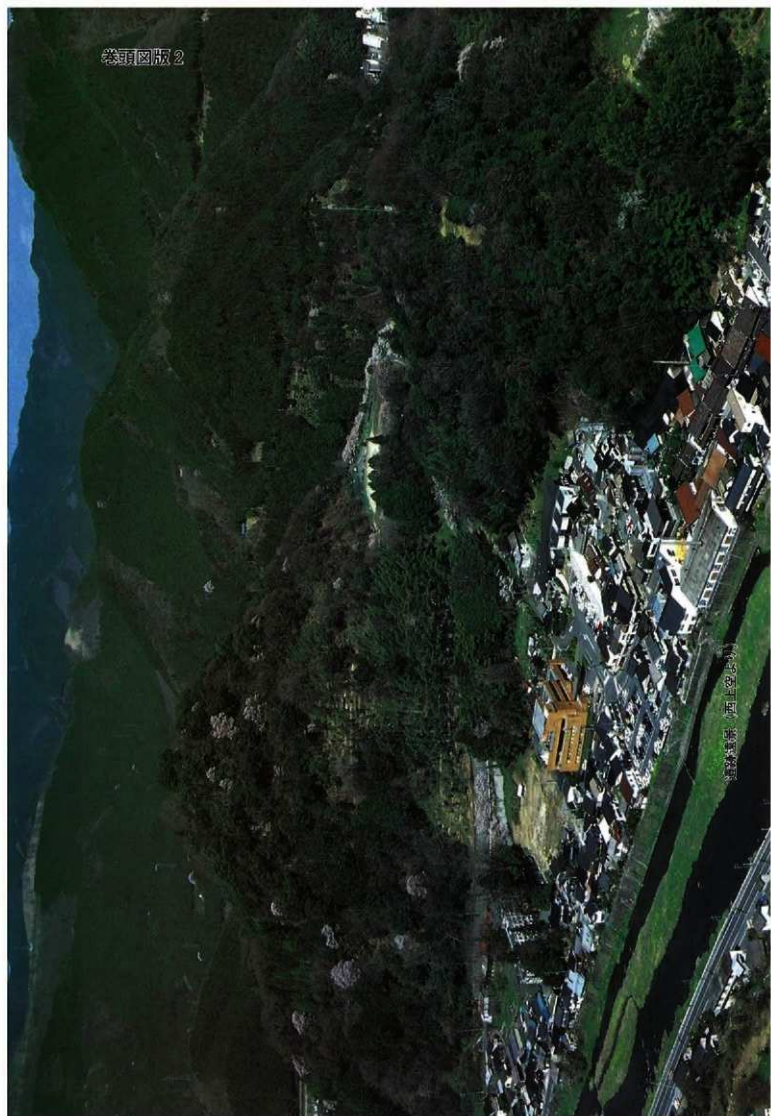
高田城三の丸遺跡

2005

岡山県真庭郡勝山町教育委員会



高田城遺景（南西上空より）





卷頭図版 4

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



- ① 溝 3 出土 鉄漿付皿
 ② 井戸 2 出土 天目茶碗
 ③ 井戸 2 出土 横櫛
 ④ 包含層出土 ロク口土師器
 ⑤ 柱穴 71 出土 青花
 ⑥ 包含層出土 青磁
 ⑦ 溝 3 出土 平瓦
 ⑧ 集石遺構出土 丸瓦



- ①柱穴78出土状況 銅鏡・土師器
 ②柱穴78出土 銅銭12個
 ③柱穴78出土 曲物
 ④井戸2出土 木梳
 ⑤石垣下出土備前焼 摺り鉢
 ⑥溝5出土 硯
 ⑦石敷き遺構出土 硯
 ⑧石垣下出土 金属・土鍾

巻頭図版 6

①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



- ①溝1より出土 鱗
 ②溝1より出土 杓子
 ③溝2出土 硯未製品、土鏝、桃の実
 ④溝2より出土 カキ、アカニシ
 ⑤溝5より出土 備前焼
 ⑥溝6と井戸2より出土 天目茶碗
 ⑦包舎層より出土 手つくね土師器
 ⑧包舎層より出土 土鏝



①平成15年9月中旬発掘状況



④北石垣1



②北より石垣1と溝1



⑤東石垣



③西よりL字溝



⑥西より石敷き遺構

卷頭図版 8



①南から礎石遺物 1



④井戸 1



②礎石遺物 2



⑤井戸 2 底



③石段



⑥井戸 3

序

勝山町は勝山藩二万三千石の城下町として、古くから真庭郡の政治、経済、交通、文化の中心として栄えてきました。町の中心にそびえる城山、太鼓山のふもとには出雲往来に沿って歴史的風土や景観が色濃く残されて、観光客が数多く訪れる町でもあります。

このたび、観光客用駐車場を城山の麓に整備するにあたり埋蔵文化財の可能性があり、確認調査を実施したところ戦国末期の建物とそれに伴う石垣の一部を確認しました。

勝山町文化財保護審議会から現状保存するように建議があり、町教育委員会で協議し現状保存するという結論に達し、勝山町に要望書を提出し、町議会で十分審議を重ねて了承されました。

平成15年6月下旬からの本格的な発掘調査には数人のボランティアの方々の献身的な尽力と、理解ある多くの町民の方々に協力いただき、暑さと寒さのなか平成16年3月まで断続的に調査いたしました。

その結果、室町時代から江戸時代初期の武士階級の生活を物語る建物や井戸とともに多くの遺物が出土して、戦国時代に美作西部を支配していた高田城主・三浦氏がその家臣の居館跡と推定されています。

城下町勝山の町並み保存地区の一角に位置する、この価値ある遺跡を歴史公園として保存することになり、平成16年6月から岡山県のフロンティア21地域活力創出支援事業の指定を受け整備を進めてまいりました。

遺跡面は特殊コンクリート皮膜で保護し、ユニバーサルデザインを取り入れた高齢者や障害者にも配慮した歴史公園となっております。郷土学習の場として、城山、町並み保存地区とともに観光スポットになると信じております。

発掘調査にあたっては、岡山県教育庁文化財課、岡山県古代吉備文化財センターをはじめ多くの有識者の方々からご指導をいただきました。また、発掘並びに資料整理等では長期間にわたり、ボランティアの方々のご協力をいただき完成を見るのが出来ましたことに深甚なる感謝の意を表し厚く御礼を申し上げます。

平成17年3月

勝山町教育委員会

教育長 水 島 康 裕

例 言

1. 本書は岡山県真庭郡勝山町勝山59番地（東経133°41'38"・北緯35°05'06"）に所在する高田城三の丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は勝山町職員駐車場建設に伴い、勝山町教育委員会が平成15年6月24日より26日まで確認調査を、7月24日から平成16年3月31日まで全域調査を実施した。
3. 発掘調査は勝山町教育委員会嘱託職員橋本慧司が担当した。調査面積は1,000㎡である。
4. 発掘調査、報告書作成には岡山県教育委員会文化財課尾上元規、岡山理科大学白石純、久世町教育委員会池上博、くらしき作陽大学澤田秀実、京都府埋蔵文化財センター森島康雄の各氏からご教示、ご指導を得た。記して謝意を表する。
5. 本書の執筆・編集は橋本が担当し、遺物の鑑定は京都府埋蔵文化財センター森島康雄氏、岡山市政策課栗岡実氏、備前市教育委員会石井啓氏、木材の同定は岡山県木材加工技術センター見尾貞治氏、漆器分析はくらしき作陽大学北野信彦氏、土師器・瓦の胎土分析は岡山理科大学白石純氏、編集について落合町教育委員会切明友子氏のご協力を得た。
6. 出土遺物の洗浄・復元は横野昭子、横野幸子が行い、水嶋保邦の協力があった。遺構の実測は橋本、横野幸子が、遺構・遺物のトレース・拓本・写真は橋本が行い、安田佳代の協力、横野幸子に拓本の協力を得た。青花など陶磁器の実測は井汲澄夫氏（フジテクノ）に依頼した。遺構写真は橋本が行い、空中写真はアール・シー・スカイワークに依頼した。遺物遺構一覧表作成は式見晃美、横野昭子が行った。

発掘調査に当たっては緊急であったことや保存に関わる確執のため重機使用料の予算措置以外にはほとんどなく、以下にあげる方々が長期、短期にわたる無料奉仕にすべてを託さざるを得なかったことが残念であった。平成15年6月24日から翌年3月31日まで、暑い日も雪が舞う寒い日も、献身的に協力くださったことに記して深く謝意を表する。また、物心両面にわたり支えてくださった多くの方々も記して謝意を表する。（順不同）

・発掘調査作業協力者：横野昭子、横野幸子、水嶋保邦、國本昭雄、内田京子、船津浄子、小山光子、岩田祥明、各務健三、山谷吉孝、山谷純子、初本敏範、牧 富士夫、岡田至弘、角南組
・支援協力者：角南組、國本健輔、中島道夫、國本昌子、初本勝、福井茂登洋、伊達宗晴、榊義武、佐々木宣二、三町陽子、太田美幸、三木孝代、國本定代
7. 出土遺物・図面・写真は勝山町教育委員会が保管している。
8. 本報告書に記載した高度値は海拔高で、遺構の方位は磁北を示す。
9. 使用した地形図は勝山町発行のものを一部修正している。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 三の丸遺跡の地理的・歴史的環境	1
第2章 調査および報告書作成の経緯	6
第1節 調査の契機と経過	6
第2節 調査および報告書作成体制と経過	9
第3章 発掘調査の概要	10
第1節 確認調査	10
第2節 遺構・遺物の概要	14
1 石垣と礎石建物	14
① 石垣1・石段	14
② 礎石建物1	14
③ 東石垣と礎石建物2	15
④ 北石垣	17
⑤ 石敷き遺構	19
2 掘立柱建物	25
① 建物3	25
② 建物4	25
③ 建物5	25
④ 建物6	27
⑤ 建物7	27
⑥ 建物8	27
⑦ 建物9	28
⑧ 建物10	29
⑨ 建物11	30
⑩ 建物12	31
⑪ 柱列1	31
⑫ 柱列2	31
3 井戸	40
① 井戸1	40
② 井戸2	41
③ 井戸3	42
4 溝	46
① 溝1	46

② 溝 2	46
③ 溝 3	49
④ 溝 4	52
⑤ 溝 5	58
⑥ 溝 6	58
⑦ L字溝	58
⑧ 西溝	59
5 鍛冶炉	66
① 鍛冶炉 1	66
② 鍛冶炉 2	66
③ 鍛冶炉 3	67
④ 鍛冶炉 4	68
6 土壇	70
① 土壇 1	70
② 土壇 2	70
③ 土壇 3	71
④ 土壇 4	73
⑤ 土壇 5	73
7 その他の遺構	74
① 集石遺構	74
② 主な柱穴	75
③ 東石垣脇石垣	81
④ 石段脇石垣	81
第3節 遺構に伴わない遺物	81
① 包含層(土器溜り)	81
② 井戸2西包含層	84
第4章 まとめ	88
第1節 遺構と遺物の概要	88
① 陶磁器	88
② 土師器	94
③ 金属器	99
④ 木製品	100
⑤ 石製品	101
⑥ 土製品	102
第2節 遺構の変遷と時代観	103
第3節 時代の動きと三浦氏	106
第4節 保存の経過と保存工法	109
第5節 付載	113

1	三の丸跡出土の土師器・瓦の胎土分析	113
	岡山理科大学自然科学研究所 白石 純	
2	高田城三の丸跡出土漆器における材質・技法の調査	119
	くらしき作陽大学 北野 信彦	
3	三の丸遺跡出土木片の樹種識別について	124
	岡山県木材加工技術センター 見尾 貞治	

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1	第32図	①柱列1実測図	36
	遺跡分布図	4		②柱列2実測図	36
	周辺の遺跡分布図1/5000	5	第33図	柱列1、2出土遺物実測図1/4	37
第2図	確認調査全体図	11	第34図	井戸1平面図	40
第3図	①第1トレンチ土層断面図	12	第35図	井戸2実測図	41
	②土層断面模式図	12	第36図	井戸2出土遺物実測図1/4	42
第4図	第1トレンチ出土遺物	13	第37図	井戸2出土遺物実測図1/2	42
第5図	①遺構全体図	13	第38図	井戸3実測図	43
	②石垣1、石段実測図	15	第39図	井戸3出土遺物実測図1/4(6・10は1/2)	44
第6図	①石段埋土出土遺物1/4(8・9は1/2)	16	第40図	井戸3出土遺物実測図1/4	45
	②石垣1埋土出土遺物1/4	16	第41図	溝1実測図	47
	③石垣1埋土出土遺物1/2	17	第42図	溝1出土遺物実測図1/4	48
第7図	礎石建物1実測図	18	第43図	溝1出土遺物実測図1/2	49
第8図	礎石建物1出土遺物実測図1/4	19	第44図	①溝2実測図	50
第9図	東石垣と礎石建物2実測図	20		②溝2土層断面図	50
第10図	東石垣埋土出土遺物実測図1/4	21	第45図	溝2出土遺物実測図1/4	51
第11図	北石垣2実測図	21	第46図	溝2出土遺物実測図1/4	52
第12図	①北石垣1、2埋土出土遺物実測図1/4	21	第47図	溝2出土遺物実測図1/2	53
	②北石垣2出土遺物実測図1/2	21	第48図	溝3実測図	54
第13図	石敷き遺構実測図	22	第49図	溝3出土遺物実測図1/4	55
第14図	①石敷き遺構埋土出土遺物実測図1/4	23	第50図	溝3出土遺物実測図1/2	55
	②石敷き遺構出土遺物実測図1/4	23	第51図	溝3出土遺物実測図1/4	56
	③石敷き遺構出土遺物実測図1/2	23	第52図	溝4、5、6周辺実測図	57
第15図	建物3実測図	24	第53図	溝4出土遺物実測図1/4	58
第16図	①建物3出土遺物実測図1/4	25	第54図	溝5出土遺物実測図1/4	59
	②建物3、4出土遺物実測図1/4	25	第55図	溝4、5、6出土遺物実測図1/2	60
第17図	建物4実測図	26	第56図	溝6出土遺物実測図1/4	61
第18図	建物5実測図	27	第57図	L字溝実測図	61
第19図	建物6実測図	28	第58図	L字溝出土遺物実測図1/4	62
第20図	建物7実測図	29	第59図	L字溝出土遺物実測図1/2	62
第21図	建物7出土	29	第60図	西溝出土遺物実測図1/4	62
第22図	建物8実測図	30	第61図	鍛冶炉1実測図	66
第23図	建物8出土遺物実測図1/4	31	第62図	鍛冶炉2実測図	66
第24図	建物9実測図	32	第63図	鍛冶炉3実測図	67
第25図	建物9出土遺物実測図1/4	32	第64図	鍛冶炉4実測図	67
第26図	建物10実測図	33	第65図	鍛冶炉1、2、3、4出土遺物実測図1/4	68
第27図	建物10出土遺物実測図1/4	33	第66図	鍛冶炉1、2、3、4出土遺物実測図1/2	69
第28図	建物11実測図	34	第67図	土壇2実測図	70
第29図	建物11出土遺物実測図1/4	35	第68図	土壇3実測図	71
第30図	建物12実測図	35	第69図	土壇5実測図	71
第31図	建物12出土遺物実測図1/4	36	第70図	①土壇2、3、5出土遺物実測図1/4	72

	②土壇 2、3 出土遺物実測図1/2	72		④包含層出土遺物実測図1/4	85
第71図	集石遺構実測図	74		⑤包含層出土遺物実測図1/2	85
第72図	集石遺構出土遺物実測図1/4	74		⑥井戸2 西包含層出土遺物実測図1/4	86
第73図	柱穴71実測図	75	第81図	櫛前焼福年表案	88
第74図	柱穴71出土遺物実測図1/4	75	第82図	青花碗・青花皿編年表案	89
第75図	柱穴78実測図・銅銭拓本1/2	75	第83図	青磁瀬年表案	90
第76図	柱穴78出土遺物実測図1/4	76	第84図	主な青磁青花出土遺構	91
第77図	①柱穴出土遺物実測図1/4	77	第85図	①土師器皿法量分布	96
	②柱穴出土遺物実測図1/4	78		②土師器皿法量分布	97
	③柱穴出土遺物実測図1/2	78		③土師器皿法量分布	98
	④柱根、枕実測図1/6	80	第86図	①遺構の変遷 (I期)	104
第78図	東石垣脇石垣実測図	81		②遺構の変遷 (II期)	104
第79図	石段脇石垣実測図	81		③遺構の変遷 (III期)	105
第80図	①包含層出土遺物実測図1/4	82		④遺構の変遷 (IV期)	105
	②包含層出土遺物実測図1/4	83	第87図	高田城三の丸遺跡保存整備設計図	112
	③包含層出土遺物実測図1/4	84			

表 目 次

第1表	建物一覧表	37	第11表	柱根一覧表・柱穴出土遺物一覧表	78
第2表	建物出土遺物一覧表	37	第12表	包含層出土遺物一覧表	86
第3表	井戸一覧表	44	第13表	櫛前焼一覧表	92
第4表	井戸出土遺物一覧表	44	第14表	天目茶碗一覧表	93
第5表	溝一覧表	63	第15表	青磁 白磁 青花一覧表	93
第6表	溝出土遺物一覧表	63	第16表	金属器一覧表・銅銭一覧表	99
第7表	殿治伊一覧表	69	第17表	木製品一覧表	101
第8表	殿治伊出土遺物一覧表	69	第18表	石製品一覧表	102
第9表	土壇一覧表	73	第19表	瓦一覧表	102
第10表	土壇出土遺物一覧表	73	第20表	土鍾一覧表	103

図 版 目 次

巻頭図版1	高田城遠景 (南西上空より)		6-4	溝2より出土 カキ、アカニシ	
巻頭図版2	道跡遠景 (西上空より)		6-5	溝5より出土 櫛前焼	
巻頭図版3	道跡空中写真		6-6	溝6と井戸2より出土 天目茶碗	
巻頭図版4-1	溝3出土 鉄製付皿		6-7	包含層より出土 手づくね土師器	
4-2	井戸2出土 天目茶碗		6-8	包含層より出土 土鍾	
4-3	井戸2出土 柳		巻頭図版7-1	平成15年9月中旬発掘状況	
4-4	包含層出土 ロクロ土師器		7-2	北より石垣1と溝1	
4-5	柱穴71出土 青花		7-3	西よりL字溝	
4-6	包含層出土 青磁		7-4	北石垣1	
4-7	溝3出土 平瓦		7-5	東石垣	
4-8	集石遺構出土 丸瓦		7-6	西より石敷き遺構	
巻頭図版5-1	柱穴78出土状況 銅銭土師器		巻頭図版8-1	南から礎石建物1	
5-2	柱穴78出土 銅銭12個		8-2	礎石建物2	
5-3	柱穴78出土 曲物		8-3	石段	
5-4	井戸2出土 木碗		8-4	井戸1	
5-5	石垣下出土備前焼 櫛り鉢		8-5	井戸2底	
5-6	溝5出土 硯		8-6	井戸3	
5-7	石敷き遺構出土 硯		図版1-1	発掘前 東より	
5-8	石垣下出土 金属土鍾など		1-2	発掘前 南より	
巻頭図版6-1	溝1より出土 鋤		1-3	発掘前 西より	
6-2	溝1より出土 杓子		1-4	第5トレンチ 北より	
6-3	溝2出土 硯未製品、土鍾、桃の実		1-5	第1トレンチ 東より	

1-6 第2トレンチ 北東より
 図版2-1 礎石建物1
 2-2 礎石建物1 北より
 2-3 東石垣と礎石建物2
 2-4 礎石建物2
 2-5 石段埋土 出土遺物
 2-6 礎石建物1 出土遺物
 2-7 石垣埋土 出土遺物
 2-8 石垣埋土 出土遺物
 図版3-1 北石垣1 西より
 3-2 北石垣1、2
 3-3 北石垣1 小柄出土状況
 3-4 北石垣2 天目茶碗出土状況
 3-5 北石垣埋土 出土遺物
 3-6 北石垣 発掘状況
 図版4-1 石敷き道構
 4-2 石敷き道構 西より
 4-3 石敷き道構 排水溝
 4-4 石敷き道構 礎出土状況
 4-5 石敷き道構 出土遺物
 4-6 石敷き埋土 出土遺物
 図版5-1 建物3
 5-2 建物3 西より
 5-3 柱穴68より青花出土状況
 5-4 柱穴77 柱根
 5-5 建物4
 5-6 建物4 開元通宝 出土状況
 図版6-1 建物5、6 西より
 6-2 建物7 西より
 6-3 建物8 東より
 6-4 建物8 南より
 6-5 建物9 南より
 6-6 建物9 柱穴39 出土青花
 図版7-1 建物10 西より
 7-2 建物11 南より
 7-3 建物12
 7-4 柱列1 南より
 7-5 柱列2 西より
 7-6 柱列2 柱穴54出土咸平元宝
 図版8-1 井戸2 発掘状況
 8-2 井戸2 底の敷石
 8-3 井戸2 出土遺物
 8-4 井戸2 出土遺物
 8-5 井戸2 出土遺物
 8-6 井戸2 勝山中学校総合学習風景
 図版9-1 井戸3 南より
 9-2 井戸3 出土甕前焼水屋瓦
 9-3 井戸3 出土遺物
 9-4 井戸3 出土遺物
 9-5 井戸3 溝1 出土遺物
 9-6 井戸3 出土遺物
 図版10-1 溝1 北より
 10-2 溝1 底に敷かれた石
 10-3 溝1 北より

10-4 溝1 出土漆器碗
 10-5 溝1 出土斎巾、箸
 10-6 溝1 出土遺物
 図版11-1 溝2 竹管出土状況 東より
 11-2 溝2 土層断面
 11-3 溝2 折敷出土状況、銅製品
 11-4 溝2 木器出土状況
 11-5 溝2 出土青磁
 11-6 溝2 出土青磁
 11-7 溝2 出土灰釉碗
 11-8 溝2 出土灰釉碗
 図版12-1 溝3 北より
 12-2 溝3 下層礫
 12-3 溝3 南端
 12-4 溝3 鉄釵付皿出土状況
 12-5 溝3 出土遺物
 12-6 溝3 出土青花
 12-7 溝3 出土青花
 12-8 溝1、2、3周辺
 図版13-1 溝4、5、6周辺
 13-2 溝4 出土遺物
 13-3 溝5 出土基石、硯
 13-4 溝5 出土甕前焼
 13-5 溝5 出土土師器
 13-6 溝6 出土遺物
 図版14-1 L字溝
 14-2 L字溝 北より
 14-3 L字溝 出土遺物
 14-4 L字溝 出土遺物
 14-5 鍛冶炉¹ 北より
 14-6 鍛冶炉² 東より
 図版15-1 鍛冶炉³
 15-2 鍛冶炉⁴
 15-3 鍛冶炉¹、2、3、4 出土遺物
 15-4 鍛冶炉¹、2、3、4 出土遺物
 15-5 土塋²
 15-6 土塋² 出土遺物
 図版16-1 土塋³
 16-2 土塋³
 16-3 土塋³
 16-4 土塋³
 16-5 土塋³ 出土遺物
 16-6 土塋⁵
 図版17-1 集石道構
 17-2 集石道構 丸瓦出土状況
 17-3 柱穴71 発掘状況
 17-4 柱穴71 発掘状況
 17-5 柱穴78 発掘状況
 17-6 柱穴78 発掘状況
 17-7 柱穴78 出土土師器、銅銭
 17-8 柱穴78 出土土師器、銅銭
 図版18-1 その他の柱穴 柱穴38 柱根出土状況
 18-2 その他の柱穴 柱穴39 青花出土状況
 18-3 その他の柱穴 柱穴60 礎石

- 18-4 その他の柱穴 柱穴66 土師器、備前焼出土状況
- 18-5 その他の柱穴 出土遺物 銅銭は永楽通宝
- 18-6 その他の柱穴 出土遺物
- 18-7 東石垣の籠石垣
- 18-8 東石垣の籠石垣
- 図版19-1 井戸2西
- 19-2 井戸2西 杭出土状況
- 19-3 井戸2西 塗検出土状況
- 19-4 井戸2西 出土遺物
- 19-5 井戸2西 出土遺物
- 19-6 西溝 出土遺物
- 図版20-1 包含層 土師器出土状況
- 20-2 包含層 土師器出土状況
- 20-3 包含層 土師器出土状況
- 20-4 包含層 ロクロ土師器
- 20-5 包含層 ロクロ土師器
- 20-6 包含層 富原小学校体験学習
- 図版21-1 北石垣2 出土天目茶碗
- 21-2 白磁、青磁、志野焼
- 21-3 白磁、青磁、志野焼
- 21-4 柱穴104出土 青磁、青花
- 21-5 柱穴104出土 青磁、青花
- 21-6 青磁
- 21-7 青磁
- 21-8 青花
- 21-9 青花
- 21-10 白磁、青磁
- 21-11 白磁、青磁
- 図版22-1 ロクロ成形 土師器 小皿(上半)
手づくね 土師器 小皿(下半)
- 22-2 手づくね 土師器 大皿
- 22-3 手づくね 土師器
- 22-4 ロクロ成形 土師器 大皿
- 22-5 ロクロ成形 土師器 口縁外面
- 22-6 ロクロ成形 土師器 底部
- 22-7 ロクロ成形 土師器 板目
- 22-8 ロクロ成形 土師器 大皿 ヘラキリ痕と板目
- 22-9 ロクロ成形 土師器 大皿 板目
- 図版23-1 鉄槌付皿
- 23-2 小柄の柄部分
- 23-3 鉄釘
- 23-4 鉄製品
- 図版24-1 溝2出土 残存した漆
- 24-2 井戸2出土 残存した漆
- 24-3 溝1出土 残存した漆
- 24-4 柱根(1)
- 24-5 柱根(2)
- 24-6 井戸2西 杭
- 24-7 溝3 封じ土堤
- 24-8 溝3出土 板材 松
- 24-9 土壇5 曲物底
- 図版25-1 火鉢 外面のスタンプ
- 25-2 丸瓦
- 25-3 瓦(1) 右は江戸後期
- 25-4 瓦(2) コビキA(左)
- 25-5 獣骨(左)井戸2上層(右)溝5出土
- 図版26-1 町議会合同委員会視察 保存区域決定
- 26-2 町議会合同委員会現地視察
平成16年3月9日
- 26-3 現地説明会(1) 平成15年9月14日
- 26-4 現地説明会(2)
- 26-5 平成15年12月20日
雪の積った三の丸遺跡
- 26-6 高田城三の丸遺跡歴史公園完成式
平成17年1月30日
- 26-7 富原小学校6年生
- 26-8 お世話になったボランティアの人々
- 26-9 説明板
- 26-10 遺跡整備完成全景

第1章 三の丸遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は岡山県真庭郡勝山町勝山59番地に位置する。勝山町は北が湯原町・美甘村、東は久世町と接し、南は落合町と上房郡北房町と、西は阿智郡大佐町と接する総面積138.5km²、総人口約9000人の山あいの町である。旧美作国の西端、真鳥郡・大庭郡のほぼ中央部にあり、岡山県の三大河川の一つ



第1図 遺跡の位置

旭川とその支流の新庄川・月田川が形成した狭小な低地のほかは85%が山地である。

1030mの星山は四緑岩、名勝神庭の滝付近は石灰岩が分布し、神代の鍾乳洞「鬼の穴」まで続く。後谷に花崗岩が貫入している以外はほとんど古生代の三群変成岩が分布する。地形は星山・樞が山より南へ標高700mから次第に高さを減じて、月田川の南では約500mの定高性を持つ吉備高原面が広がる。旭川・新庄川・月田川とも貫入曲流がV字谷を形成し、勝山市街地付近から下流には沖積低地が広がり始め、流れを東に変え、久世から南の落合低地へつながっていく。山麓部には河岸段丘が残り、水田や集落に利用されている。且地区は文字通り段丘で標高177mの平坦面をなし、江戸時代の武家屋敷が軒を連ねていた。本遺跡は標高174mの低位段丘上に所在する。背後の高田城は変成岩よりなる標高322m・南側の太鼓山(260m)の山麓で中世山城が築かれている。

勝山町の埋蔵文化財は前述のような地形であることから、隣接する久世町に比べてその数は少ない。しかし、中世以後は政治的な中心地となる。以下、勝山町の歴史を述べる。

旧石器時代については、確認されていないが、富原奥の標高700mの緩斜面から始良火山灰(AT)層が発見されていることから考えると今後発見される可能性がある。旭川の最上流の森山盆地・中和村では後期旧石器が出土する遺跡が多い。

縄文時代については、岡山県立勝山高等学校敷地から刷り消し縄文を施した後期の土器が一点出土していた。出土地点は旭川の旧河道のほとりである。最近になって、且地区から昭和40年に前期の特徴をもつ刺突文を施した土器が出土していたことがわかった。刺突文の出土例は森山原の戸谷遺跡、中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査で大佐町戸谷遺跡・新見市青地遺跡にある。

弥生時代については岡遺跡から前期の木葉文を施す壺型土器片が出土している。旭川流域では前期の土器は数例しかなく、特に木葉文は初見である。落合町遺跡から前期末の壺型土器が出土している。美作では前期の遺跡は少なく、中期末から後期になると遺跡数が増加してくる。沖積低地の周辺の台地、丘陵上に点在する。勝山町では陣山遺跡・太鼓山遺跡・打角遺跡・江川遺跡・樞の木遺跡・

正吉遺跡、月田地区では原美尾遺跡・石原遺跡から土器が出土している。弥生終末期になると月田郷の内北遺跡では集落から少し谷をさかのぼった川のそばで祭祀が行われ、丹塗りの壺・高杯などが出土した。

古墳時代については旭川下流の落合町川東東塚が全長62mの前期の前方後円墳がこの地域で最も古い首長墳である。落合町には280基、久世町225基、湯原町には50基の古墳が確認されているのに比べ、勝山町においては古墳15基が点在し、上江川古墳群は4基で構成される以外は群集しない傾向がある。低地が少なく、農業生産地に恵まれなかったことに起因すると思われる。それらのうちで最も古い古墳は富原古呂々尾中にある中尾神社裏古墳である。直径15m高さ1.5mを測る。月田原美尾池遺跡から五世紀末の須恵器坏身・坏蓋が出土している。その他は横穴式石室墳である。比高20mの独立丘陵上に築かれた小山古墳は直径15mの円墳で長さ6.5m、幅2.1mの石室を持つ。6世後半から7世紀の須恵器は町内各地から出土している。

日本書紀の欽明天皇16年(555)吉備5郡に白猪屯倉が置かれたとある。大庭郡の一部が比定されている。奈良時代の和銅3年(713)備前国のうち英田・勝田・苦田・久米・大庭・真嶋の6郡を削いて、美作国が成立した。真鳥郡衙は鹿田郷の郡遺跡に置かれた。勝山町は真鳥郡高田郷・月田郷・井原郷と大庭郡の一部の範囲である。奈良時代の遺物には柴原から骨磁器が出土している。

しかし、それぞれの郷の具体的な状況は明らかではないが、平城宮二条大路木簡に「美作国真鳥郡中男作物塙栗斗」天平十年「美作国大庭郡苗十斤 籠十両」、長屋王家木簡に「美作国真鳥郡□□里□□ 和銅六年十月」などから延喜式にみる大庭・真鳥の特産物が都へ送られたことを知ることができる。また、続日本紀神亀5年(728)4月の条に真鳥・大庭二郡が嗜米を運ぶことに困難なので、綿・鉄に換えるよう求めていることは両郡ではタラ製鉄が盛んに行われていたことをうかがわせる。町内中央部の後谷地区に花崗岩地域があり、夥しい鉄滓が土師器などと散乱している例もある。また、元慶元年(877)の条には真鳥郡加夫良和利山・大庭郡比智奈井山などから銅を採ったと記し、加夫良和利山は久世町との境にある「かぶら山」か、三田の観音寺周辺の「かぶら山」と考えられている。平安時代には郡内に荘園が置かれた。高田庄・美甘庄・建部荘・河内荘など12~15世紀まで荘園が立った。

鎌倉時代には梶原景時が美作の守護になり、失脚した後は和田義盛に代わった。1221年の承久の変に敗れた後鳥羽上皇は隠岐島へ流されるとき、大庭・真鳥辺りを通ったといわれ、色々な伝説が残っている。承久の変後、公家や上皇方の武士たちの所領に新補地頭として御家人が派遣された。美作においても高田庄には三浦氏・英田河合庄には渋谷氏らが派遣されたと考えられている。三浦氏は今の神奈川県三浦半島を本貫地とする鎌倉幕府の最有力御家人であったが、北条氏が進める専制にとっては邪魔になり、宝治3年の北条時頼が仕掛けた宝治合戦で三浦義村らが滅ぼされた。三浦一族のうち佐原氏は生き残り、やがて三浦を名乗ったのであろう。越後・豊後・土佐などにも地頭として派遣されたらしい。その後三浦氏の名前が文献に現れるのは、建武3年(1335)後醍醐天皇や新田義貞と対立した足利尊氏が九州で力を蓄えて瀬戸内海を東上する途中に、美作国の三浦介(三浦高継)に美作の新田勢を退治するよう命令している。三浦介は淡川の戦に参加していることが太平記に書かれている。

文和2年(1353)三浦下野守は高田庄甘波村(神庭)の替えとして、土佐国吾川庄上谷川村を土佐国吸江寺に寄進している。延文5年(1360)三浦貞宗が高田庄の地頭として高田城を築城したといわれているが、同年貞宗は妙見宮に腰刀を奉納している。その年伯耆の国の守護山名時氏は美作へ侵入



写真1 鋳口

ら尼子晴久が美作へ侵略しはじめ、高田城への数度にわたる攻撃でそのたびに落城と復活を繰り返した。その間貞貞・貞久・貞勝・貞盛が城主になった。そのなかで、永禄8年(1560)には三村元親の攻撃で落城し、城主貞勝が自害し、貞勝の室は備前にのがれて、宇喜多直家の正室となり、秀家を生むことになる。永禄12年(1568)毛利氏に攻められて貞盛は自害し、元亀元年(1570)山中鹿之助の援助で貞貞が高田城を復活したが、天正3年(1574)宇喜多・毛利氏の連合軍によって落城して三浦氏は滅亡した。

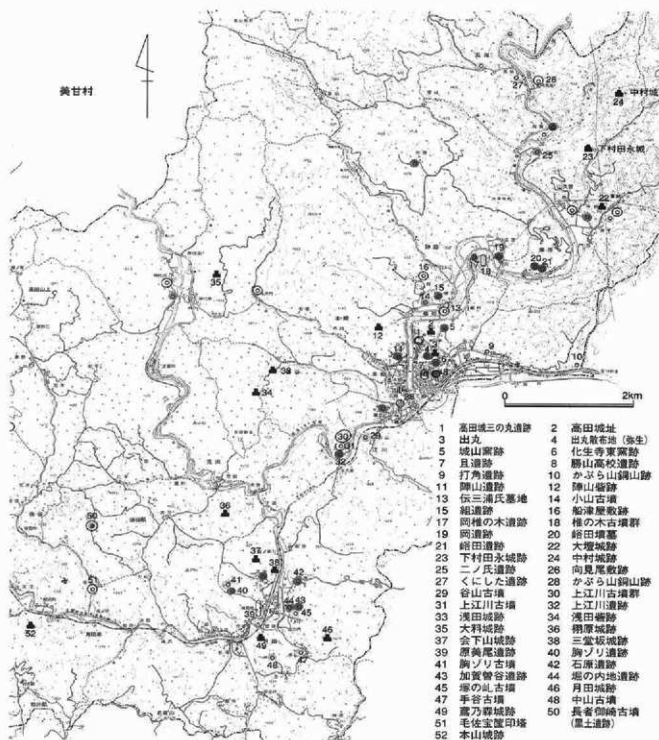
やがて、宇喜多直家は織田信長の旗下に属し毛利氏と対立し、天正10年(1582)織田信長は豊臣秀吉に毛利攻めを命じ、秀吉は備中高松城を水攻めで落とすときの和議の条件に高梁川以東は宇喜多氏が領することになったが、毛利氏所領の矢筈城・岩屋城の武将や高田城を守っていた毛利の武将楠崎元兼らは激しく反発し、各地で小競り合いが生じたが、退去したのは天正13年(1585)になってからである。その後を受けて、宇喜多氏は三浦氏の家臣であった牧氏を高田城の城番としたようである。しかし、慶長5年(1600)関が原の戦いで宇喜多秀家は石田三成に与して破れたために、小早川秀秋が美作を領有したが、秀秋が病死し2年後、森忠政が入部した。森氏は津山に城を構え、高田城には各務氏、続いて大塚氏が城番に入ったといわれている。森氏は元禄11年(1698)改易になり、勝山は幕府領となり、高田代官所が支配した。明和8年(1764)三河国西尾から三浦明次が真鳥郡と大庭郡の一部を2万3千石で領する。明次は高田を勝山に改め、勝山城の西麓に先代三浦氏の屋形を踏襲するように屋形を構えた。そして、明治までこの地を治めた。



写真2 墓石

第1章参考文献

- 1 岡山県教育委員会 「改訂 岡山県遺跡分布図」(第2分冊 真庭地区) 2003
- 2 梅松論
- 3 「太平記」『古典日本文学全集』19 筑摩書房 昭和36年
- 4 勝山町史編集委員会 『勝山町史 前編』 昭和49年
- 5 久世町教育委員会 『久世町史 資料編』 久世町 2004
- 6 久世町教育委員会 「羽庭城」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告3』 1999





周辺の遺跡分布図1/5000

- | | |
|------------|----------------|
| 1 高田城三の丸遺跡 | 2 高田城 |
| 3 高田城出丸 | 4 妙見宮 |
| 5 三浦明次屋形跡 | 6 須恵器窯跡 |
| 7 縄文土器出土地 | 8 縄文土器、弥生土器出土地 |
| 9 出雲往来 | |

第2章 調査および報告書作成の経緯

第1節 調査の契機と経過

勝山町は新たに職員駐車場確保のために平成14年から役場北側の空き地を含む地区を買収していた。特に空き地は高田城の西の麓にあり、城内「三の丸」といわれている。江戸時代の明和年間、勝山へ入部した三浦明次が館を築いたことに関わる地名である。当時の絵地図にも大手御門・書院・城内に祀られた妙見宮（速日神社）なども描かれている。空き地は1.5mの高い石垣上800m²の畑地と一段低い畑地には埋蔵文化財包蔵地の可能性が感じられた。筆者は勝山の歴史研究の中で高田城を築城したといわれる三浦氏の居館の位置を探していたこともあり、当該地の確認調査を町当局に申し入れ、了解を得た。5月1日岡山県教育委員会文化財課尾上主事に現地を査察していただき、確認調査の必要を主張された。これを受けて町文化財保護審議会で確認調査が承認された。6月24日から3日間確認調査を実施した。第1トレンチから建物の礎石や石垣を検出し、瓦・天目茶碗・志野焼・青花などが出土したことから、遺構は室町時代の武家の屋形という評価がされ、保存の必要性が叫ばれてきた。

保存の建議は文化財審議会から教育委員会に提出され、教育委員会から勝山町長へ保存の要望書が出された。しかし、駐車場確保という当初の計画を進める声も強く、勝山町議会総務・文教厚生委員会で議論され、保存するかどうかの結論は調査を継続してその内容によって、合同委員会で協議して出すことになった。この間、新聞では数回報道され、町民の関心が高まってきた。9月14日調査対象面積の半分が終わった時点で現地説明会を開き多くの見学者の参加をみた。調査は保存するかどうかの議論のため9月半ばから1カ月以上中止、10月下旬から調査を再開し、1月初めから2月末まで中止、2月末から3月末日まで補足調査を続けて終了した。調査は7月27日から平成16年3月までの9カ月のうち、延べ6カ月間であった。

日誌抄

2003年

4月23日 城内駐車場用地確認調査について

4月24日 城内駐車場用地の調査について

5月1日 県文化財課 尾上元集氏 役場裏駐車場用地視察し、トレンチ調査の必要ありと指導

6月3日 器材借用書（古代吉備文化財センター宛）

6月5日 「三の丸遺跡」確認調査打ち合わせ
可能務課

6月12日 「三の丸遺跡」写真撮影

6月13日 県古代吉備文化財センターへ 発掘用器材借用

6月23日 三の丸遺跡確認調査

6月24日 三の丸遺跡確認調査は重機によるトレンチ調査とする

上段に第1～第3トレンチ、下段に第4・5トレンチ設定

第4トレンチ・第5トレンチとも表土下には精選された砂利層、遺構検出されず

6月25日 三の丸遺跡確認調査

第1トレンチ礎石検出

6月26日 三の丸遺跡確認調査

第2トレンチ・第3トレンチ 石垣検出
水汲み場か

6月27日 県文化財課 尾上氏の指導

7月4日 町文化財保護審議会 三の丸遺跡見学 協議

7月22日 三の丸遺跡の今後の調査について

7月24日 三の丸遺跡発掘調査

	1区 第1トレンチ北の排土	9月16日	排水溝・西溝・柱穴など検出掘り下げ 柱根が残った柱穴2
7月25日	第1トレンチ北の排土	9月17日	排水溝西～南の柱穴検出掘り下げ 上層断面土地下の柱穴104より明代 青磁片出土
7月28日	1区 井戸1検出	9月18日	柱穴など平板測量 昨日の柱穴より青磁出土 全景写真撮影(当分の間作業中止)
7月29日	1区 排土		来客 松浦委員長
7月30日	石垣追求	10月6日	富原小6年三の九道跡見学 平板測量(石垣北部分)
7月31日	1区 集石遺構検出	10月17日	橋本調査員が町議会合同委員会出席(三の九道跡の説明)
8月1日	1区 石垣1南へのびる	10月27日	三の九道跡保存が確定 調査の継続承認 発掘調査再開 重機による表土除去 西端北端部
8月5日	集石遺構断面実測 軒丸瓦出土 県文化財課 尾上主事 来訪	10月28日	北端表土造成土除去 西南部地山検出
8月7日	教育委員視察	10月30日	重機による表土除去(北端 西部) 西端に溝2検出
8月11日	1区 南西部分排土 石垣検出 石段か	10月31日	北端に溝3検出 北端地山検出(開元通宝出土)
8月12日	三の九道跡整理 南西部に石段 三段～四段	11月3日	勝山中3年生徒5名が発掘体験学習 北端部分井戸2検出 溝上層より青磁 土師器出土
8月18日	南西石段 石垣検出 来客 岡山理科大 白石氏 初本議員 福井議員 松本議員	11月4日	井戸2掘り下げ 上層より土師器 北端地山より溝・鍛冶炉2検出 掘り下げ
8月19日	南西部石段検出 更に二段あり 来客 池上博氏(久世町教委)	11月5日	井戸2より横溝 漆喰焼 木製品出土 底に河原石を敷く 深さ1.5m 石敷き遺構より古い
8月20日	礎石建物検出 石垣下黒褐色粘土上層より 備前焼 天目茶碗 出土 来客 白石純氏 松岡圓明氏 辻晃男氏	11月6日	溝4から漆喰碗破片、青磁片出土 鍛冶炉2、溝4掘り下げ 焼土掘り下げ
8月21日	南西石垣下 柱穴から鉄製品 土師器出土 来客 松尾秀堂氏	11月7日	溝4、溝5検出 焼土面 上段柱穴検出一建物4
8月22日	南西石垣下柱穴掘り下げ 備前焼 摺り鉢 天目茶碗片	11月12日	建物4柱穴掘り下げ 溝5掘り下げ、小型硯 獣骨 木椀出土
8月25日	町議会議員見学(総務委 文教委)	11月14日	富原小6年生発掘体験学習 児童9名 取材—NHK津山支局、山陽新聞久世支局 浅野町長
8月27日	南西下層 溝検出 砂利層	11月17日	鍛冶炉2実測 溝4掘り下げ 青灰色粘土層(包含層)掘り下げ 土師器多数
8月29日	南西下層の柱穴 排水溝(石組)北西石敷検出 来客 白石氏 池上氏 谷岡氏	11月18日	鍛冶炉2掘り下げ中央部船型の焼土面あり 溝5掘り下げ石が多い 石敷き遺構北東の焼土検出(鍛冶炉3)
9月1日	溝(石垣 石敷き)の掘り下げ 砂利層から木片 竹片 陶磁器片	11月19日	包含層掘り下げ土師器多数 鍛冶炉3掘り下げ
9月3日	石敷きの広がり西へ 来客 中島道夫氏 浅野町長	11月21日	鍛冶炉3掘り下げ
9月4日	石敷き検出一南側に溝(東西)下層一排水溝 石敷き溝掘り下げ	11月24日	井戸2西砂利層検出
9月5日	溝(石垣 石敷き)南半掘り下げ 底面に河原石を敷く 下層排水溝 黒漆塗検出土 巻貝殻出土	9月25日	溝5掘り下げ 井戸2西の浅い溝掘り下げ
9月6日	山陽新聞 真庭園版に三の九道跡の記事載る	9月26日	県文化財課 尾上主事の指導 保存にむけて 南端部の調査
9月8日	南西部平板測量 見学者多数		
9月9日	平板測量 西端排土 県文化財課尾上氏		
9月10日	平板測量 石敷き遺構 来客 白石氏 初本議員		
9月11日	石敷きの西 石積検出		
9月12日	溝の南端より進入り土師器出土		
9月14日	現地説明会 参加者約110名		

第2章 調査および報告書作成の経緯

12月1日	溝6掘り下げ(著出土) 西端に列石あり 井戸2西の乱石を除去	3掘り下げ	
12月2日	溝6西端掘り下げ 井戸西の乱石の下に浅い溝(砂利層)より 土師器出土東溝に繋がる 石敷き遺構の西に崩落した河原石	3月9日	北端 溝4・5・6より丹塗土師器、掘り 鉢 鉄製品 柱根 溝6は溝5を埋めるため石列をつくったと 思われる 総務 文教合同委現場視察 保存区域の決 定
12月3日	溝6西端周辺柱穴掘り下げ 石敷き遺構の 石垣検出 溝3検出 平板測量	3月10日	北石垣西の建物4の柱穴検出 溝4・5・ 6の延長部分写真
12月4日	平板測量 溝3掘り下げ 長方形 浅いV 字 板材 平瓦出土 井戸2西柱穴掘り下げ	3月11日	溝2掘り下げ、砂利層より遺物 丹塗板 丸瓦出土 北石垣下の土壌3より土師器 河原石出土
12月5日	溝3掘り下げ 板材長さ182cm幅25cm松材 井戸2西柱穴 平板測量	3月12日	溝2掘り下げ砂利層より 硯石 漆塗椀 陶器出土 北石垣下土壌3写真
12月8日	溝3の板、瓦の写真・実測 柱穴38からたい柱根検出	3月15日	溝2掘り下げ(竹管検出)土壌2掘り下げ 北石垣2より備前焼
12月9日	溝3周辺平板測量 柱穴掘り下げ	3月16日	溝2掘り下げ 北石垣1実測 北石垣2検 出備前焼に塗印 来客 横山氏(県立博物館)
12月15日	西端部分 柱穴検出 溝3掘り下げ 銅製品出土(鉄製付鼠)	3月17日	溝2土層断面実測 アカニシの甃出土 西 端柱穴掘り下げ
12月16日	北西部平板測量	3月18日	溝2掘り下げ 写真 土壌5掘り下げ(中 央部黒土粘土) 土壌2掘り下げ
12月17日	平板測量 溝3掘り下げ 溝2掘り下げ	3月19日	土壌4掘り下げ 西端柱穴掘り下げ
12月18日	溝3掘り下げ 南端に土留め板検出 溝2掘り下げ 柱穴掘り下げ	3月25日	柱穴71掘り下げ集付、土師器出土 土壌5 曲げ物底 溝2実測
12月19日	溝3掘り下げ	3月24日	柱穴78より曲げ物に入れた永楽銭 12枚出 土 柱穴71より土師器 青花出土 土壌5 青灰 色粘土より木片石出土
12月22日	積雪40cm 除雪	3月25日	土壌5掘り下げ 柱穴71写真 土師器 染 付取り上げ 石敷き遺構整備完了 来客 澤田秀実氏(作陽大学)
12月23日	写真撮影準備 除雪	3月27日	石垣実測 井戸3掘り下げ底まで約3.5m 備前焼出土
12月24日	写真撮影	3月29日	井戸3掘り下げ 木片 青磁 糸切底陶磁 竹 柱穴78掘り下げ 曲げ物に皿2枚をかぶせ る 一文銭は12枚 土壌3土器取り上げ 溝2縦断面図
2004年		3月30日	土器整理
2月26日	三の丸遺跡調査再開 南端部立木伐採 表土除去 東石垣一部検出	3月31日	北石垣整備
2月27日	南端部陥石垣検出 土塁の可能性あり 西 端部柱穴掘り下げ T54から咸平元宝出土 溝2掘り下げ		
3月1日	南端石垣追求 南端柱穴掘り下げ 柱穴46 より灯明皿出土		
3月2日	南端陥石垣清掃 西端柱穴掘り下げ 柱穴55-2 永東通宝 出土 来客 井手卓誠 真庭振興局長		
3月3日	西端柱穴掘り下げ 雛祭りのため見学者約 40名		
3月4日	西端柱穴掘り下げ 北石垣検出 埋土より土師器 小刀柄出土 見学者約80名		
3月5日	北端表土除去 溝4・5・6の延長部分と 井戸3検出 西端柱穴掘り下げ 120名以上見学		
3月6日	見学者 約80名		
3月7日	見学者 約80名		
3月8日	北端 溝4・5・6延長部掘り下げ 井戸		

第2節 調査および報告書作成体制と経過

調査の経過は第1節の通りである。調査体制は緊急的であったこと、当初の計画を阻害する調査であることなどの原因で調査作業員は歴史に興味がある同好者の自主的参加に頼る形がとられ、予算は重機の借上げ費用以外にはあまり計上されなかった。調査に必要な器材は岡山県古代吉備文化財センターで借用した。調査は岡山県教育庁文化財課の指導で、嘱託職員橋本が行った。

平成15年度 勝山町教育委員会教育長 水島康裕
 教育課長 稲田 裕
 課長代理 中芝通雄
 嘱託職員 橋本惣司（調査担当）

平成16年度 勝山町教育委員会教育長 水島康裕
 教育課長 稲田 裕
 課長補佐 谷口誠一
 嘱託職員 橋本惣司（調査および報告書担当）

平成16年4月から補足調査を続けた。特に遺構の実測や遺跡全体測量は一人体制では十分にできない状況にあったため全体測量は測量会社に委託した。補足調査が完了したのは5月であった。引き続き報告書作成のための遺物整理を始めた。岡山県地域創生支援事業「フロンティア21」の認定を受けて、遺物整理のための人件費が計上された。遺物の水洗、接合は調査が中断された平成15年9月19日から10月24日、平成16年1月5日から2月25日の間に行い、5月以後水洗、接合、ラベル書き込みを行った。横野昭子、横野幸子両氏には負うところが大きかった。また、実測図・測量図・写真の整理、遺物の実測、写真撮影を継続した。陶磁器類のうち30点の実測・トレースは株式会社フジテクノに委託した。土師器など100点以上のトレースを落合町教育委員会切明友子・安田佳代氏に依頼した。11月印刷業者に株式会社ぎょうせいを指定した。

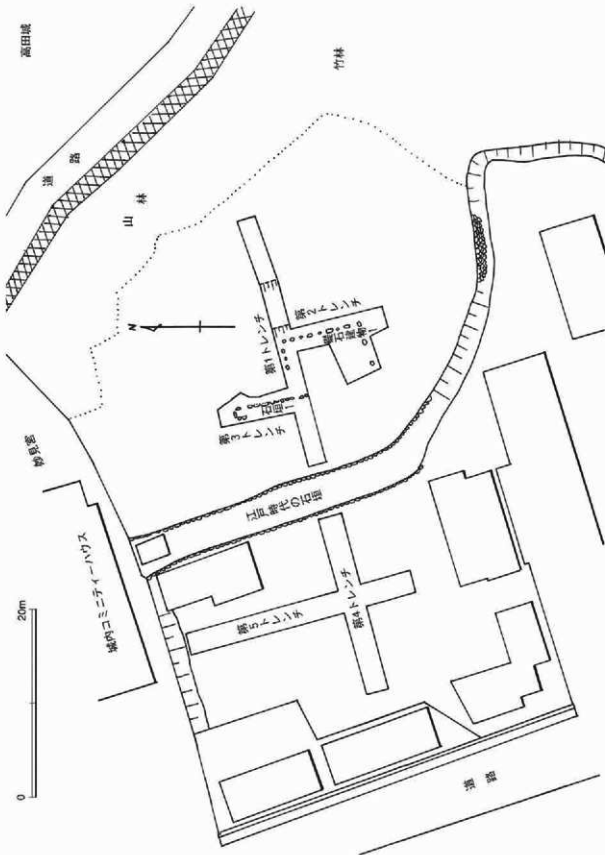
第3章 発掘調査の概要

第1節 確認調査

勝山町は合併に伴う庁舎に関して、職員駐車場用地として取得した。しかし、用地内は高田城の麓であり、台地上は東御殿跡の小字があること、貞治三年銘の鯉口が出土していることなどから、文化財包蔵地と判断し岡山県文化財課の指導の下に6月24日から確認調査を実施した。

石垣上の畑地に第1から第3トレンチ、下段の畑地に第4、5トレンチを設定した。はじめに南北の第4トレンチを幅2m、長さ25mを重機によって掘削した。約20cmの表土を除去すると精選された川砂利が現れ、遺構も遺物も検出されなかった。第4トレンチに直交する東西の第5トレンチは幅2m長さ20m、表土下から川砂利のみが現れた。川砂利を一部深く掘ったが1.5m以上堆積していることがわかった。したがって下段には遺構がないと判断した。引き続き上段の畑地に第4トレンチの延長上に第1トレンチを設定した。長さ20mのうち東端の5mは耕土の下は角礫混じりの地山であった。さらに一段下の畑地では耕土下の角礫混じり地山に柱穴が掘り込まれていた。遺物もなく時期は不明である。さらに一段下の畑は平坦であり、約20cmの耕土の下に、10cmの角礫混じりの黄褐色土が広く堆積している。造成土の下に茶褐色土が15～20cmほど堆積して、遺物を含んでいる。備前焼、土師器、天目茶碗、瓦などが出土した。堆積層は西へ厚く、石垣1の西は1m近い厚さになる。その下に厚さ5cmの黒褐色土があり、遺物を含む。礎石建物1を検出した。礎石建物1は石垣を築いて造成土で平坦面を作っており、石垣の下に遺物包含層が見られる。第1トレンチで3個の礎石と石垣を検出した。直交する南北の第2トレンチは礎石を追求する形で第1トレンチから南へ10m設定した。その結果、東柱の礎石を含めて7個4間分の礎石を検出した。第3トレンチは石垣を追求する形で第1トレンチの西端から北へ10m設定した。石垣は北へ続くことがわかった。北端では西側にも石垣が築かれ、50cm角の水溜状を呈していた。確認調査の結果、第1トレンチから出土した遺物は備前焼1の壺口縁部は4cm折り返し、内外面をなでて仕上げる。胎土に砂粒を含んで堅く焼きしめられ赤褐色を呈する。15世紀末の所産と思われる。志野焼2の向付けは底部を欠くが推定口径約10cm、残存高5.3cmを測る。口縁部内面は垂直に立ち上がり、外面少し下には幅1cmの溝状のえぐりが廻る。全体に乳白色で亀甲梅花文が描かれている。16世紀後半の所産であろう。肥前系唐津の灰桶3の小屋は推定径4cmの高台は、削り出していて軸がかかっている。見込みに砂目が残っている。17世紀初頭の所産である。その他鉄釘2本4・5平瓦、天目茶碗片も出土した。

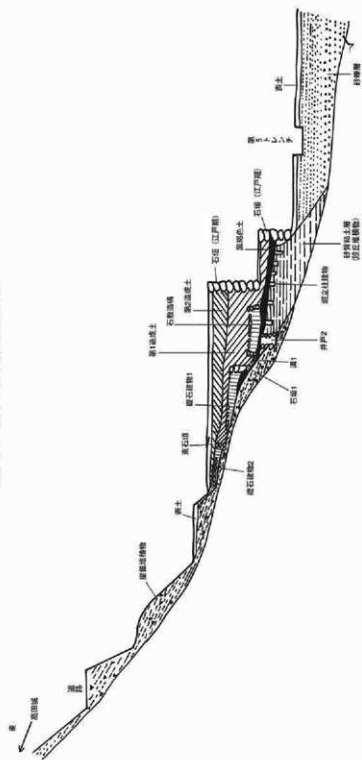
その結果、礎石建物・石垣とその立地から高田城主三浦氏に関わるものが考えられる遺跡であり、勝山町にとってかけがえのない遺跡であると判断して、町文化財審議委員会から勝山町教育委員会へ保存の建議をし、同教育委員会から勝山町長あてに保存の要望書を提出した。しかし、当初の計画を推進する意見、遺跡の評価を認めない意見と遺跡の保存と活用を主張する意見が対立したが、ようやく町議会は保存を決定した。7月から全域調査を開始し何度かの中断を経て、通算6ヶ月間実施した。遺跡の調査面積は約1000㎡。



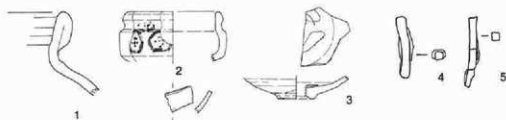
第2図 確認調査全体図



第3-1図 第1トレンチ土層断面図



第3-2図 土層断面模式図



第4図 第1トレンチ出土遺物



第5-1図 遺構全体図

第2節 遺構・遺物の概要

1 石垣と礎石建物

① 石垣・石段

石垣1は第1トレンチの表面下1mで検出した。南北25m、高さは中央の溝1部分で1.3m、北端では0.5mで、溝1部分は1m以上の大きい川原石や山石を立て野面積みにしている。石垣1は黒褐色土の上に築かれ、黒褐色土には室町時代の遺物を含んでいる。

南端には5段の石段が作られている。幅2.5mで蹴上げは20cm、3段目は40cm、4段目は段面が広く、踊り場状をなす。南端には隅石を立てているが、石垣1はさらに南の崖まで伸びる。その後新たに石垣に対して直角に西へ2mの脇石垣が取り付けられている。

石段の埋め土から出土した備前焼6の壺口縁部は玉縁をなしてやや外反して立つ、肩が張り、胴部内面はヘラケズリを施す。焼成は堅緻で灰色を呈する。15世紀初頭に比定できる。掘り鉢7は7条のスリ目が交差し、16世紀後半。土鍾8・9は重さ5～6gで硬く焼かれている。

石垣1を被覆する褐色土から出土した遺物は多い。土師器は口径18.6cmの大皿で、ロクロ成形である。底部にはヘラキリ痕が残って、内外面はいねいにナデで仕上げる。瓦質土器1は火鉢で、蓋受けの下部に花形スタンプが廻っている。化粧土を塗って仕上げ、灰白色を呈する。備前焼2は小型徳利の口縁部、3は口径18.5cm、器高4cmの皿、底部から体部外面はヘラケズリ、内面からやや外反する口縁部をナデで仕上げる。16世紀末か。4は口径26cmの小型掘り鉢で内外面暗褐色、スリ目が10条施され、口縁部は内傾し、16世紀前半に属する。重ね焼。5は赤褐色を呈する。青磁11は口径10cmの小皿、碗12・13は淡い緑色で底に砂目が見られる。瀬戸美濃焼である。青花碗14は外面に小紋が描かれた15世紀後半のC群、17・18は口径12.6cm、蓮子碗の破片か。15はクリーム色を呈する。16は青花の小鉢である。天目茶碗6は黒褐色、10は茶褐色で胎土は灰白色。16世紀。軒丸瓦7は瓦当の直径14cm厚さ1cm、巴と4個の珠文が残る。丸瓦8は火をうけて赤褐色、玉縁は3cmで内面には絞り痕がみられる。平瓦9は長さ19.5cm厚さ1.5cm、胎土には砂粒を含み、表面は横、裏面は縦ナデで仕上げる。土鍾は19～24、大型のものは長さ6.8cm重さ49gである。25～34は鉄器である。25は小札で6ヶ所に穴が穿たれている。28は刀子の茎で、あとは釘、鉄片である。

② 礎石建物1

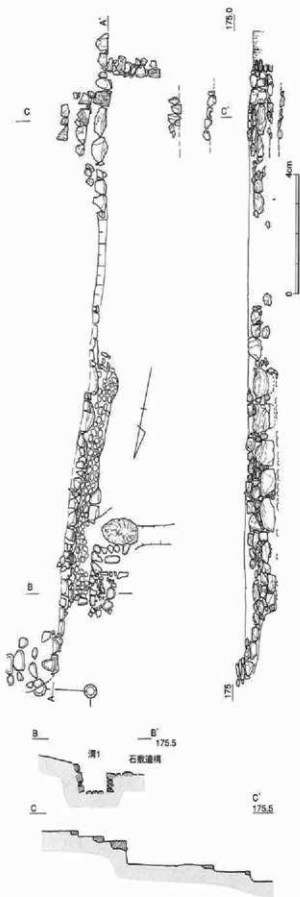
礎石建物1は石垣1で造成された面に13個の川原石の礎石を配した4間×3間の南北棟の建物で、第1トレンチの表面下1mで検出した。礎石はすべて平たい面の川原石が使われており、大きい礎石の柱間は約7尺(210cm)で間に中間に束柱の礎石を配する。発掘区では中心的な建物であるが、四方への広がりもなく規模から考えれば約40㎡しかない上礎石から見ても間取りが単純である。この建物の性格については不明である。方位はN E 16-02°で石垣1・東石垣・礎石建物2とはほぼ平行している。出土遺物は土師器1は口径11.5cm回転台成形で堅く焼かれて赤褐色を呈し口縁部にはスガが付着している。備前焼2は掘り鉢の注口部分堅く焼きしまって赤褐色を呈する。16世紀後半。唐津焼3・4の灰軸はロクロ成形で、高台はケズリ出し、砂目が残る。17世紀初頭か。礎石建物1は瓦葺で巴の丸瓦5は厚さ2cm内面には斜めのコビキ痕Aみられ、16世紀後半に属すると思われる。

③ 東石垣と礎石建物2

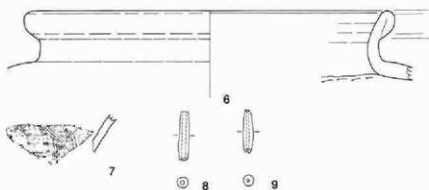
東石垣は南北約10m、高さ0.8mを測り、1.5m内側に礎石建物2がある。地表面から厚さ20cmの耕土を除去して検出した。川原石と山石を混ぜて野面積みにしている。石垣1と同じような積み方である。礎石建物2を建てるための石垣で、礎石建物1や石垣1と平行して、方位はNW14度である。おそらく同じ時期に築かれたものであろう。南端には直角に西側へ伸びる石垣と土塁状の高まりがあるが、後に土塀が作られたと思われる。

礎石建物2は布状の礎石で南北4m、東西3m以上を測る。石垣の内側1mに平行する5mの布状礎石とそれに直交する礎石は山割へ4m以上を測る。背後から約80cmの堆積土がかぶっている。建物の規模は南北7m東西4m以上である。布状の礎石はあまり例がないが、江戸時代初頭にはすでに現れていると思われる。

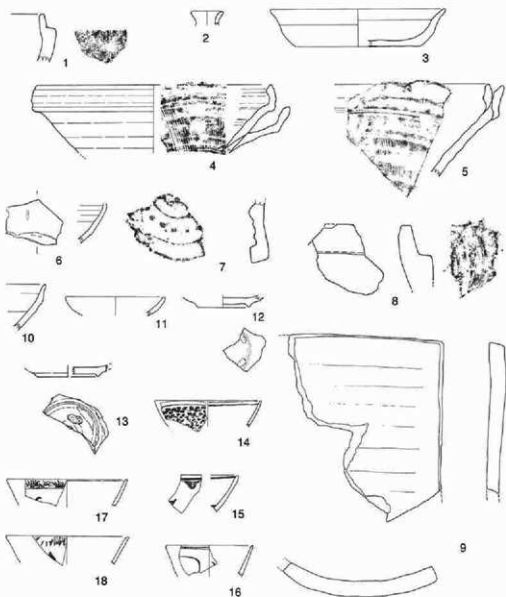
東石垣の埋め土から土師器1はロクロ成形の口径16cm器高2.7cmでやや厚みがある口縁部は外傾する。外面はロクロ痕が顕著で、内面は丁寧にナデている。胎土には砂粒を含まず堅く焼かれている。底部はヘラキリしている。2もロクロ成形口径14cm器高1.8cm、底部にヘラキリ痕、緻密な胎土は堅く焼かれている。丸瓦3は厚さ2cm胎土は灰白色、内面はコビキ痕がある。16世紀後半から江戸時代初期と思われる。



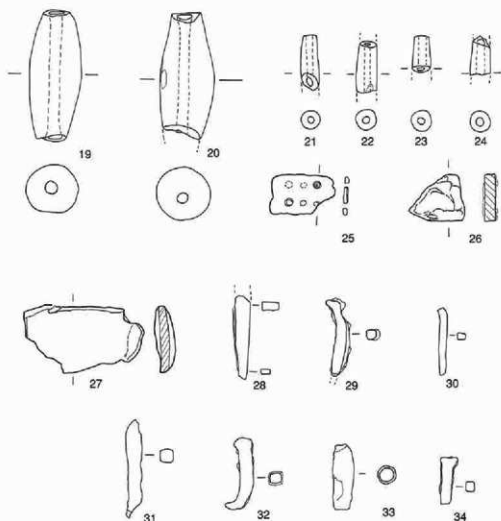
第5-2図 石垣1、石段実測図



第6-1図 石段埋土出土遺物1/4 (8・9は1/2)



第6-2図 石塚1埋土出土遺物1/4

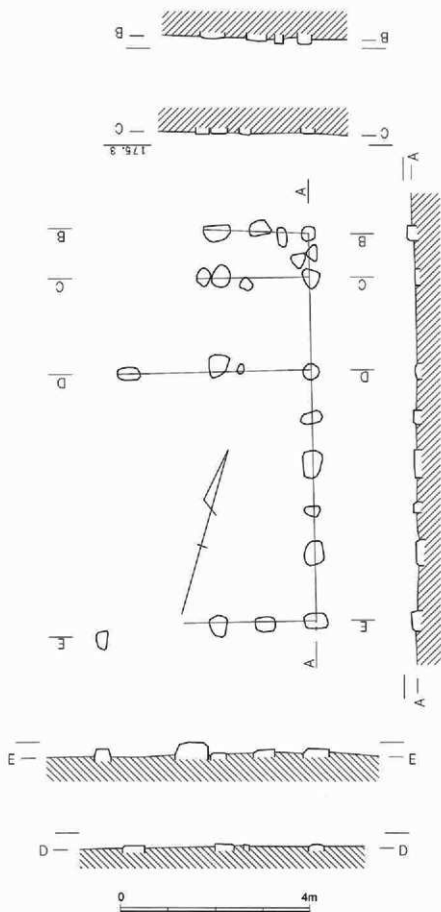


第6-3図 石垣1埋土出土遺物1/2

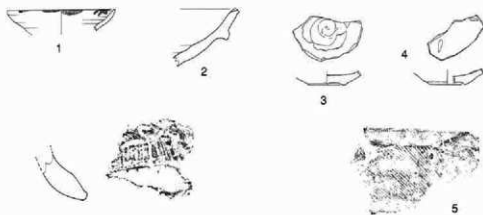
④ 北石垣

北石垣1は建物4の東、石垣1の北に約4mを検出したが、さらに4m以上北へ伸びていたが崩れたため修復した。したがって10m近く築かれていた。高さ70cmで川原石と山石を混せて、やや粗い積み方は他の石垣と同様である。石垣1とは不連続で、前後関係は不明だが時代的にも差があると思われる。建物4の廃絶後、土壇3を埋めて築かれている。北石垣1の東1mに平行して4mの北石垣2を検出した。

遺物は北石垣2の埋め土から備前焼1は大妻の胴部外面に△△の窠印が刻まれている。該当する例が不明である。天目茶碗2はやや小ぶりで口径10.4cm器高6cm内外面は漆黒で、軸が胴下部に厚くたまっている。胎土は灰色。北石垣1の埋め土出土の土師器3は直径15.2cm器高2.6cm底部に指圧痕があり、内外面とも丁寧なナデで仕上げている。4は灯明に使われ、口縁部にススが附着していた。備前焼5の摺り鉢は粗い5条のスリ目はよく使われて摩滅している。小柄6の柄部分は約10cm銅を巻いており、刃部は欠けている。鉄製品7は一辺5mmの断面形をなす。



第7図 礎石建物1実測図



第8図 礎石建物1出土遺物実測図1/4

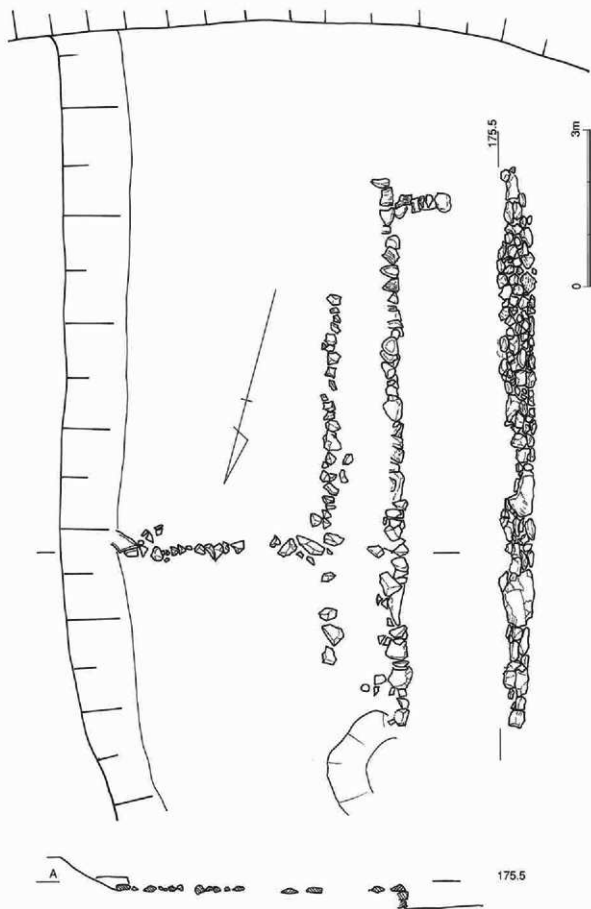
⑤ 石敷き遺構

石垣1の北部分の西側に川原石を敷き詰めた遺構である。この遺構は東西7.5m、南北4.5mをはかり、4面ともに石垣を築き区画している。東は溝1と南は溝2と西は溝3と0.5～0.8m高く、土を盛り上げている。東西に長い石敷き遺構は石垣1に直交する。方位はSW12度である。溝1を共有していることなどから、礎石建物1と同じ時期と思われる。床面は大小の川原石を敷き、間に小さな石を埋める。北東部の0.7×0.5mの範囲には石を敷いてなく、それに接して焼土と灰の層があり、熱を受けた川原石がある。南辺には幅30cm、深さ20cm前後の排水溝は西の石垣を暗渠で潜って溝3に落ちる。この遺構を覆う上屋構造は不明である。

石敷き遺構はおびただしい数の川原石を除去して検出した。これらの石が何らかの施設を崩した可能性があり、あるいは石敷き遺構の周囲に積みあげられていたかもしれない。それらの埋め土から備前焼摺り鉢1はほぼ1/3が残り、口径29.5cm器高12.3cmを測る。口縁部は厚く三角形をなす17世紀初頭の所産であろう。丸瓦2は厚さ1.5cm内面にはコビキ痕が残る。3はケズリ出しの高台をもち、3条の細いスリ目を施す唐津産の摺り鉢で17世紀に属す。4は灰釉皿で唐津焼と思われる。鉄片11は5.5×3cm厚さ0.5cmで、用途不明である。12は土錘。

排水溝から備前焼壺片5は小徳利の胴部で16世紀末の所産と思われる。瓦質土器6は土鍋片で灰色を呈し口縁部下にタガ状の凸帯が廻る。7は天目茶碗片、灰釉8は口径10cm器高推定7cmの碗である。灰釉9は光沢がある濃褐色を呈する。小型の硯10は7.7×5cmの不定形、厚さ5～7mmで周囲はスリキリ痕が残り、海と陸には盤の加工痕も残っており製作中に隅が壊れたために破棄されたものであろう。鉄釘は13～17、皇宋通宝18、銅製飾り金具19は断面が円形でS字をなす。鉄片20は不定形の厚さ3mmである。漆塗碗片が出土した。

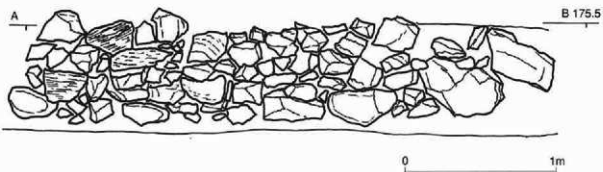
遺物からみても16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。したがって、礎石建物1・2と石敷き遺構は同時期と思われる。



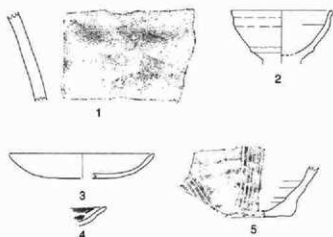
第9図 東石垣と礎石建物2実測図



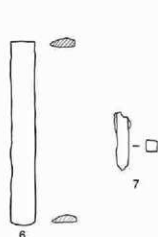
第10図 東石垣埋土出土遺物実測図1/4



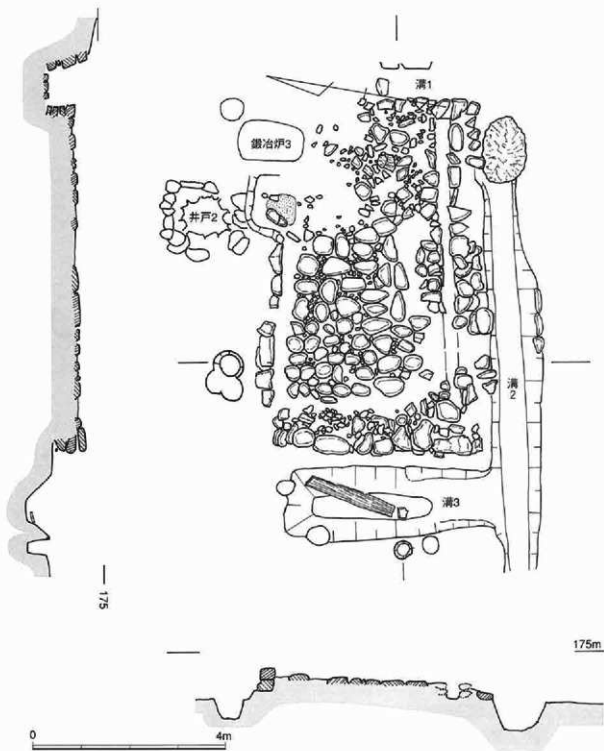
第11図 北石垣 2 実測図



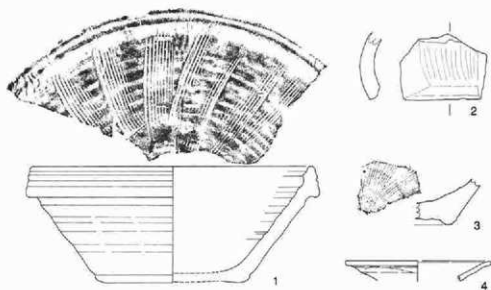
第12-1図 北石垣 1、2 埋土出土遺物実測図1/4



第12-2図 北石垣 2 出土遺物実測図1/2



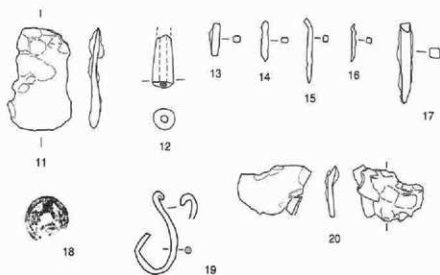
第13図 石敷き遺構実測図



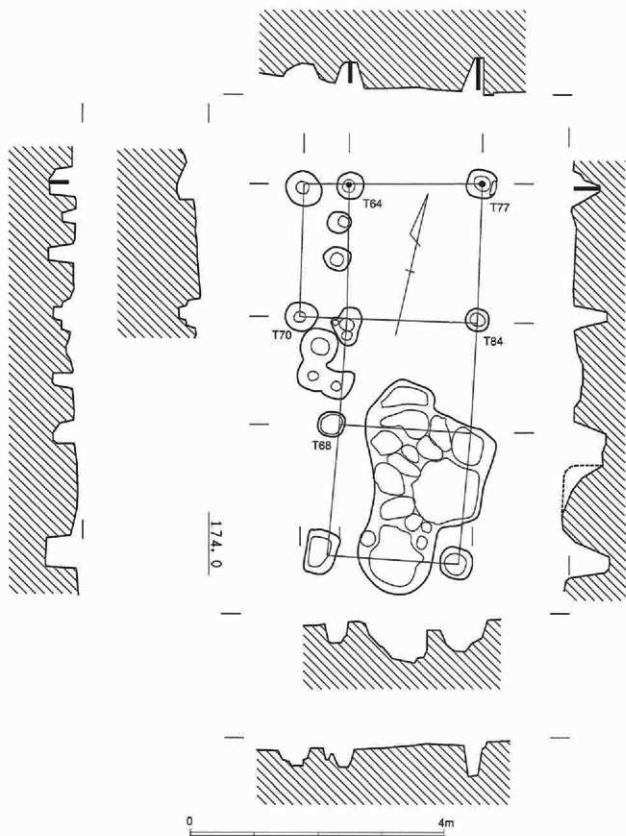
第14-1図 石敷き遺構埋土出土遺物実測図1/4



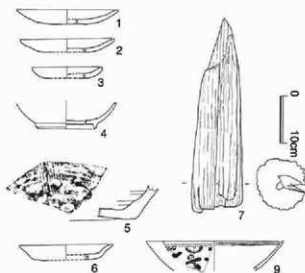
第14-2図 石敷き遺構出土遺物実測図1/4



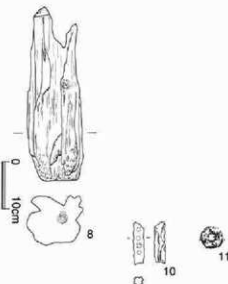
第14-3図 石敷き遺構出土遺物実測図1/2



第15図 建物3実測図



第16-1図 建物3出土遺物実測図1/4



第16-2図 建物3、4出土遺物1/4

2 掘立柱建物

① 建物3

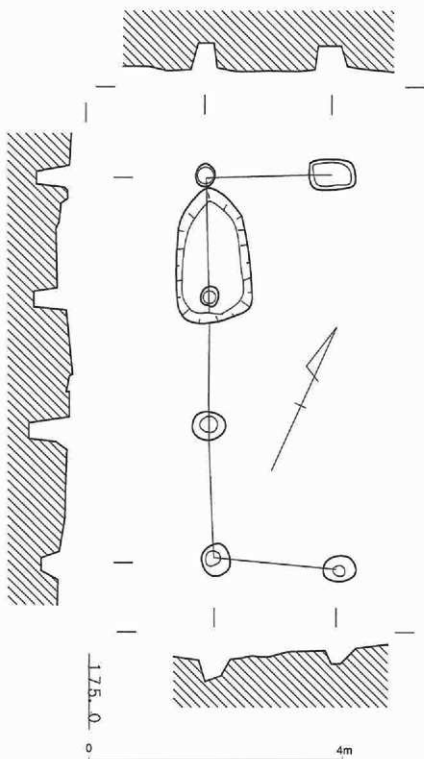
南西の黒褐色土の下から検出した掘立柱建物で1間×3間で西側に庇が付く南北棟である。方位はNW12-47である。北西隅の柱穴には柱根が残っていた。柱は直径20cm柱間は桁行き200~190cm、梁間は200cmである。土壌2・4はあとで掘り込まれたと思われる。西側の庇は1間のみが残っていた。溝2とは共存しないと思われる。南西にある巨石は建物が廃絶後埋められたものである。土師器1は口径11cm器高1.5cmの皿で底部に指圧痕がある手づくね手法。2は口径10cm、3は口径7.4cmの小皿である。備前焼摺り鉢5は赤褐色を呈し、内面にロクロ目が強く残る。8条のスリ目は底部際から掻き揚げられる。16世紀前半に比定できる。青花9は口径15cm胴部外面に花模様が内面口縁部に2条の線が描かれる。鉄製品10は長さ4cm太さ1cmで3面に3mmの円形の押えが等間隔にくぼむ。武器の一部か。白磁碗4は庇の柱から出土し、光沢のない乳白色を呈する。高さ5mmの高台の畳付けには軸が付かない。碗C群に属す。北東隅柱7は太さ12cmで、40cm残っていた。北西隅柱8は太さ12cm長さ38cmが残っていた。

② 建物4

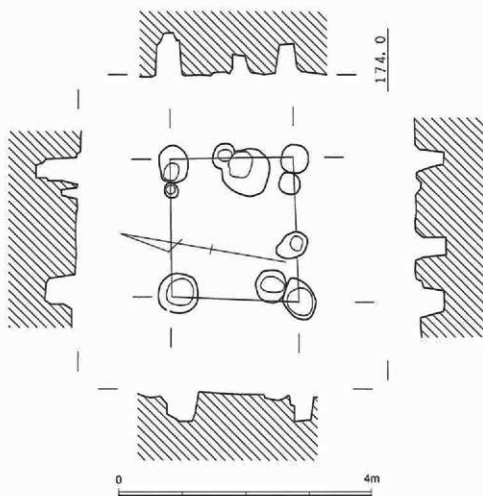
石垣1の北にある4間×1間以上の南北棟の掘立柱建物で、北側は地山を掘り下げて区画し、東側は北石垣2の裏の地山までの範囲と思われる。方位はNW24-30で、桁行200cm梁間200cmを測る。柱穴検出面から開元通宝11が出土した。鍛冶炉2は建物4が先行し、土壌3は建物4に先行する。北石垣は土壌3、建物4廃絶後に築かれたと思われる。

③ 建物5

建物3の南東に位置する1間×1間の掘立柱建物で東西220~230cm、南北200cmを測る東西棟。方位はNW10-47で建物3とは直交する位置にあり、共存すると思われる。遺物には瓦質土器がある。



第17図 建物4実測図



第18図 建物5実測図

④ 建物6

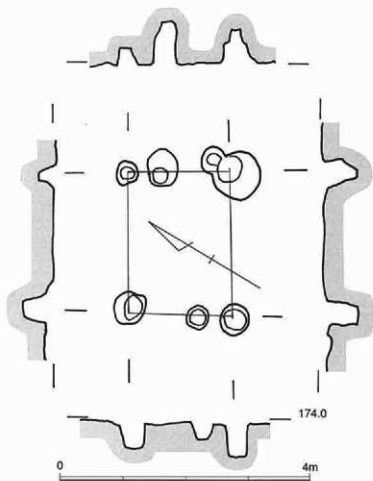
建物5より少し北にずれて重なる1間×1間の掘立柱建物で東西220～230cm、南北160cmを測る。方位はNW10で建物5とは同じである上に規模に近いが前後関係は不明である。北側に1間広がることも考えられる。

⑤ 建物7

建物3に重なって検出された1間×1間の掘立柱建物で東西180cm、南北210～220cmで南北棟である。方位はNW22を測る。柱穴は直径30～35cm深さ25～45cmである。建物3との前後関係は不明である。土師器口径9cm、器高1cmの小皿や備前焼、磁器が出土している。

⑥ 建物8

遺跡の北西部の建物群のうち建物9と重なって検出された1間×1間の掘立柱建物で、東西190～210cm南北200～210cmを測る。方位はNW9-41である。南西隅の柱穴は直径60～75cm深さ67cmと大きく、直径16.6cmのクリ材の柱根15が残っていた。さらに、土師器1は口径12cm器高2.2cmの手づくね皿で底部の器壁は厚く口縁部はやや外反する。2は口径10cmで底部の器壁は薄く、口縁部は同様に外



第19図 建物6実測図

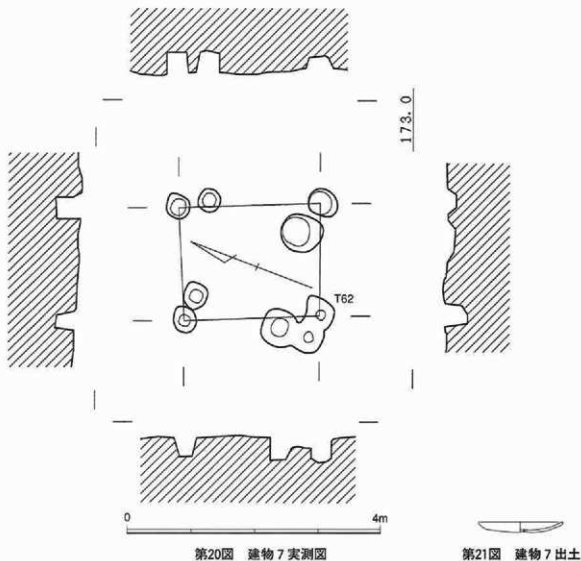
反する。3は口径9.3cm、器壁が薄く底部は狭く口縁部は緩やかに外反する。4は口径9.7cm、底部は狭く口縁部まで器壁は変わらない。6は口径8.3cmの小皿でロクロ成形である。5もロクロ成形の土師器で口径10.4cm、胎土は緻密で底部にヘラキリ痕がある。7は6.4cmでどちらも胎土は緻密、焼成良好。8は7cm底部はヘラキリ痕がある。

北東隅柱穴出土の土師器10は外面に丹塗りをした小皿・黒色の碁石11、南東隅柱穴出土の口径19.8cm器高2.7cmの回転台仕上げの大皿9は内外面にロクロ目が残り、丁寧にナデている。底部を欠く。備前焼揺り鉢12は口縁部が垂直に立ち上がり内外面にロクロ目が著しい。スリ目は10条。13は揺り鉢底部で8条のスリ目が掻き揚げられている。16世紀前半の所産と思われる。

柱穴の切合いからみて建物9が先行すると思われる。石敷き遺構は建物8・9廃絶後作られたと思われる。

⑦ 建物9

建物8と重なって検出された1間×1間の掘立柱建物で東西200cm南北200～210cmを測る。やや東西の柱間が長い。方位はNW5-58で建物8とは方位も規模も近い。柱穴の大きさは35～40cm深さ40～60cmとしっかりした掘り方である。北東隅の柱穴には柱根片が残っていた。南西隅柱穴出土の土師器3は口径8cmの手づくね小皿、器壁は薄く外面にススが付着している。4はロクロ成形の小皿、胎



第20図 建物7実測図

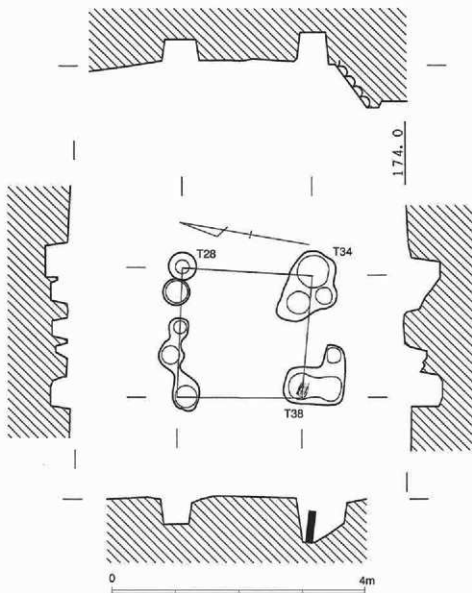
第21図 建物7出土

土には砂粒を含まない。北西隅柱穴出土の1はロクロ成形の口径14cm器高2.5cm薄い器壁で外傾し口縁端部は小さく広がる。胎土は緻密で硬く焼かれている。2もロクロ成形の小皿。底部にヘラキリ痕がある。第23図の青花皿14は柱穴39から出土した。見込みに玉取獅子が描かれ、皿B1群に属し、15世紀後半。

南東隅の柱穴は16世紀初頭の播り鉢などが出土した柱穴と建物8の柱穴に切られている。

⑧ 建物10

建物8・9・11と重なる1間×1間の掘立柱建物の東西棟である。方位はSW4-14である。東西300~310cm南北250~260cmと桁行、梁間ともに他の建物に比べて広く、鍛冶炉4-2を伴う建物と考えられる。柱穴は地山に掘り込まれ直径40cm前後深さ30cm以上としっかりしており、土師器1は手づくねで口径12.4cm器高2cm底部には指圧痕、口縁端部がやや広がる。2は口径7cm器高1cmの小皿、南西隅柱穴出土の3は口径11cm器高1.8cm器壁は厚く口縁端部がやや広がり、底部が広い。手づくね成形である。4は口径10cmの手づくね皿。5はロクロ成形の小皿、口径7cm底部にヘラキリ痕がある。北東隅柱穴からロクロ成形の小皿6が出土した。また、備前焼は15世紀後半の特徴を持つ壺片が出土



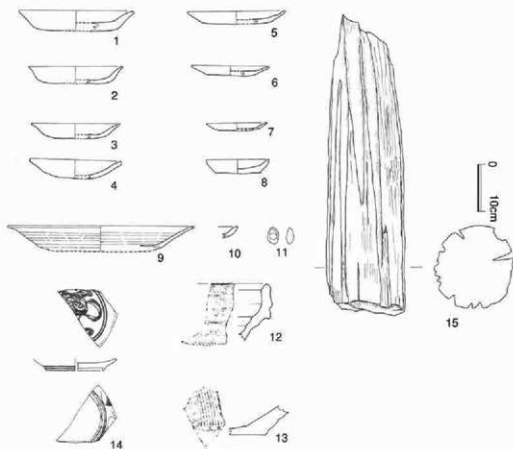
第22図 建物8 実測図

した。鍛冶炉周囲から焼土などが出土している。建物12とは同じ東西棟で4本の柱は対角線上にあって、縮小したように見える。柱も太くしっかりした柱穴になっている。伴う鍛冶炉も東側にあることもよく似ている。

⑨ 建物11

北西部の西端で検出された1間×4間の南北棟の掘立柱建物である。方位はNW6-47である。桁行は190~210cm、架間210cmで、柱穴は直径40~50cm、深さ40~70cmで、北東隅と南東隅の柱穴には柱根が残っていた。柱4は直径16cmのクリ材丸柱で長さ60cmである。土師器1はロクロ成形の小皿、口径8cm底部にヘラキリ痕がある。備前焼2の壺口縁部で端部は折り曲げて玉縁をなす15世紀後半の所産であろう。

青花3は皿の底部でB2群に属す。



第23図 建物8出土遺物実測図1/4

⑩ 建物12

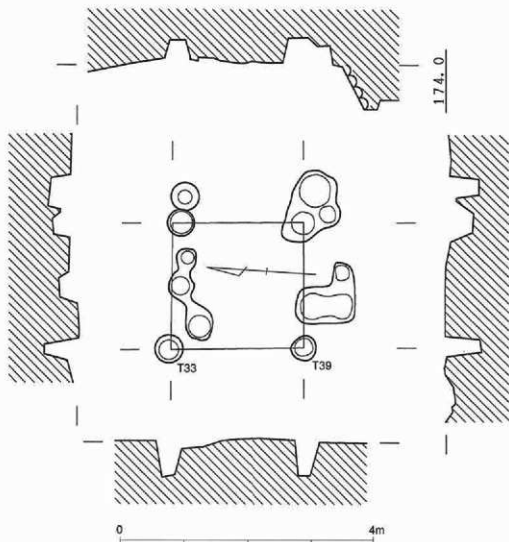
建物10より一回り大きく、方位はSW-3度の東西棟建物である。東側に東柱を持つ。直径30×30cm深さ25・35×35cm深さ35・南西柱穴は26×26cm深さ37cmでクリ材の丸柱が残っていた。柱根1は長さは約40cm太さ8cmでやや細い。土師器2・3・4が出土した。桁行は350cmから370cmで梁間は300cmで東柱がある。桁行梁間ともに他の建物より長い。東端に鍛冶炉4-1を伴う建物と思われる。建物10との前後関係は不明であるが、細い柱からよりしっかりした柱の建物に建て替えられたことも考えられる。

⑪ 柱列1

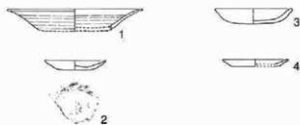
建物11の南側に柱穴が南北に列をなす。東側には検出されずに西へ広がる建物の一部であろう。方位はNW13-32、柱間は230cmで建物10の梁間と同じである。北端の柱穴は径35cm深さ60cmで土師器片が出土、中央の柱穴は径33cm深さ38cm手づくねの小皿1、青花片、焼土片が出土した。南端の柱穴は径37cm深さ36cmで、出土した備前焼2は10条のスリ目が斜めに入り、口縁外部に3条の凹線を施す。16世紀後半の所産である。

⑫ 柱列2

柱列1と方位が近くNW15-29、柱間は200cmで建物11・9・3・5の梁間と同じである。西側へ



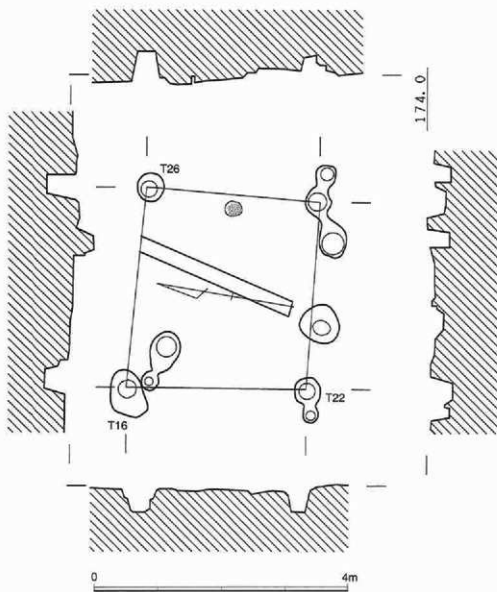
第24図 建物9実測図



第25図 建物9出土遺物実測図1/4

広がる建物の一部であろう。北端の柱穴は径50cm深さ72cmで土師器1は口径14cmと2は10cmでいずれも底部に火を受けて剥離している。

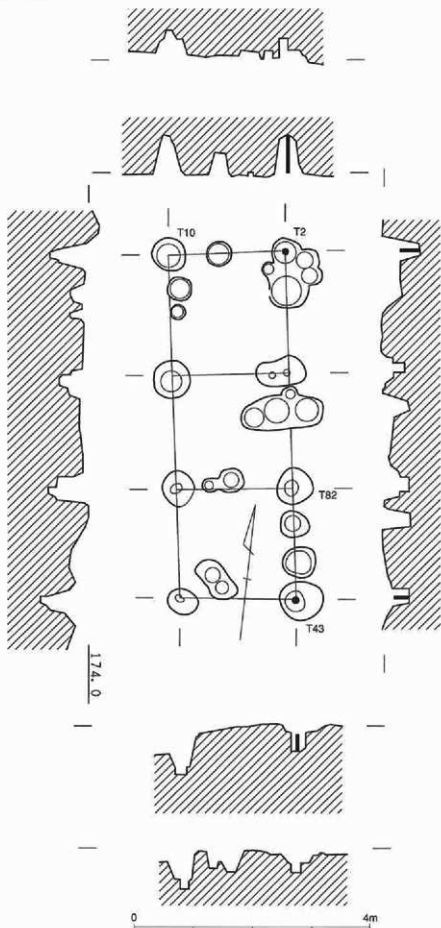
中央の柱穴は径45cm深さ47cmで手づくねの土師器3、南端の柱穴は径42cm深さ50cmで土師器・硯未製品4などが出土した。



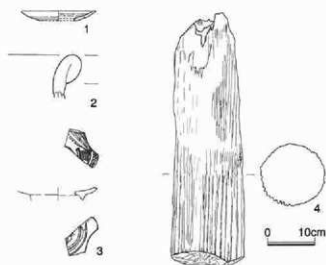
第26図 建物10実測図



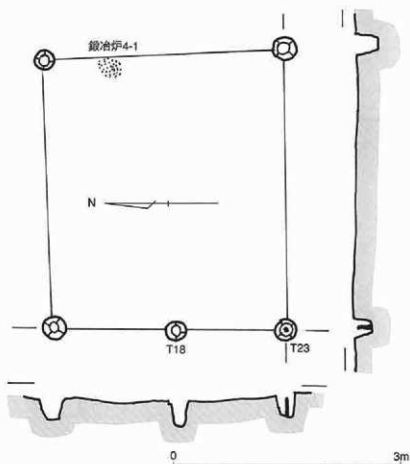
第27図 建物10出土遺物実測図1/4



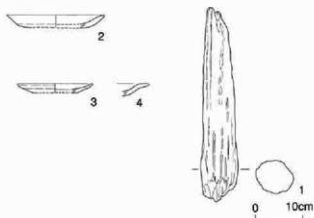
第28図 建物11実測図



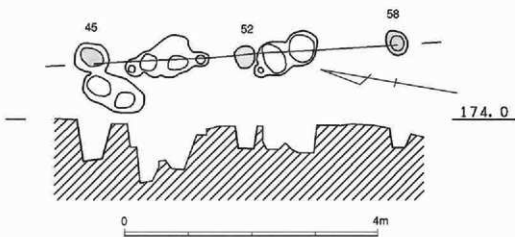
第29図 建物11出土遺物実測図1/4



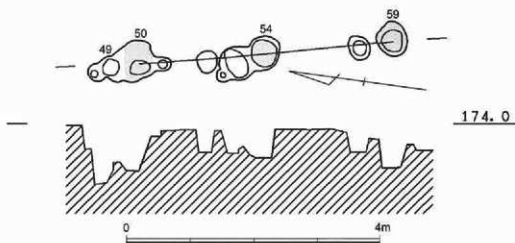
第30図 建物12実測図



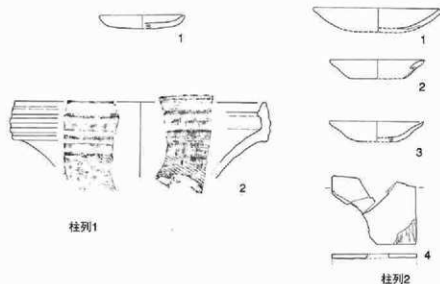
第31図 建物12出土遺物実測図1/4



第32-1図 柱列1実測図



第32-2図 柱列2実測図



第33図 柱列1、2出土遺物実測図1/4

第1表 建物一覧表

遺構名	規模 間数	形状	柱間距離 (cm)		面積㎡	柱方向	柱穴	時期	主な出土遺物
			壁	梁					
礎石建物1	4×2	630		210	180~200	NW16'02'			
礎石建物2		600	700			NE11'NW14'			
建物3	3×1	600	300	190~200	200	NW11'47'	柱根2		土師器、青花
建物4	3×1	600	300	180~210	200	NW14'30'			陶光通瓦
建物5	1×1	230	300	230~270	200	NW10'47'			
建物6	1×1	230	160	230~270	160	36.8' NW10'			白磁?
建物7	1×1	225	180	230~210	180	NW21'			香粉器3 燗前焼土
建物8	1×1	215	235	200~210	180~210	41.1' NW19'41'			香土 燗前焼土
建物9	1×1	210	200	210	200	42.0' NW3'58'	柱根1		燗前焼土
建物10	1×1	310	200	300~210	250~250	86.6' SW1'11'			燗前焼土 土師器 鏡治印+1
建物11	3×1	590	210	180~210	180~210	122.9' NW6'47'	柱根2		青花1 (燗前焼土印) 燗前焼土 燗前焼土
建物12	1×1	330	300	300~370	300	105.0' SW3'	柱根1		燗前焼土 鏡治印+1
柱列1	2	240		240		NW13'32'			土師器 燗前焼土
柱列2	2	210		200~210		NW15'29'			土師器

第2表 建物出土遺物一覧表

発掘番号	発掘遺物名	種別	器種	外寸 (cm)				色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	胴径	高さ	厚さ					
1	第11レンガ	備前焼	瓦					内外とも赤褐色		1~2mm 砂粒を含む	堅固	内外ナデ
2	第11レンガ	志野焼	肉付	10				乳白色				最早発見(130cm以内)赤褐色に内外両面少し下2層1cmの段状と、全平
3	第11レンガ	唐津	小蓋	4								瓦割破損高 高径は傾り筋し難く見込みみじり目
4	第11レンガ		釘		3.3×0.5×0.4			鉄				
5	第11レンガ		釘		3.3×0.4×0.4							
6	石段上土	備前焼	瓦	37.2				灰色	10C~15C	小穴を含む	堅固	内外両面ナデ 断面内面はヘク煎り口縁 燗前焼土と区別
7	石段上土	備前焼	燗前焼					赤褐色	16C		堅固	内外両面ナデ
8	石段上土	土師	土師	3.1	31	4	6	灰色赤褐色		砂粒を含む	中々軟	変形
9	石段上土	土師	土師	4.1	1.1	2	5	栗色		砂粒を含む	強い	変形

石層1埋土出土遺物

石層1埋土	遺物名	種別	瓦質	火跡	外寸 (cm)				色調	年代	胎土	焼成	特徴
					口径	胴径	高さ	厚さ					
1	石層1埋土	瓦質	火跡					灰白色				中々軟	燗前焼 化粧土 花筋メッキ
2	石層1埋土	備前焼	総利	3.4				外赤赤褐色	10C~15C		堅固	外両面ナデ	
3	石層1埋土	備前焼	瓦	18.3	13.2	4		外赤赤褐色	16C末	砂粒を含む	堅固	内外両面ナデ 体部ヘク煎り	
4	石層1埋土	備前焼	小形燗	25.0				口縁部灰色 体部赤褐色	10C前半		堅固	口縁部自然焼 (白ゴマ) ロサロ目蓋板焼	
5	石層1埋土	備前焼	燗前焼					赤褐色	10C後半		中々軟	変形	
6	石層1埋土	陶器	瓦割破損					黄褐色	16C		良好	ロタロ	
7	石層1埋土	瓦	軒丸瓦	14.0	1.3	0.5	1.0	黒色				中々軟	田 変定
8	石層1埋土	瓦	丸瓦	0.0	3.0		2.5	赤褐色 (硬熟)				中々軟	内外両面ナデ
9	石層1埋土	瓦	平瓦	18.5	16.3		1.5	表面灰色 瓦割破損			中々軟	表面部ナデ 燗前焼ナデ	
10	石層1埋土	陶器	瓦割破					赤褐色	10C	瓦割破	良好	ロタロ	

第3章 発掘調査の概要

No.	石層1現土	青磁	小皿	10.3	5.5	緑褐色	灰白色	類似	見付体面緑色 織に砂目 織に花散	コタロ成器 朝日山輪高台 全断無 織に瓦散
11	石層1現土	青磁	小皿	10.3	5.5	緑褐色			見付体面緑色 織に砂目 織に花散	コタロ成器 朝日山輪高台 全断無 織に瓦散
12	石層1現土	青磁	碗		6.3	オリーブ灰色系	14C			
13	石層1現土	青磁	小皿			灰白色				
14	石層1現土	青花	碗	11.2			14C後半			
15	石層1現土	青花	碗							
16	石層1現土	青花	小鉢	8.0						
17	石層1現土	青花	碗	12.0						
18	石層1現土	青花	碗	13.0						
				最大径	口径	底径	器高			
19	石層1現土	土師	鉢	68	38	6	49	赤褐色	砂粒含む	やや軟
20	石層1現土	土師	鉢	68	38	5	49	赤褐色	砂粒少し	やや軟
21	石層1現土	土師	鉢	25	9	3	(5)	赤褐色	砂粒少ない	やや軟
22	石層1現土	土師	鉢	25	10	3	(5)	赤褐色	砂粒少ない	やや軟
23	石層1現土	土師	鉢	17	10	3	(2)	赤褐色	砂粒少ない	やや軟
24	石層1現土	土師	鉢	18	10	3	(2)	赤褐色	砂粒少ない	軟い
				計測値 (cm)						
				最大径	口径	底径	器高			
25	石層1現土	土師	小鉢	21	14	2		赤		
26	石層1現土	土師	小鉢	29	14	6		赤		
27	石層1現土	土師	小鉢	41	25	5		赤		
28	石層1現土	土師	小鉢	44	9	4		赤		
29	石層1現土	土師	小鉢	40	5	5		赤		
30	石層1現土	土師	小鉢	38	4	3		赤		
31	石層1現土	土師	小鉢	52	8	7		赤		
32	石層1現土	土師	小鉢	38	7	1		赤		
33	石層1現土	土師	小鉢	35	11	1		赤		
34	石層1現土	土師	小鉢	25	5	5		赤		

礎石建物1

掲載番号	母体遺体名	種類	器種	計測値(cm)			色調	年代	胎土	地成	特徴
				口径	底径	器高					
1	礎石建物1	陶器	瓦片割				西外と黒黒褐色	17C	灰白色砂粒	地成	コタロ
2	礎石建物1	土師器	瓦	13.5			赤褐色	14C後半	砂粒含む	地成	コタロ目跡部スチ着
3	礎石建物1	陶器	小皿		4.1		灰	17C		地成	コタロ目跡部スチ着
4	礎石建物1	陶器	小皿				灰	17C	やや軟質	地成	コタロ目跡部スチ着
5	礎石建物1	瓦	瓦丸		9.7*7.5*2.2		灰黒色		瓦黒色	地成	コタロ目跡部スチ着
1	東石原跡土	土師器	大皿	16.1		2.7	淡褐色		砂粒少散密	地成	コタロ目跡部スチ着
2	東石原跡土	土師器	大皿	14.0		1.6	淡褐色		砂粒少散密	地成	コタロ目跡部スチ着
3	東石原跡土	瓦丸	瓦丸		7.0		灰色	14C後半	灰白色	地成	コタロ目跡部スチ着

北石原現土

掲載番号	母体遺体名	種類	器種	計測値 (cm)			色調	年代	胎土	地成	特徴
				口径	底径	器高					
1	北石原現土	陶器	燵				内面赤褐色 外面赤褐色			地成	内面ナサ外周へラ割り△△の凹印
2	北石原現土	陶器	瓦片割	10.4	(4.0)	(4.0)	赤褐色		灰白色砂粒	地成	高断天目
3	北石原現土	土師器	大皿	13.2		2.6	淡褐色		砂粒含む	地成	やや軟 コタロ目跡部スチ着
4	北石原現土	土師器	燵				内面赤褐色 外面赤褐色			地成	コタロ目跡部スチ着
5	北石原現土	土師器	燵				内面赤褐色 外面赤褐色		砂粒含む	地成	スチ着
6	北石原現土	土師器	燵				内面赤褐色 外面赤褐色			地成	スチ着
				計測値 (cm)							
				最大径	口径	器高					
6	北石原現土	土師器	小鉢	37	12	4				地成	赤褐色 内面赤
7	北石原現土	土師器	小鉢	31	5	5				地成	赤褐色 内面赤

石敷遺構

掲載番号	母体遺体名	種類	器種	計測値 (cm)			色調	年代	胎土	地成	特徴
				口径	底径	器高					
1	石敷遺構	陶器	燵	29.5	16.0	12.3	赤褐色	17C	砂粒含む	地成	スリ目跡部スチ着からかきあがり跡部赤褐色
				計測値 (cm)							
				口径	底径	器高					
2	石敷遺構	土師器	瓦丸	18.80			灰		砂粒含む	やや軟	コタロ目跡部スチ着
3	石敷遺構	土師器	燵				赤褐色	12C前半		地成	スリ目跡部スチ着
4	石敷遺構	土師器	燵				赤褐色	16C後半		地成	スリ目跡部スチ着
5	石敷遺構	土師器	小皿	(15.3)			赤褐色	16C前半		地成	スリ目跡部スチ着
6	石敷遺構	土師器	燵				赤褐色	16C後半		地成	スリ目跡部スチ着
7	石敷遺構	土師器	瓦片割				赤褐色	16C後半		地成	スリ目跡部スチ着
8	石敷遺構	土師器	燵	16.8			赤褐色	16C後半		地成	スリ目跡部スチ着
9	石敷遺構	土師器	燵	10.5			赤褐色	16C後半		地成	スリ目跡部スチ着
				計測値 (cm)							
				口径	底径	器高					
10	石敷遺構	陶器	燵		5.0*7.7*6.6		赤褐色			地成	赤褐色 燵切痕

掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	年代			
				最大径	最大幅	最大厚						
11	石敷土			20	10	3		灰				
掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値 (cm)			重量 (g)	色調	年代	胎土	焼成	特徴
				最大径	最大幅	孔径						
12	石敷土		土塊	25	13	4	(2)	淡褐色			磁粒含む	中年代
掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	年代			
				最大径	最大幅	最大厚						
13	石敷土			17	4	3		灰				
14	石敷土			21	4	3		灰				
15	石敷土			34	5	3		灰				
16	石敷土			20	2	2		灰				
17	石敷土			42	5	5		灰				
18	石敷土											
19	石敷土		フタ	50	3	3					胎質(磁器胎)	
20	石敷土			30	34	5		灰				
建物3												
掲載番号	遺構名	種別	部材	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調	年代	胎土	焼成	特徴	
1	建物3 土師器	甕		13.0	4.4	1.6	明褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
2	建物3 土師器	甕		10.0	4.4	1.4	褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	
3	建物3 土師器	甕		2.4	4.6	1.2	褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	
4	建物3 土師器	白磁	磁		5.8							
5	建物3 土師器	甕	磁								ロケ目	スリ目深く赤染
6	建物3 土師器	甕	磁	5.8	6.0	1.6						
7	柱穴61	木製品	柱	40.0								
8	柱穴77	木製品	柱	最大径38.0	最大径12.0							
9	柱穴66	青花	瓦	14.5								
10	柱穴69	金属	弓矢口		4×1.0×0.1						材質鉄	
建物4												
11	建物4 土師器	甕										陶器胎
建物5												
柱穴102	瓦											内面直のへら 外周深ナリ 瓦質キツク
建物7												
柱穴62	土師器	甕		9.0	4.0	1.2	褐色		磁粒含む	中年代	手づくね	
建物8												
柱穴38	土師器	甕		12.0	6.2	2.2	褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	ナリ
2	柱穴38	土師器	甕	10.0	5.0	1.9	灰白色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
3	柱穴38	土師器	甕	9.3	5.0	1.6	淡褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	
4	柱穴38	土師器	甕	8.7	3.0	2.0	緑褐色		磁粒含む	中年代	手づくね	内面直
5	柱穴38	土師器	甕	10.4	5.0	1.4	淡褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
6	柱穴38	土師器	甕	8.5	4.0	1.6	緑褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
7	柱穴38	土師器	甕	6.4	3.0	0.8	緑褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
8	柱穴38	土師器	甕	6.8	3.0	1.5	淡褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
9	柱穴34	土師器	甕	12.8	10.0	2.7	灰白色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
10	柱穴28	土師器	甕				灰白色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
11	柱穴28	土師器	甕		1.2×1.7×0.8		褐色					
12	柱穴28	土師器	甕				褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
13	柱穴28	土師器	甕				褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
14	柱穴29	青花	瓦		16.1							建物9へ
15	柱穴28	木製品	柱	最大径62.2cm	最大径16.6cm							
建物9												
掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
口径	底径	器高										
1	柱穴33	土師器	甕	14.0	7.4	2.3	灰白色		磁器	中年代	手づくね	ロケ目
2	柱穴33	土師器	甕	6.6	2.9	1.0	淡褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
3	柱穴30	土師器	甕	8.0	4.0	1.6	淡褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
4	柱穴30	土師器	甕	6.8	4.0	0.7	褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
14	柱穴30	青花	瓦		16.1							土師器ナリ 土師器
建物10												
掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
口径	底径	器高										
1	柱穴16	土師器	甕	15.4	6.0	2.0	緑褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
2	柱穴16	土師器	甕	7.0	3.8	1.0	緑褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	
3	柱穴22	土師器	甕	11.0	7.0	1.8	緑褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	内面直
4	柱穴22	土師器	甕	10.0	4.0	1.8	淡褐色		砂粒含む	中年代	手づくね	
5	柱穴22	土師器	甕	7.0	3.0	0.9	淡褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
6	柱穴26	土師器	甕	6.0	4.0	0.8	灰白色		磁器	中年代	手づくね	内面直
建物11												
掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
口径	底径	器高										
1	柱穴10	土師器	甕	8.0	4.0	1.1	緑褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
2	柱穴10	土師器	甕				褐色		磁器	中年代	手づくね	内面直
3	柱穴2	青花	瓦		15.2							B2型
4	柱穴2	瓦	柱	長さ60.0		直径16.0						ナリ

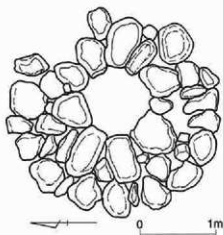
第3章 発掘調査の概要

遺物12											
発掘番号	発掘遺構名	種類	器種	最大径cm			口径	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	高さ					
1	柱穴跡			49.3			8.0				
				計測値cm			色調				
				口径	底径	高さ					
2	柱穴18	土師器	甕	10.3	5.0	1.4	緑褐色		砂粒含む	強い	手づくぬナデ
3	柱穴18	土師器	甕	8.0	3.0	1.0	赤褐色		砂粒含む	強い	ロクワ燻ナデ
4	柱穴18	土師器	甕				赤褐色		砂粒含む	強い	手づくぬ
柱列1											
発掘番号	発掘遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	高さ					
1	柱穴22	土師器	甕	9.0	3.0	1.4	褐色		砂粒含む	やや軟	手づくぬ内外面丁寧なナデ
2	柱穴28	燗土器	甕	26.5			緑褐色	16C後半			スリ目跡の外周に内線3本 内面口縁部ナデ
柱列2											
1	柱穴30	土師器	甕	14.0	5.0	(3.1)	内面暗灰色 外面赤褐色		細粒	やや軟	手づくぬ焼熱により割壊
2	柱穴30	土師器	甕	10.6	5.2	(2.0)	暗褐色		細粒含む	やや軟	手づくぬ焼熱で割壊
3	柱穴34	土師器	甕	10.0	4.0	(2.2)	暗褐色			やや軟	手づくぬ内面丁寧なナデ外周部圧痕
4	柱穴30	土師器	甕	6.2×9.8×9.4							土製品金属による腐食痕

3 井戸

① 井戸1

遺跡の東端にあった民家の井戸として利用されていた井戸であるが、大きな川原石を敷き詰めた作りは、江戸時代の武家屋敷である渡辺家の井戸に類似している。直径3m以上の掘り方の中に川原石を敷き詰めている。深さは5m以上もあり、大小の石を使って積み上げている。水深は3mぐらいで、底には汚泥が深く堆積しており調査の対象にしなかった。

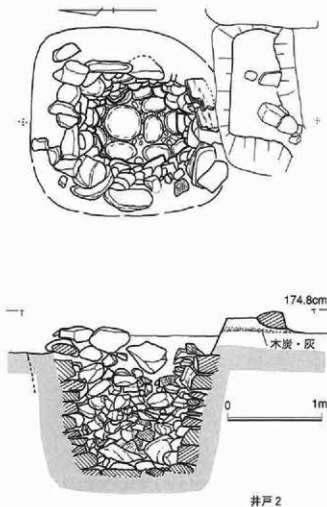


第34図 井戸1平面図

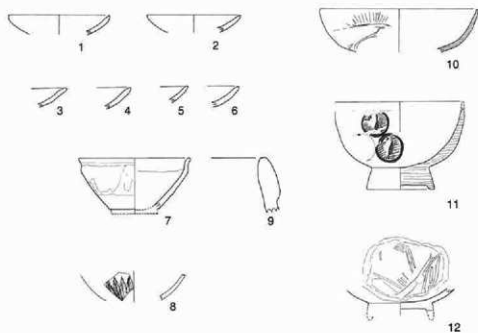
② 井戸2

建物4を検出する段階で石組みが現れ、中央部が水分を含む粘土が堆積していることがわかり、掘り進めた。口径1m深さ1.2mを掘る。底には川原石を敷き詰めている。石の積み方はやや粗く、大小の川原石と山石を積み上げている。今も水が湧いている。遺物は検出面から獣骨、土師器、碁石などが出土した。土師器1は口径10cmの手づくねで、他の土師器2～6も胎土に砂粒を含んでいる。天目茶碗7は高台を欠くが、口径11.6cmで内面上部は茶色、底まで黒色へ漸移する。外面の軸葉は口縁端部が茶色で体部は黒色と茶色がまだら状に窯変している。胎土は褐色で微砂を含む。なお、この破片は溝6出土の天目茶碗片と接合した。

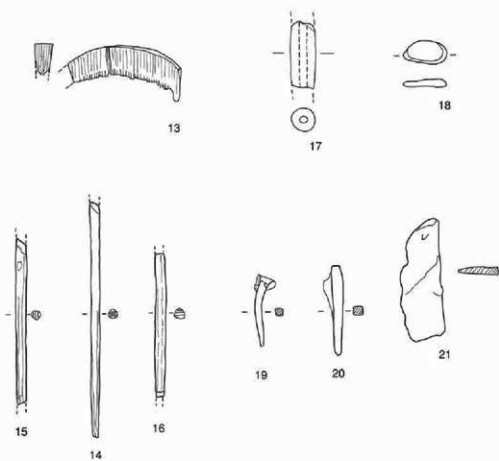
備前焼9はやや内傾する甕の口縁部で15世紀後半から16世紀初めに比定できる。青花8は体部に芭蕉が描かれた蓮子碗、C群Ⅱ期で15世紀後半から16世紀前半に属す。木製品の漆塗碗10は口径16cmで底部、高台を欠く。内外面に黒漆を塗り、外面に松の木を描いている。11は壘付と口縁端部を欠くが推定口径13cm器高は約9.5cm。碗の深さ7.5cm高台は高く2.5cm、体部の器壁は厚い。内面は赤漆、外面は黒漆で仕上げ、直径3cmの丸い鶴を描く。12は底部のみであるが、内外面とも黒漆を塗り、赤色漆で模様を描く。横櫛13は残存6cmで厚さ1cm、歯を欠く。14～16は箸、ヒノキ材である。17は土錘、碁石18はやや大きめの楕円形で黒色である。19・20は鉄釘、21は刀の破片である。



第35図 井戸2 実測図



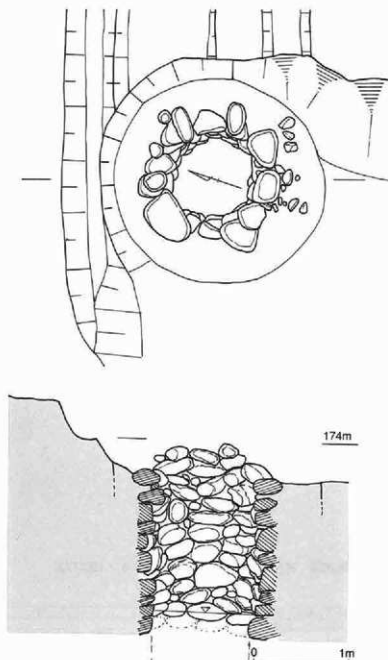
第36図 井戸2出土遺物実測図1/4



第37図 井戸2出土遺物実測図1/2

③ 井戸3

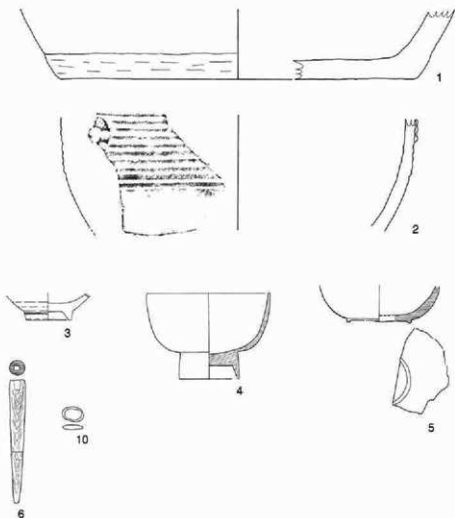
遺跡の北西端で検出された。段丘の末端にあり、溝4・5・6を切断して作られている。遺跡はさ



第38図 井戸3実測図

らに西側に広がっていたことがわかる。川原石を積み上げて深さ5m以上になり、湧水も激しいために底まで調査はできなかった。廃棄したときに夥しい数の石を投げ入れており、石で埋められていた。備前焼1大甕の底部。胴下部はヘラ削り、内面はナデている。2は水屋甕の胴部に太い凹線が平行につき、取っ手状の貼り付けがある。青花の大皿は溝1出土の皿と同一個体である。青花碗の底部3は高台径は5cmで高めの高台外面に線が廻る。木製品の漆塗碗4は口径13cm器高9cmで内外面とも黒漆を塗って高台は高い。黒漆を塗った碗5は高台が低くて底部径は7cmと大きくやや浅めの碗である。円形断面の先細りの木製品6は鉄芯を差し込んだと思われる深さ1cmの角孔があげられ、中央部に栓に使ったあとが見られるが、何に使われたかは不明である。軒丸瓦9は巴と珠文、7・8は丸瓦、内面には絞り裏と布目が残っている。葺石10は灰石である。

第3章 発掘調査の概要



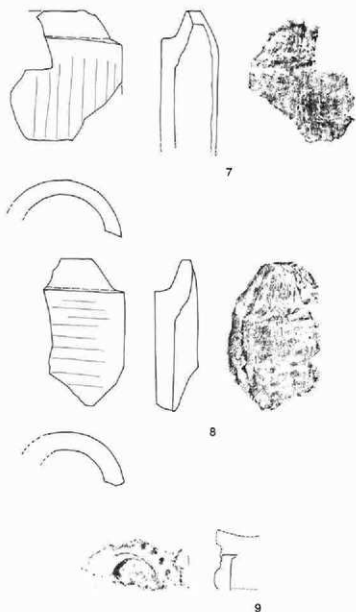
第39図 井戸3出土遺物実測図1/4 (6・10は1/2)

第3表 井戸一覽表

遺構名	構造	平面形	直径cm	深さcm	深さm	築造年代	時期	出土
井戸1	石組	円形	170	500以上		江戸		
井戸2	石組	円形	100	120	176.48	室町	物産地蔵 曹花 高橋天目茶碗 土師 島野 伊藤堀 橋掛 へろ泥不動 著 土師 島野 土師の裏	
井戸3	石組	円形	100	500以上		EJ7初期	曹花未開花 厚切磁器 (白磁 青磁 赤紫 土師) 橋の角 土ふり 灰の足 伊藤堀 土師 島野 土師石 礎石	

第4表 井戸出土遺物一覽表

掲載番号	掲載遺構名	種別	部材	計測値cm			色調	年代	胎土	施文	特徴
				口径	口径	器高					
1	井戸2	土師器	皿	10.8			緑灰色		刷脱	やや軟	手づくね
2	井戸2	土師器	皿	10.9			緑灰色		刷脱	やや軟	手づくね
3	井戸2	土師器	皿				暗褐色				手づくね外面にスス(ウルシ)ナゲ
4	井戸2	土師器	皿				褐色		刷脱		手づくね
5	井戸2	土師器	皿				外面赤褐色 内面黒色		刷脱含む	軟質	手づくね
6	井戸2	土師器	皿				赤褐色				手づくね
7	井戸2	陶器	天目茶碗	11.6	(4.0)	(4.0)	内面上部赤色 下部黒色を呈す				高台欠物 講6の天目茶碗と適合
8	井戸2	曹花	皿					15C後~16C前			製の土師器C部と同意類
9	井戸2	磁器	壺				黒褐色	15C後半		軽い	内面
10	井戸2	木製品	漆器輪	16.8							内外面漆塗外面に赤塗で施文(虎?)
11	井戸2	木製品	漆器輪	(13.8)	7.5	9.5					内面赤塗外表面漆塗(ツル皮?)
12	井戸2	木製品	漆器輪		7.0						内面に赤色塗で漆塗外表面にも黒地に赤塗
13	井戸2	木製品	漆器	(6.0)	幅1.0						
14	井戸2	木製品	箸	幅0.5	厚さ0.4	長さ12.5					横溝 ヒノキ
15	井戸2	木製品	箸	幅0.5	厚さ0.4	長さ8.7					横溝 ヒノキ
16	井戸2	木製品	箸	幅0.5	厚さ0.5	長さ7.5					ヒノキ



第40図 井戸3出土遺物実測図1/4

掲載番号	掲載遺物名	種別	部位	計測値mm			重量(g)	色調	胎土	焼成	特徴
				最大径	最大幅	孔径					
17	井戸2	土器		35	15	3	(9)	暗褐色	砂粒含む	中々軟	
掲載番号	掲載遺物名	種別	部位	口径	底径	器高	色調	年代	胎土	焼成	特徴
18	井戸2上層	石製品	器石	1.2*2.3		0.4	黒色				
掲載番号	掲載遺物名	種別	部位	計測値mm			重量(g)	色調	胎土	焼成	特徴
				最大径	最大幅	孔径					
19	井戸2	金属	釘	38	4	4	鉄				
20	井戸2	*	釘	47	5	5	鉄				
21	井戸2	*	刀片	62	22	4	鉄				
井戸3											
掲載番号	掲載遺物名	種別	部位	計測値mm			色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高					
1	井戸3	磁器焼	火鉢			26.0	赤褐色			磁肌	底平
2	井戸3	磁器焼	水盆蓋								
3	井戸3	管	瓦			6.9					
4	井戸3	木製品	漆器焼	13.1	6.4	(9.1)					内外面とも黒漆
5	井戸3	木製品	漆器焼		(7.0)						内外面とも黒漆

#	井戸3	本製品	種類	長さ13.9		直径1.6		重量	厚さ	色調	粘土	焼成	特徴
				全長	丸瓦径	直径	口径						
1	井戸3	北瓦		12.7	1.4	2.7			2.0	内外黒色	砂粒含む		外周ナブ内面布目
2	井戸3	丸瓦		10.0	1.0				1.5	黒色	無い		外周縁ナブ内面布目
9	井戸3	軒丸瓦	厚様	外径(cm)		厚さ				色調	粘土	焼成	特徴
				直径	幅								
				12.0	1.5	0.7	1.0			灰白帯白色 内面黒色			瓦名刺丸瓦に貼り付け
10	井戸3	源石	厚様	溝深さcm						色調			
				口径	底径								
				1.5	2.3								

4 溝

① 溝1

①溝1は石垣1の下に幅50～60cm長さ8mにわたって水を溜め、湧水は今も続いている。底には川原石を敷き詰めている。なぜこの範囲に水を溜めたのであろうか。石敷き遺構との間の狭いスペースで、庭園の中の池とは考えにくい。底に石を敷き詰めたのは水の濁りを防ぐためであろう。北よりに大きな露岩があり、溜り水を溝2と十字溝を分ける。溝には粘土が充填して多くの遺物が出土した。土師器1・2は糸切り底である。3～5は手づくね成形、3は赤褐色、内面に漆が残っていた。底部は火を受けて黒色である。

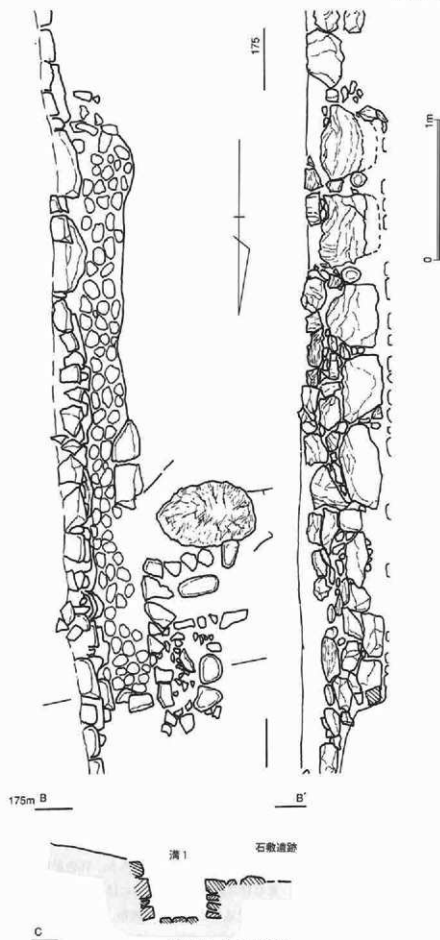
6はロクロ成形で底部にヘラキリ痕がある。7は備前焼短頸の水屋甕で、口縁部は水平に開き、肩から胴部には太い凹がめぐる。赤褐色で堅く焼きしめられている。8は大甕の口縁部。やや外傾して、5cm折り返している。16世紀前半の所産。9～12は摺り鉢。9は7条のスリ目、口縁部外面に3条の凹線が巡る。11・12はスリ目が斜めに交差している。

天目茶碗13、青磁香が14の底部は外面明緑灰を呈し、内面は無釉である。

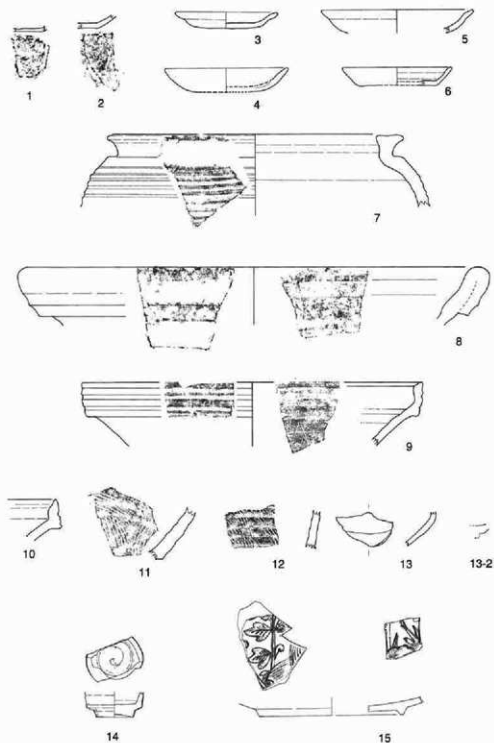
青花15は大甕の底部である。花などが描かれている。井戸3出土の青花皿と同一個体と思われる。木製品は箸19～21が三本20～25cm、ヒノキカスギで作られている。斎串17に類似して長さ24cm幅1.9cm厚さ0.3cmで先を尖らせている。ヒノキ材。18は先が尖っているが穴が穿たれている。糸巻き状の板22は中央がくびれている。漆塗椀23は内面に赤漆、外面に黒漆を塗っている。丸瓦は黒色、粘土は灰白色で内面にコビキ痕がある。動植物遺体にアカニシ・魚鱗・梅・桃の実などが出土した。(図版参照)

② 溝2

溝1から石敷き遺構の南側に沿って西の段丘下まで約10m、幅50～100cm深さ30～50cmの溝である。堆積した土層から見ると一度埋まった後掘りあげて、溝として使われた状況が見える。砂利層、砂質粘土層がこれにあたる。下層は粘土層が充填し、長い竹管が横たわっていた。直径3cm長さ5m以上の竹管がなぜ置かれたか。井戸を埋めるときには竹筒を立てる習慣はあるが、節を抜かない竹筒を横たえている意味は不明である。上層からの出土遺物には備前焼の甕口縁部1は4cm折り返している。摺り鉢2～7で4は口縁端部の内面に稜線、外面に浅い3条の凹線を施し、重ね焼き痕が見られる。下層出土の3は器壁が薄く明るい褐色の内面には6条のスリ目があり、口縁部外面には3条の凹線を施し、重ね焼の痕が見られる。

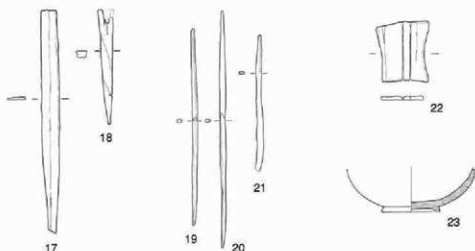


第41図 溝1実測図



第42図 溝1出土遺物実測図1/4

青磁10は推定口径が23cmの盤である。内面に片彫り花文の明緑色を呈する。12は砂利層から出土した灰釉丸碗で口径12cm器高6.3cm以上で底部を欠く。瀬戸美濃であろう。16世紀前期の所産。8は青磁皿である。龍泉窯系、底部径は6.2cm、重ね積みのため見込み内には軸がかかっている。高台内も無軸。11も青磁で基筒底は無軸である。9は見込みの中心部は無軸、底部にはロクロ目がある。木製品の漆塗碗13は高台を欠くが、高台径は7cm、内面は赤漆、外面は黒漆を塗る。14は差し歯の下駄。



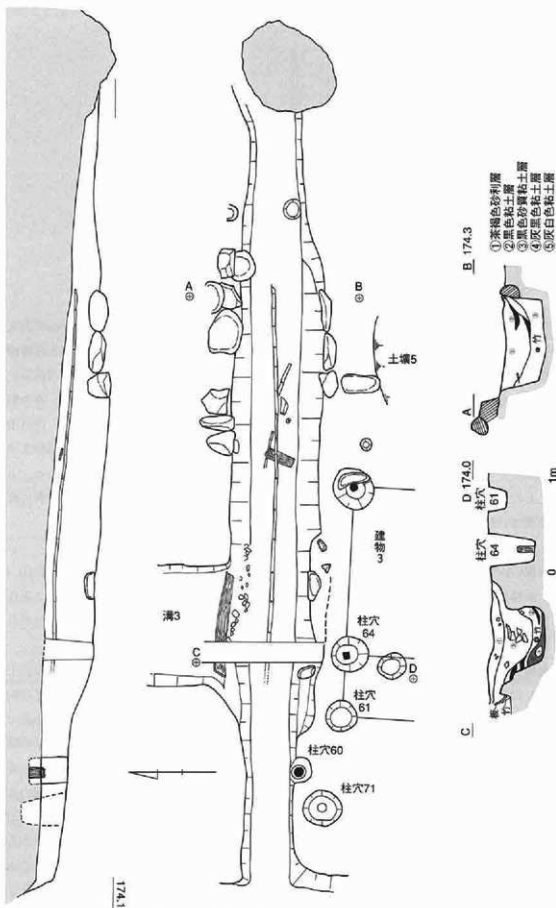
第43図 溝1出土遺物実測図1/2

かがと部分を欠くが幅6cm残存長13cm、厚さ3cm、差し歯は幅11cm高さ9.5cmで、歯部は6.5cmで台を貫いている。鼻緒孔は3個穿たれている。女性用と思われる。15は折敷の縁であろう。両面とも赤漆を塗る。厚さ7mm高さ2.5cmである。16は天目茶碗、内面は黒色、ケズリ出しの高台は無釉である。上層の砂利層から出土した軒丸瓦20は内面にコビキ痕が見られる。胎土は灰白色砂粒を含み、やや軟らかい焼である。瓦当をつける部分には深い筋を入れて接合しやすくする。21の胎土は灰色、内外面黒色で、炭素が吸着し、瓦当接合面に筋を入れている。石製品の小型視片22は蛇紋岩製の海部分まで使われて摩滅している。23は碗の未製品で側面にすり切り痕、上面にはノミで削った筋がのこる。上層から出土した銅製の筭18は長さ9cm、幅0.5cm厚さ0.2cmを測る。先端は尖っている。19は銅製の節り金具で断面はC形をなす。土鏝は1個17が出土した。

③ 溝3

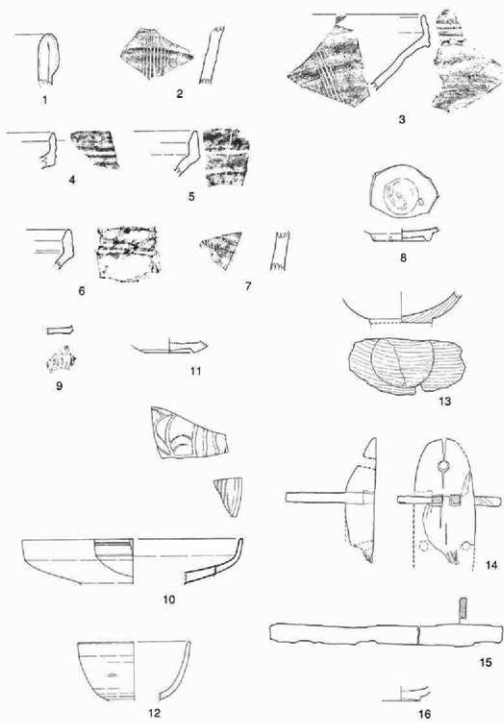
石敷き遺構の西側に南北の長さ4.5m、幅1.5mで断面逆台形の溝である。深さ0.6mで底の幅は0.4mである。南部分に溝3より古い川原石を敷いた遺構がある。石敷き遺構に先行する遺構で溝2を作るときには埋まっていたが溝の壁としては柔らかいために竹管を立ててさらに板で補強したと思われる。

石敷き遺構の石垣が崩壊したような川原石を除去して検出した。崩土からは瓦などが出土した。上層から出土した土師器のうち2・3・4はロクロ成形の皿である。底部にヘラキリ痕がある。2は内面が焦げつきで黒色。1は糸きり底。5・6・7は手づくね成形の小皿である。10は須恵質の小皿で備前焼の古い時期に属す。8は備前焼とは異なり3条のスリ目、薄い器壁、砂質の胎土で唐津系の播り鉢で17世紀に属すと思われる。青磁碗11は推定口径13cm、オリブ灰色、胎土は灰白色である。青花碗12はケズリ出し高台が高く、外側に二重線、体部には唐草文を描く。青花皿14は底部中央部のみ残存、見込みに絵、底部には窯印状の印を描く。染付皿B2群。青花皿13は高台径9cm、ケズリ出し高台、体部には唐草文、見込みに二重線と風景文を描く。染付皿B1群に属し、15世紀後半から16世紀前半の所産である。天目茶碗15は茶色の釉で胎土は灰白色を呈する。備前焼9は鶴首徳利である。ケズリ出しの低い高台で、胴部径は13cm、底部には陶工の印がへら書きされている。16世紀後半17世紀初頭の所産。鉄紫付皿16は銅製で一枚の銅板を押し当てて、15枚の花弁のある直径4.5cmの杯

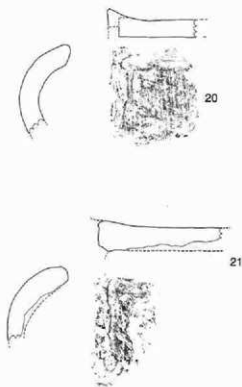


第44-1図 溝2実測図

第44-2図 溝2土層断面図



第45図 溝2出土遺物実測図1/4

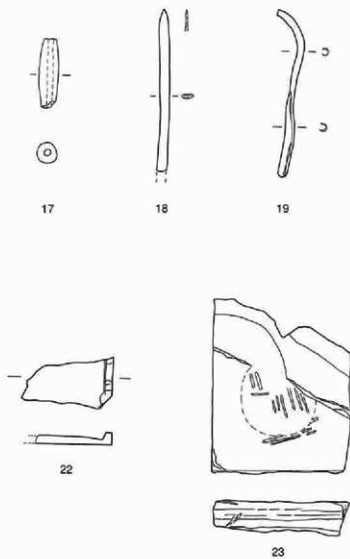


第46図 溝2出土遺物実測図1/4

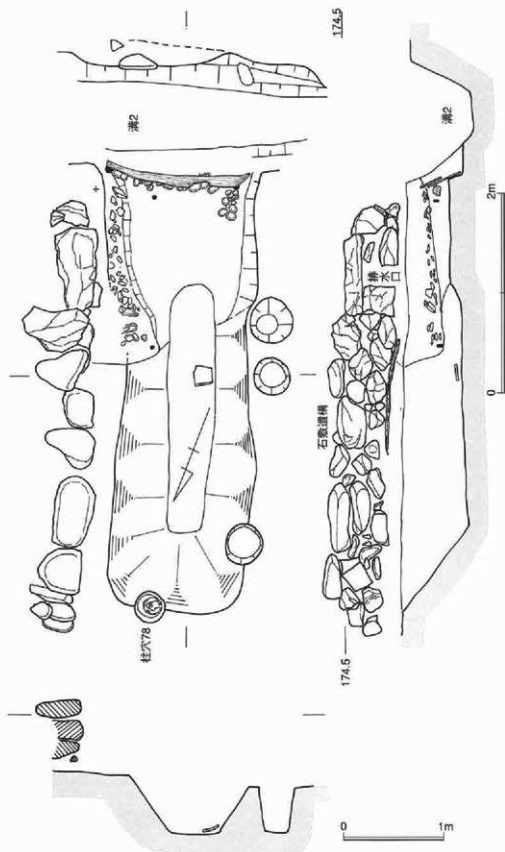
状に作っている。高台と見込み部分の1cmの円盤を目釘でつないで固定している。内側は菊の花を模して、円盤には格子状のケガキがある。かなり手が込んだ作りである。広島県吉田町郡山大通院谷遺跡は毛利元就の居城である郡山城の一角にある遺跡で鉄葉付皿が出土している。本遺跡のものより一回り大きく直径5.1cmの16枚の花弁である。用途については不明である。下層からは長さ1.8m、幅30cm厚さ1cmの松板が投げ込まれたような状態で出土した。板には釘のあとがあり、使用材であろう。丸瓦20は残存長20cm、幅13cm、厚さは1.7cm内面にはタタキ目、細かな布目が部分的に残り、被熱している。平瓦は3枚出土した。大きさは25×21cm、厚さ1.5cmの同一規格であり、砂粒を含み灰色を呈する。凹面は幅1cmのヘラ状の工具でナデている。

④ 溝4

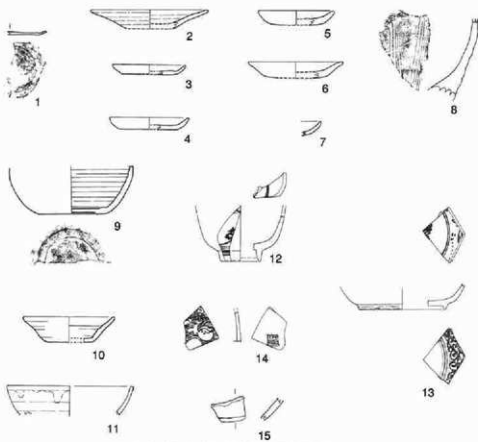
北西の建物群を囲むようにL字状をなす。東側は建物4の面から一段下がった崖下に掘られている。北西の井戸3に切られるまで11mを測る。幅50cm深さ40cmで溝5・6に先行すると思われる。溝の底は一定方向に下がっていないことから排水溝ではなく、建物の周囲を廻る防湿の溝と考えられる。溝4には鍛冶炉を伴う建物10・12が共存すると思われる。土師器1はロクロ成形の口径15cm器高2cmの浅い皿。底部にヘラキリ痕がある。2もロクロ成形の土師器、10はロクロ成形の小皿で底部に板目が残る。その他の土師器は手づくね成形の土師器である。青磁大皿12は片影花文が描かれる。土鍬3個・刀子片などが出土した。



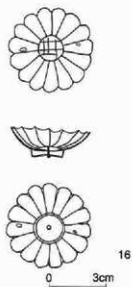
第47図 溝2出土遺物実測図1/2



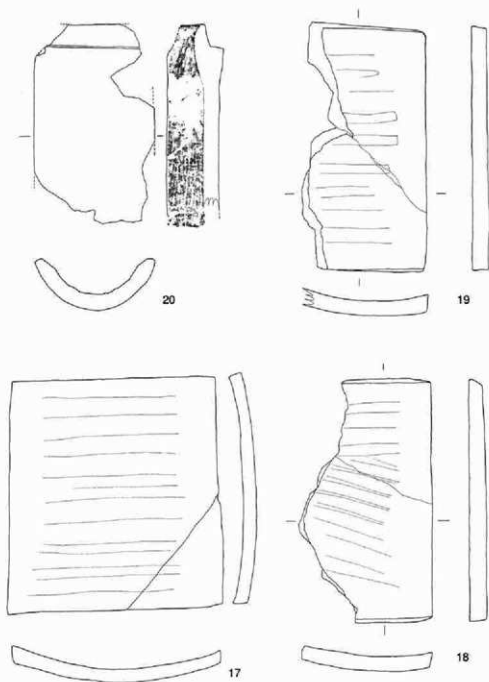
第48図 溝3実測図



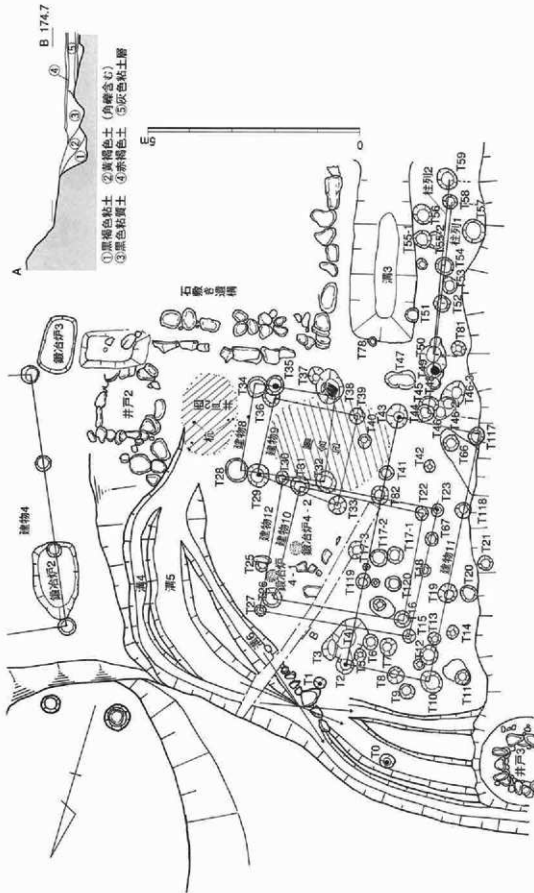
第49図 溝3出土遺物実測図1/4



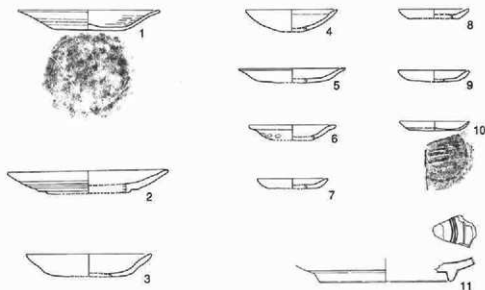
第50図 溝3出土遺物実測図1/2



第51図 満3 出土遺物実測図1/4



第52図 溝4、5、6周辺実測図 (Tは柱穴の略)



第53図 溝4出土遺物実測図1/4

⑤ 溝5

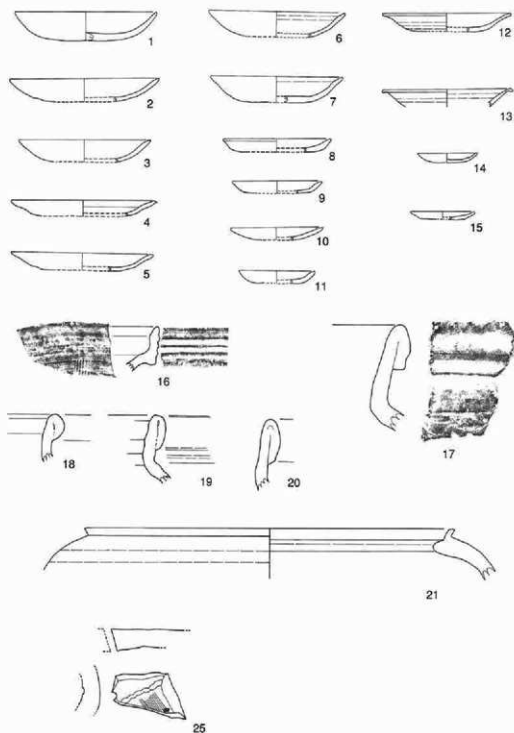
井戸2の西から、溝4を切る幅70~100cm、深さ50cmであるが、土層断面の観察では溝6に切られているが上辺1m以上、下辺50cmの逆台形を呈する。全長11mで井戸3によってきられている。位置からすると建物11が共存する可能性がある。上層には山石などが投げ込まれた状態で出土した。土師器15個実測できた。手づくね成形とロクロ成形の大皿と小皿である。備前焼は5個のうち、摺り鉢は口縁部外面に4条の凹線、スリ目は7条。寛口縁部は玉縁から長い折り返すものまであり、15世紀から16世紀の幅がある。21は短頸壺で蓋受け状をなす。硯26は海部分を欠くが残存する長さは6.2cm幅4.4cm厚さ1cmの粘板岩製である。碁石27は楕円形の黒石である。その他に獣骨が出土した。金属器には鉄釘22、筒状の鉄製品23・24は使途不明である。丸瓦25は内面にコビキ痕、吊ひも痕がある。

⑥ 溝6

溝5の西側から北へ伸びて溝4・5と交差して北端を西へ3mで井戸3によって切られるまで12mを残す。検出面では幅50cm前後であるが、土層断面の観察では幅が1m近くになる。溝4・5と交差する地点では南側の壁に数個の石を並べて補強している。土師器1はロクロ成形で口径13cmの皿、口縁端部が開く。手づくね成形の口径13.5cm器高2cmの皿2は鍛冶炉2、包含層出土の土師器と同一個体である。それらの遺構が時期が近いことを思わせる。天目茶碗4は内外面とも黒色を呈する。この破片は井戸2出土の天目茶碗と接合された。溝6は井戸2からの排水路としての機能があったことがわかる。備前焼3は大甕の底部である。ヘラケズリ痕が見える。

⑦ L字溝

石垣1の西側にあつてクランク状に南へ延びて段丘下へ落ちる溝である。石垣を埋めた層を除去して検出した。土塼5の東と南では石を両側に並べていた。水が流れたため砂利層が認められた。水の取り口は溝1付近と思われる。溝2との共存も考えられる。砂利層から土師器1~4はいずれも手づくね成形で口径13.5cmから11.3cmである。青磁5は淡緑色の龍泉窯系で線描きの蓮弁文碗、B4類に属す。青花碗6は口径11.5cm乳白色を呈し、口縁部内外面に1条の線、体部に花文を描く。青花皿7

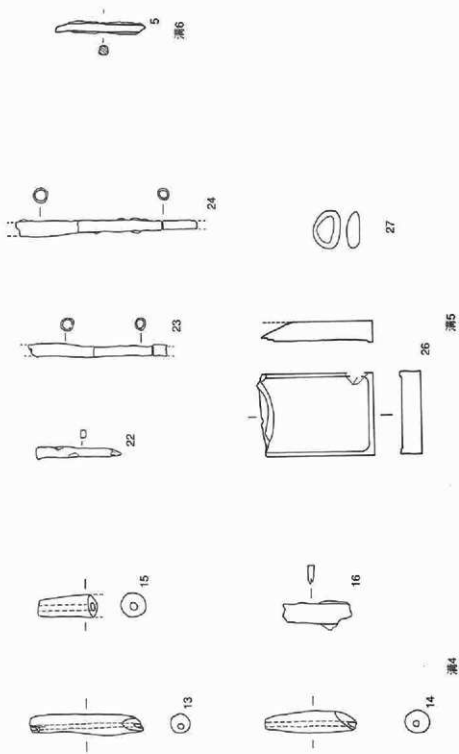


第54図 溝5出土遺物実測図1/4

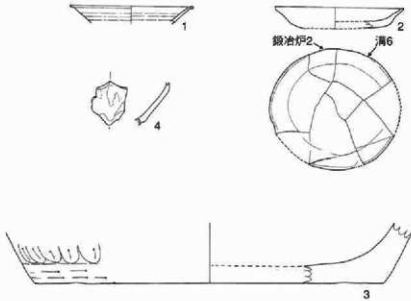
は見込みに人物を描き2条の圈線が廻る。高台外面に2条、底部には2条の圈線内に「明造」の字を書く。青花皿B2群。鉄釘6本と筒状の鉄器10が出土した。

⑧ 西溝

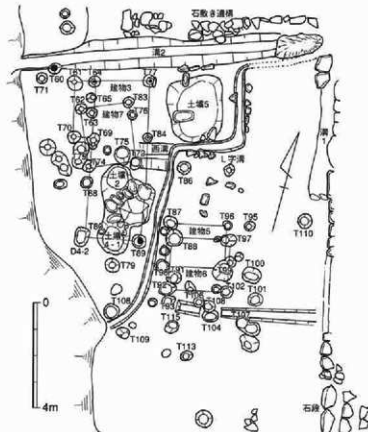
L字溝の屈折部分の西へ幅1m深さ10cmの浅い溝を検出した。1mあまりで消滅する。黒褐色土か



第55図 溝4、5、6出土遺物実測図1/2

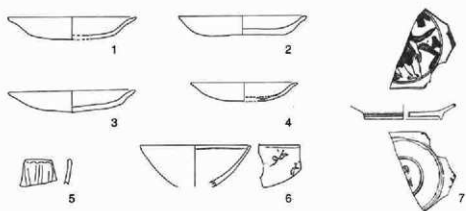


第56図 溝6出土遺物実測図1/4

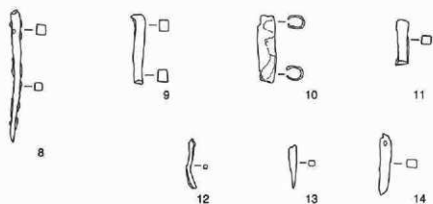


第57図 L字溝実測図 (Tは柱穴の略)

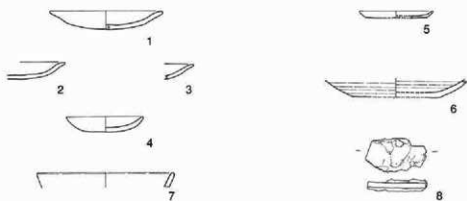
ら出土した土師器1～4は手づくね成形は口径8～12cmで底部に指圧痕がある。ロクロ成形5は底部にヘラキリ痕が見られる。6はロクロ目が顕著、乳白色で胎土に砂粒が見られない。白磁碗7は推定口径14cm、灰白色を呈する。鉄片8は厚さ0.5cmを測る。



第58図 L字溝出土遺物実測図1/4



第59図 L字溝出土遺物実測図1/2



第60図 西溝出土遺物実測図1/4

(1/2)

第5表 溝一覧表

遺構名	構造	幅(cm)	長さ(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	
					種類	数量
溝1	底に石敷き	50~50	800	50	弥生後群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、瓦、鉄製片(赤銅)、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝2	横断面方形	70~120	950	20~60	古瓦、土師器、瓦、土師器、古銅、白磁、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝3	横断面台形	120~150	430	30~60	弥生群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝4	U字形	40~50	1230	30	弥生群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝5	断面方形	55~100	1000	54	弥生群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝6	断面台形	30~65	1090	40	弥生群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝7	溝状	35~60	1500	30	弥生群り鉢、前期漢、物前巻、白磁漆、古銅、長瀬入目土器、古瓦、瓦、土師器、アモニシ貝、古瓦、瓦	土師 銅板こうがい、銅
溝8	溝状	100	110	10	土師器、白磁	

第6表 溝出土遺物一覧表

溝番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口徑	縦径	器高						
1	溝1	土師器	皿				赤色	17C	砂粒含む	中や軟	水師焼	
2	溝1	土師器	皿				赤色	17C	砂粒含む	中や軟	水師焼	
3	溝1	土師器	皿	16.8	8.0	1.7	赤褐色		砂粒	中や軟	テブク内面は磨石や灰面をうけて黒色	
4	溝1	土師器	皿	13.8	6.0	1.5	暗褐色					
5	溝1	土師器	皿	16.8			淡褐色		砂粒含む	中や軟	テブク内面は磨石や灰面をうけて黒色	
6	溝1	土師器	皿	11.6	8.0	2.0	黄褐色		細粒含む			
7	溝1	甕前焼	甕	31.4			赤褐色					
8	溝1	甕前焼	甕	48.8			1)暗褐色 2)黄褐色	10C前半		真	内面白磁焼	
9	溝1	甕前焼	罎形鉢				暗褐色(赤銅)	10C前半		真	2条の凹線状の地文	
10	溝1	甕前焼	罎形鉢				黒褐色			真	了集のヤサ目内面はなめらかな使用痕、外側に3条の凹線	
11	溝1	甕前焼	罎形鉢				赤褐色	罎形 10C後半		真	スリ目が交差(割の)	
12	溝1(上層)	甕前焼	罎形鉢				赤褐色	10C後半		真	割のスリ目がほぼ明瞭	
13	溝1	陶器	瓦(瓦葺)				内面赤褐色 -外側 -黒褐色(赤銅)		層積	真	ロタロ成形	
13-2	溝1	陶器	瓦(瓦葺)				内面黒褐色		層積	真	ロタロ成形約0.5mm交し	
14	溝1	青磁	香炉				明緑-灰				見立器状のナガ瓦気炎焼成内面無施	
15	溝1	青磁	大甕		115.0						丹戸1と同一	
17	溝1	水滸	漆器	24.0	1.9	0.3					光とがる	
18	溝1	水滸	漆器	12.0	1.5	0.7					光とがる	
19	溝1	水滸	漆	20.7	0.8	0.4					ヒノキ	
20	溝1	水滸	漆	25.2	0.8	0.3					ヒノキ	
21	溝1	水滸	漆	11.2	0.5	0.2					ヒノキ	
22	溝1	水滸	赤褐色	6.3	0.9	0.4					ヒノキ	
23	溝1	水滸	漆器		表面6.2						内面赤色漆外赤褐色漆一面に赤の捺文模様	
埋藏番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口徑	縦径	器高						
溝1	溝1	瓦葺	瓦葺	全長	瓦瓦長	瓦葺			11.0	黒色	白褐色	内面にコベキ 外周は裏焼
溝2												
埋藏番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口徑	縦径	器高						
1	溝2(上層)	甕前焼	甕				内面赤褐色 -外側 -暗褐色(赤銅)			真	白色自然釉ナテ	
2	溝2(上層)	甕前焼	罎形鉢				黒褐色			真	9条のスリ目	
3	溝1(地上部)	甕前焼	罎形鉢				内面暗褐色 -外側 -赤褐色			真	煮焼ナテ9条のスリ目	
4	溝1(地下部)	甕前焼	罎形鉢				暗褐色			真	(浅い)2条の凹線状の地文、外部は赤褐色を呈し白色の自然釉、内面に3条の凹線ナテ	
5	溝1(地下部)	甕前焼	罎形鉢				暗褐色			真	白色自然釉煮焼ナテ	
6	溝1(地下部)	甕前焼	罎形鉢				黄褐色			真		
7	溝1(地下部)	甕前焼	罎形鉢				内面黒色 -外側 -赤褐色(赤銅)			真		
8	溝2	青磁	甕		5.2						内外面焼	
9	溝2(下層)	青磁							白色層積		見立中心には焼成し底周はロタロ	
10	溝2(上層)	青磁		23.0			明緑灰		灰白磁 裏赤 -外側 -黄褐色		丹物花文 -底周は赤 -底周は赤 -底周は赤 -底周は赤	
11	溝1(地下部)	青磁	甕		5.2		オリーブアツ				赤褐色	
12	溝1(地下部)	陶器	甕	12.0				10C前半			縦に黄褐色丸線、ロタロ成形	
13	溝2	水滸	漆器		7.0						内面赤漆 外面黒漆 底周欠削	
14	溝2	水滸	下駄	15.0	6.0	3.0					両部分積長1.5mm(厚)1.0mm(厚)1.0mm	
15	溝2	水滸	漆器	24.5	2.5	0.7					赤褐色	
16	溝2(上層)	陶器	瓦(瓦葺)		4.0		内面黒色		灰白色層積		ロタロ成形底周赤銅合し高台筒(平焼)内底焼	

第3章 発掘調査の概要

図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	色調	胎土	焼成	特徴	
				最大径	最大幅	孔径						
17	溝2	土埴	土埴	36	10	3		黒色	砂粒少ない	強い	ほぼ完整	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	材質	年代			
				最大径	最大幅	孔径						
18	溝2	金属	二の穴	90	2	2			青銅			
19	溝2	金属	節り金	90	3	1			青銅		断面C字割	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	厚さ	色調	胎土	焼成	特徴
				全長	丸尻径	口径						
20	溝2(砂埋)	瓦	軒丸瓦	(9,3)			5.9	1.8	灰白色	砂粒含む	やや軟	コビネ状
21	溝2	瓦	丸瓦	(13,0)			4.5	(推定)	顔料カーボン	灰白色 砂粒含む	やや軟	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)					
				最大径	最大幅	最大厚						
22	溝2(下層)	紀勢岩	瓦	4.5×3.7		6.4					不定定	滑りあり
23	溝2(砂埋)	紀勢岩	瓦	7.4×5.5		1.5					不定定	すり溜り痕

溝3												
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高						
1	溝3	土埴器	甕		6.0		赤褐色			砂粒なし	強い	赤褐色
2	溝3	土埴器	甕	12.0	5.0	2.0	外周部灰色 胎土に赤色			赤粒多い	強い	ロクロ目
3	溝3	土埴器	甕	7.6	5.0	1.0	褐色			強い	ロクロ目	底へタおこし
4	溝3	土埴器	甕	8.4	6.0	1.3	褐色			強い	ロクロ目	へタおこし ナデ
5	溝3	土埴器	甕	8.0	5.0	1.5	淡褐色			細粒含む	やや軟	つぶこね
6	溝3	土埴器	甕	10.0	4.5	1.7	灰色			細粒含む	やや軟	つぶこね
7	溝3	土埴器	甕				褐色			細粒含む		つぶこね
8	溝3	滑石系	信り鉢				内周部白色 外周部灰色 胎土に赤色					3条のすり目
9	溝3	磁白焼	磁片				赤褐色	19C後半 19C初		強い		内周ロクロ目状に灰色を帯り出し 底面にホコリ
10	溝3	磁赤器	甕	8.7		2.7	灰色	19C後半	胎土 磁赤器に付随	強い		不老山窯口系
11	溝3	雪花	陶	(13,4)			オリーブ灰					
12	溝3	雪花	陶	(4,2)								ロクロ痕跡 磨り出し出白 胎土磁赤器透明
13	溝3	雪花	陶	(9,1)				19C後半 →19C初				ロクロ痕跡磨り出し高台透明胎土1層跡磁赤器あり
14	溝3	雪花	陶									底面中央付足の跡 意2形
15	溝3	陶片	丸瓦片				内外とも灰色			灰色	胎土	ロクロ目
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)			特徴		
				全長	最大径	最大厚						
16	溝3	鉄器	直徑45 高さ15								高さ約16mm高台高さ5mm高台中心の目付で高台を本体と内周部を 々々固定	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	色調	胎土	焼成	特徴	
				全長	底径	器高						
17	溝3	瓦	平瓦	35.0	22.5	21.0	1.0	表面灰色 底面灰色	砂粒含む	瓦	表側ナデ 裏側ナデ	
18	溝3	瓦	平瓦	35.0	14.0	8.0	1.8	表面やや濃い灰色 底面灰色	砂粒含む	瓦	表側ナデ 裏側ナデ	
19	溝3	瓦	平瓦	35.0	12.5	7.7	1.6	表面灰色灰色の境 底面灰色灰色の境	砂粒含む	やや軟	表径1cmの現状目で鉄ナデ 裏側鉄ナデ	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	厚さ	色調	胎土	焼成	特徴
				全長	丸尻径	口径						
20	溝3	瓦	丸瓦	(19,7)	18.9	2.3	3.7	1.6	褐色 焼成	砂粒含む	やや軟	内面に細かなすり目ナデ目へタ磨り

溝4												
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高						
1	溝4	土埴器	甕	15.0	7.2	3.2	淡褐色			強い		内外周部ナデ 底面へタキリ ロクロ目
2	溝4	土埴器	甕	17.0	9.0	3.4	明褐色			やや軟		ロクロ目 底面へタキリ
3	溝4	土埴器	甕	13.7	5.0	2.4	明褐色			細粒含む	やや軟	すりこね ナデ
4	溝4	土埴器	甕	9.4	2.5	2.4	褐色			細粒含む	やや軟	すりこね ナデ
5	溝4	土埴器	甕	11.7	4.0	1.5	明褐色			細粒含む	強い	すりこね 底面滑直
6	溝4	土埴器	甕	9.0	4.0	1.6	明褐色			強い	外周に磨り直 内周ナデ	
7	溝4	土埴器	甕	7.5	4.4	1.0	明褐色			細粒含む	やや軟	底面磨り直 へたおこしナデ
8	溝4	土埴器	甕	7.4	5.2	1.0	褐色			砂粒含む	やや軟	ナデ
9	溝4	土埴器	甕	7.4	3.0	1.2	褐色			細粒含む	やや軟	へたおこしナデ 外周ナデ
10	溝4	土埴器	甕	7.4	5.0	1.0	淡褐色			強い		底面磨り直 ナデ
11	溝4	滑石	大磨り	(14,2)			オリーブ灰	19C →19C初	胎土			片断のみナデ 胎土透明
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	色調	年代	胎土	焼成	特徴
				最大径	最大幅	孔径						
12	溝4	土埴	土埴	38	10	3		2	暗灰色	砂粒多し	やや軟	完整
14	溝4	土埴	土埴	48	12	3		6	暗褐色	砂粒含む	やや軟	ほぼ完整
15	溝4	土埴	土埴	29	12	4	(6)		暗褐色	砂粒含む	やや軟	
図紙番号	図紙通称名	種類	器種	計測値mm			重量(g)	材質	時期			
				最大径	最大幅	最大厚						
16	溝4	刀子		36	10	2						特徴

発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	溝5	土師器	甕	15.0	5.0	3.0	褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね1口内底面部分に厚肉外底面スリ内部底面削けたあと
2	溝5	土師器	甕	15.0	6.0	2.5	灰白色		細粒	強い	手づくね 薄底煎 ナメ
3	溝5	土師器	甕	15.0	6.0	2.4	褐色		細粒	強い	手づくね 底面に削り痕 ナメ
4	溝5	土師器	甕	15.0	5.0	1.7	褐色		細粒		手づくね 口縁部外反
5	溝5	土師器	甕	15.0	8.0	1.8	暗褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね 薄底煎
6	溝5	土師器	甕	14.0	4.0	2.7	褐色		細粒	良好	手づくね 内面削でいいいなナメ 薄底煎
7	溝5	土師器	甕	14.0	6.0	2.8	暗褐色		砂粒	やや軟	手づくね 外底面削り ナメ 口縁部外反
8	溝5	土師器	甕	11.4	3.0	1.4	褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね
9	溝5	土師器	甕	9.5	7.0	1.5	褐色		細粒含む	やや軟	手づくね
10	溝5	土師器	甕	9.7	4.0	1.3	淡褐色		細粒含む	やや軟	手づくね
11	溝5	土師器	甕	8.0	3.0	1.3	淡褐色		細粒含む	やや軟	手づくね
12	溝5	土師器	甕	13.6	6.0	2.0	暗褐色			強い	ロタロ ロタロ目 横ナメ
13	溝5	土師器	甕	13.8			淡褐色			堅固	ロタロ ロタロ目 横ナメ
14	溝5	土師器	甕	6.3	3.0	1.0	内面黄褐色 外底面灰色				ロタロ ナメ
15	溝5	土師器	甕	6.8	4.8	0.9	内面黄褐色 外底面灰色				ロタロ ヘラ切り
16	溝5	甕前焼	椀形鉢				赤褐色	10C後半	灰色		3mm間隔7条のスリ目 外周に4条の筋線
17	溝5	甕前焼	大甕				赤褐色	10C		堅固	外周の縁部がシャープでない 胴面ヘラ削り 内面自然釉 下部青色自然釉
18	溝5	甕前焼	甕				灰色	10C? 1a? 10C前半			内面黒土もナメ
19	溝5	甕前焼	甕				A/B(不明)	13C末	2-3mmの 縦筋含む	堅固	口縁内部部部に自然釉 内外ナメ
20	溝5	甕前焼	甕				赤褐色	13C末	2-3mmの筋	堅固	ナメ1mm幅外周に自然釉
21	溝5	甕前焼	附屬品	38			内面黄褐色 外面黄褐色 自然釉				堅固 黒皮付
発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			重量(g)	材質	年代	特 徴	
				最大長	最大幅	最大厚					
22	溝5	金属	釘	45	3	3		鉄			
23	溝5	金属	釘	72	7	1		鉄		尖み?	
24	溝5	金属	釘	97	8	1		鉄			
発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値mm				色調	胎土	焼成	特 徴
				全長	丸尻長	玉縁	身幅				
25	溝5	丸瓦	瓦	(7.0)				(1.8)	内外黒色	灰色	やや軟 内面布目ヨロキタシも肌 中央穿孔
発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	特 徴		
				最大長	最大幅	厚さ					
26	溝5	粘板石	板	4.4×6.3×1.0		暗褐色			薄底煎		
27	溝5	漆器	椀	2.0×1.4×0.7		黒色					

発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	溝6	土師器	甕	15.0			灰色			強い	ロタロ ロタロ目
2	溝6	土師器	甕	15.0	6.0	2.3	内面黄褐色 外底面灰色(S/A)				手づくね 薄底煎・溝治印2箇所と横割
3	溝6	甕前焼	大甕			37.0	赤褐色	10C			ヘラ削り 底面
4	溝6	陶器	大口鉢				内面黄褐色・外底面黄褐色・自然釉		褐色胎土	良好	ロタロ 片打2の玉目筋線と縁合
発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			重量(g)	材質	年代	特 徴	
				最大長	最大幅	最大厚					
5	溝6	金属	釘	47	3	3		鉄			

L字溝

発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	L字溝	土師器	甕	11.5	4.6	2.4	淡褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね 薄底煎
2	L字溝	土師器	甕	13.5	6.0	2.0	暗褐色		砂粒含む	軟	手づくね 1.7mm幅
3	L字溝	土師器	甕	13.5	5.5	2.2	暗褐色		砂粒含む	軟	手づくね 1.7mm幅
4	L字溝	土師器	甕	11.5	4.0	2.0	赤褐色(横筋)		砂粒少い	強い	手づくね 1.7mm幅内面縦線
5	L字溝	青磁	碗				淡褐色	10C後半			内面黄 具4筋 薄底煎
6	L字溝	青花	碗	11.5	4.0		内外面乳白色		白色胎土		外周深い底筋
7	L字溝	青花	甕			10.2					成明釉 若底煎 2打 赤筋
発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			重量(g)	材質	年代	特 徴	
				最大長	最大幅	最大厚					
8	L字溝	金属	釘	70	5	5		鉄			
9	L字溝	金属	釘	37	5	6		鉄			
10	L字溝	金属	釘	36	9	1		鉄			
11	L字溝	金属	釘	23	6	4		鉄			
12	L字溝	金属	釘	27	3	2		鉄			
13	L字溝	金属	釘	23	4	2		鉄			
14	L字溝	金属	釘	23	6	4		鉄			

西溝

発掘番号	埋藏遺構名	種類	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	西溝	土師器	甕	11.7	8.0	2.0	淡褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね
2	西溝	土師器	甕	12.0		1.8	褐色 内面黄褐色(S/A)				手づくね

3	西溝	土師器	皿					黄褐色		砂粒含む	やや軟	
4	西溝	土師器	皿	8.0	4.5	1.6		赤褐色		粗粒含む	堅い	手づくね 底部磨任儀
5	西溝	土師器	皿	7.6	6.4	6.7		灰色			堅い	ロクロ 底部へたおこし ナサ
6	西溝	土師器	皿			9.0		乳白色				ロクロ ロクロ目底部へたおこし
7	西溝	白磁	鏡	(14.2)				灰白		白磁土(方山系) 灰色鉄質土		白縁のみ ロクロ成形 白磁貫入あり
民蔵番号	西溝遺構名	種類	器種	計量値mm			重量(g)	材質	年代	特徴		
				最大長	最大幅	最大厚						
8	西溝	金属	鏡片	34	60	5.9		鉄				

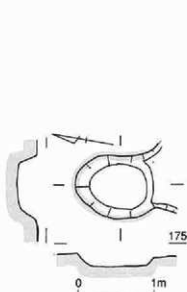
5 鍛冶炉

① 鍛冶炉 1

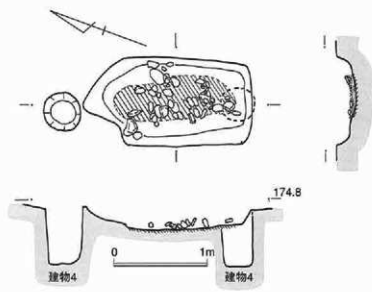
礎石建物 1 の南側に検出した直径70×100cmの楕円形、深さ25cmを測り、南側に一段低く灰や木炭・土師器などが堆積していた。礎石建物 1 とは共存しないが、前後関係は不明である。土師器は 1～4。1 は口径14.5cm手づくね成形、ほかは小皿で被熱して剥離したものもある。4 はロクロ成形の小皿である。5・6 は鉄釘か矢の茎であろう。

② 鍛冶炉 2

建物 4 の桁間に検出した。長径80cm短径100cm深さ20cmの変形長方形を呈する。上層の褐色土を取り除くと、こぶし大の石、土師器などが出土し、それらを取り除くと舟形の焼土面を検出した。焼土面は1.2m×0.5mの長楕円形である。土師器のうちの 1 は溝 6 と土器溜（包含層）出土のものと同一体であった。このことから鍛冶炉 2 が廃棄されて土師器が投棄されたとき、溝 6 は埋められてなかったことになる。建物 4 の柱穴は鍛冶炉 2 に先行する。2 は口径10cm薄手の手づくねである。3 は幅1cmあり、刀子の茎であろう。4 は鉄釘である。



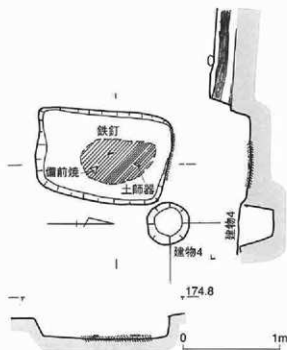
第61図 鍛冶炉 1 実測図



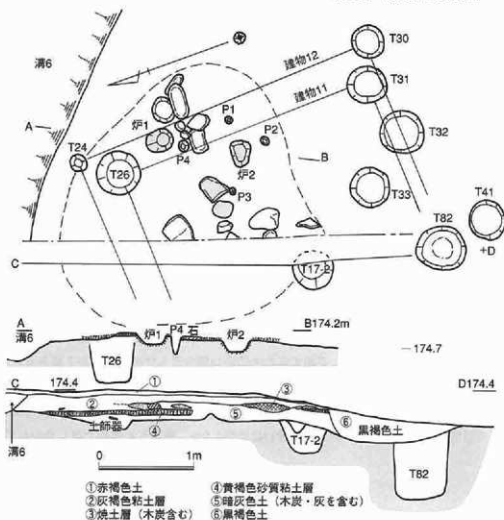
第62図 鍛冶炉 2 実測図

③ 鍛冶炉 3

石敷き遺構、建物4に接して検出した。
 1.4m×1m、深さ0.2mの長方形を呈する。
 中央部に0.8×0.4mの楕円形に焼け土や木炭の層がある。建物4との前後関係は不明であるが、石敷き遺構に伴う焼け土の下層で検出しており、石敷き遺構に先行することがわかる。土師器1は体部が緩やかに開く浅皿である。鉄器2～5は釘とクサビ状の不明鉄器である。備前焼が出土した。

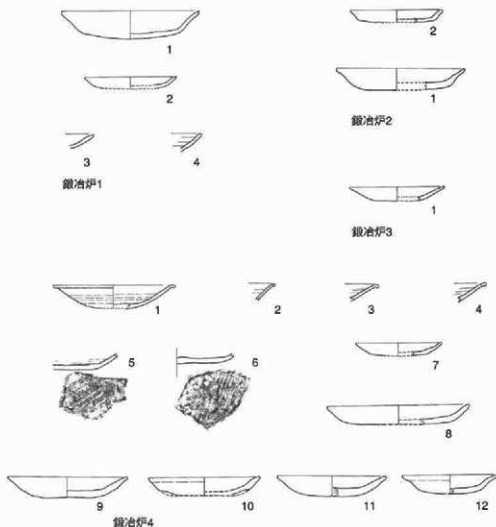


第63図 鍛冶炉3実測図



第64図 鍛冶炉4実測図 (Tは柱穴の略)

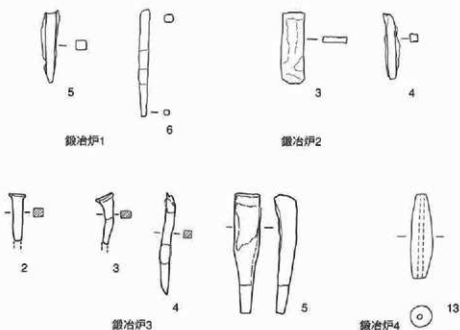
- | | |
|--------------|------------------|
| ① 赤褐色土 | ④ 黄褐色砂質粘土層 |
| ② 灰褐色粘土層 | ⑤ 暗灰色土 (木炭・灰を含む) |
| ③ 焼土層 (木炭含む) | ⑥ 黒褐色土 |



第65図 鍛冶炉1、2、3、4出土遺物実測図1/4

④ 鍛冶炉4

溝6の南側に焼け土、木炭、焼け石を含む層が広がっていて、鍛冶炉の存在を予想させた。土層には貼り床も観察された。炉は2つあり炉1は建物12に伴う可能性がある。炉1は30×23cmの楕円形で深さ16cm、周辺も内部壁も被熱して赤褐色を呈している。付近にも被熱した石があった。炉2は28×20cmの不定形、深さ25cm同様に壁も赤褐色に変色していた。炉2の周囲に直径6～10cm深さ20～27cmの杭跡が4箇所あり、鍛冶炉に伴うと考えられる。周辺の石にも被熱して赤褐色化したものがある。炉2は建物10が上屋の可能性がある。実測できた土師器13個のうちロクロ成形が7個ある。1は口径13cm暗灰色、底部に板目がのこる。いずれもロクロ目が残ри、口縁端部が丸い。底部のみの2点には板目が残っている。8～12は手づくね成形、器壁は厚く胎土に砂粒を含んで、底部に指圧痕があるものや被熱して器壁が剥離したものがある。土鍾13は定形4.5cm、重さ6g黒色で硬く焼かれている。



第66図 鍛冶炉1、2、3、4出土遺物実測図1/2

第7表 鍛冶炉一覽表

発掘遺構名	平面形	断面形	直径cm	包径cm	深さcm	時期	主な出土遺物
鍛冶炉1	楕円形	連台形	100	70	25		土師器類 瓦質土器 釘
鍛冶炉2	長方形	棒形	140~160	84~112	20~24		釘 鉄片
鍛冶炉3	長方形	長方形	130~140	32~94	42		羅刹地盤 土師 青釉 釘
鍛冶炉4-1	楕円形	連台形	20	24	16		土師 青釉 青釉 土師 釘 鉄片 遺物片
鍛冶炉4-2	不定形	連台形	20	20	14		

第8表 鍛冶炉出土遺物一覽表

鍛冶炉1											
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高					
1	鍛冶炉1	土師器	鉄	14.5	3.9	3.0	暗褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね復元形
2	鍛冶炉1	土師器	鉄	9.8	5.4	1.3	褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね
3	鍛冶炉1	土師器	鉄				明褐色		砂粒含む		手づくね内面は焼成で赤褐色
4	鍛冶炉1	土師器	鉄				赤褐色		砂粒含む	やや軟	ロタロ ロタロ目
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			重量(g)	材質	年代		特徴
				最大長	最大幅	最大厚					
5	鍛冶炉1	金属	釘	38	5	5.0		鉄			
6	鍛冶炉1	金属	丸鋸	37	5	4		鉄			
鍛冶炉2											
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高					
1	鍛冶炉2	土師器	鉄	13.5	6.0	2.3	内面赤褐色 外面褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね溝6包含物(同種物)
3	鍛冶炉2	土師器	鉄	19	6.0	1.3	暗褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			重量(g)	材質	年代		特徴
				最大長	最大幅	最大厚					
3	鍛冶炉2	金属	刀子の柄	38	12	3		鉄			
4	鍛冶炉2	金属	釘	35	5	4		鉄			
鍛冶炉3											
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高					
1	鍛冶炉3	土師器	釘	10.0	5.0	1.5	暗褐色		砂粒含む	やや軟	手づくね
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			重量(g)	材質	時期		特徴
				最大長	最大幅	最大厚					
2	鍛冶炉3	金属	釘	38	6	4		鉄			
3	鍛冶炉3	金属	釘	29	9	4		鉄			
4	鍛冶炉3	金属	釘	54	9	4		鉄			
5	鍛冶炉3	金属	釘	64	13	11		鉄			

調査坑4											
調査番号	発掘遺構名	種類	厚様	計測値mm			色調	年代	動土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	竈跡跡4	土層跡	溝	13.0	4.0	1.5	暗灰色			真	ロタロタロ目裏面に灰目
2	竈跡跡4	土層跡	溝				暗灰色			真	ロタロタロ目
3	竈跡跡4	土層跡	溝				灰白色			真	ロタロタロ目
4	竈跡跡4	土層跡	溝				茶褐色			真	ロタロタロ目
5	竈跡跡4	土層跡	溝				暗灰色			真	ロタロタロ目裏面に灰目
6	竈跡跡4	土層跡	溝				灰白色			真	ロタロ目裏面へりおこし灰目
7	竈跡跡4	土層跡	溝	8.0	4.0	1.4	灰白色			真	ロタロへりおこし
8	竈跡跡4	土層跡	溝	13.0	8.0	2	灰色		赤こし	真	手づくね 内外縁灰目
9	竈跡跡4	土層跡	溝	12.6	5.5	2.2	褐色		柳粒含む	やや軟	手づくね
10	竈跡跡4	土層跡	溝	11.8	6.5	2	内縁暗灰色 外縁赤褐色		柳粒	やや軟	手づくね外周縁部で調整
11	竈跡跡4	土層跡	溝	11.5	5.0	2.2	淡褐色		柳粒	やや軟	手づくね底部部厚
12	竈跡跡4	土層跡	溝	16.0	3.2	2	赤褐色		柳粒	軟	手づくねオサデヘラムがき
13	竈跡跡4	土層跡	溝	8.0	4.0	1.6	暗灰色		柳粒	やや軟	手づくね
調査番号	発掘遺構名	種類	厚様	計測値mm			重量(g)	色調	動土	焼成	特 徴
				最大径	最大幅	孔径					
13	竈跡跡4	土層	器	13	2	2	8	褐色	砂粒少ない	真	完形

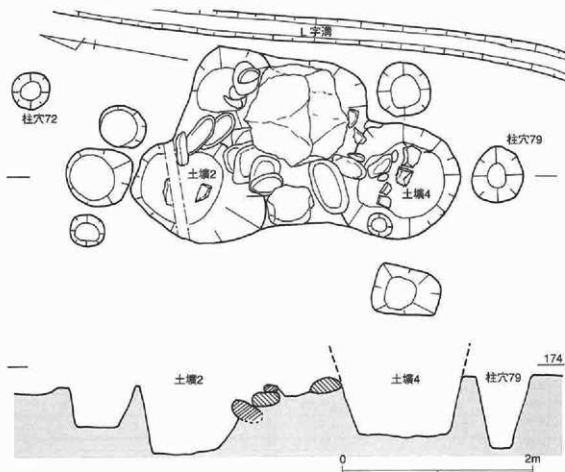
6 土壌

① 土壌1

当初黒色土を検出したが、斜面堆積物であることが明らかになったので、遺構から除いた。

② 土壌2

L字溝の西側に接して黒色土に石が充填した遺構を検出した。南側を川原石で囲った土壌は1.4×1 m 深さ0.65 mを測る。石などが投げ込まれた状態であった。建物3の柱穴の埋積土に比べて柔らか

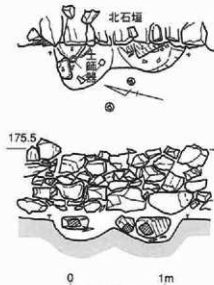


第67図 土壌2実測図

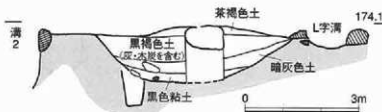
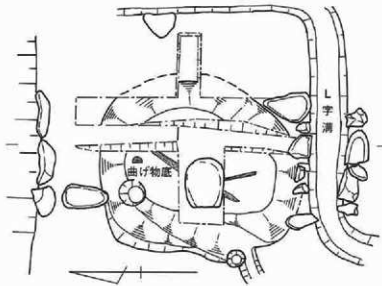
いこと、検出面が高いことなどから、建物3・7より新しい時期と思われる。土師器1～3は手づくね成形で底部に指圧痕が認められ、外面にススが付いているものもある。備前焼甕の口縁部5は厚い器壁を折り返し、端部には緑色の自然釉がかかっている。15世紀末に比定できる。4は壺の肩部に緑色の自然釉がかかり、液状文が薄く残る。青花碗6は口径15cm口縁部内面と外面に2条の線、体部には草花文を描く。土鉢7は黒色、緻密で硬く焼かれている。鉄製品8は厚さ4mmの板。9は青磁碗、淡緑色を呈す雷文風で、線描き大型蓮弁文である。高台内は軸ハギとりC2群に属す。

③ 土壌3

北石垣の下で検出したため東半分は調査できなかった。長径1.4m深さ0.2mの瓢箪形をなす。川原石が土師器などと落ち込んでいた。土師器は1～7はロクロ成形で底部が狭く、体部が広く器高が3cmと深い。2は口径に比べて浅い。3は手づくね成形だが器壁が薄く、灰白色で硬く焼かれた丸底である。4は器壁が厚く、底部に指圧痕があり、口縁部が屈折して開く。基石8は楕円形の黒石である。鉄釘9・10が2本出土した。

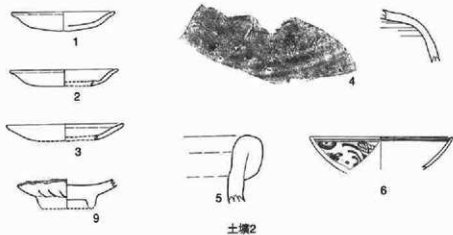


第68図 土壌3実測図

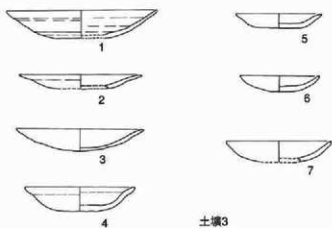


第69図 土壌5実測図

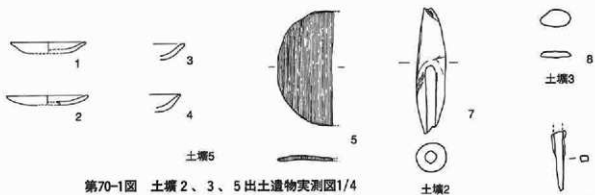
第3章 発掘調査の概要



土壌2



土壌3



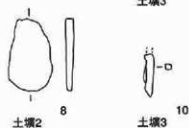
土壌5

土壌2

土壌3

土壌3

第70-1図 土壌 2、3、5出土遺物実測図1/4



土壌2

土壌3

第70-2図 土壌 2、3出土遺物実測図1/2

④ 土壌4

ルーズな黒色土に江戸後期の平瓦や土師器、備炭焼片が少量出土した。新しい掘り込みと思われる。

⑤ 土壌5

溝2の南側のL字溝がクランク状に曲がる内側に直径2mの不定形の土壌を検出した。深さ50cmで底から土師器・曲げ物底・木片などが出土した。L字溝の曲がり土壌の立地と関係があると思われる。土壌の上層構造は不明だが、何らかの建物があったと思われる。土師器1は口径8cmの小皿で底部に指圧痕がある手づくね土器である。木製品は曲げ物の底5は直径12.3cm、厚さ4mmの非常に細かな柃目板を使っている。周囲に柱穴など上層構造を想定するものがないため遺構の性格は不明である。埋積の状態から見ると最下層に木片や、土師器を含む黒色粘土が水平に堆積しており、水がたまっていた可能性がある。

第9表 土壌一覧表

遺構名	平面形	断面形	長径cm	短径cm	深さcm	底面形状	時期	主な出土物
土壌1								
土壌2	不整形四角		134	62	30	17.327		備前炭 備前瓦 白磁 赤磁 青瓦 土塊
土壌3	橢圓形		130	26	10~15	10.490		土師器
土壌4	不整形四角		150	110	10	17.314		
土壌5	不整形四角		220	190	12	11.010		備前瓦 土師器 遺物

第10表 土壌出土遺物一覧表

土壌2												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口径	口径	器底						
1	土壌2	土師器	皿		10.9	3.0	2.0	暗褐色	赤磁(50含む)		手づくね 内外面成熟	
2	土壌2	土師器	皿		11.4	3.0	1.8	暗褐色	赤磁含む		手づくねササヘラムがき	
3	土壌2	土師器	皿		12.4	6.0	1.5	赤褐色	赤磁含む		手づくね外縁部で潤滑	
4	土壌2	備前焼	炭					内面暗灰色 外面白緑色の 白土層	RC後半		製炭	緑色自然焼成状緑褐色の細ロクロ直
5	土壌2	備前焼	炭					外面赤褐色	RC末		製炭	1枚層に自然焼
6	土壌2	青花	瓦		13.3			灰白色	RC末		製瓦	1枚層内外縁二条の網 体部赤瓦文
土壌3												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	胎土	焼成	特徴		
				最大径	最大幅	口径						
7	土壌2	土師器	鉢		47	15	5	(11)	黒色	鉄胎	製い	
土壌4												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	材質	特徴		
				最大径	最大幅	最大厚						
8	土壌2	鉄器	不明		26	22	1		鉄			
9	土壌2	青磁	瓦					焼成				特徴
					5.0m			淡緑色				定文取組も大層赤瓦 高台は焼成さきり(1)製

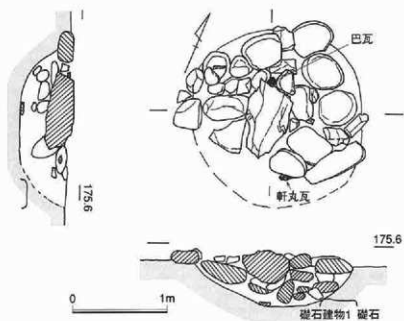
土壌3

土壌3												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口径	口径	器底						
1	土壌3	土師器	皿		16.0	6.0	3.0	灰色	細粒含む		やや軟	
2	土壌3	土師器	皿		15.0	5.0	1.5	暗褐色	細粒含む		製い	
3	土壌3	土師器	皿		15.5	1.0	2.4	灰白色	細粒含む		製い	手づくね 内外面成熟
4	土壌3	土師器	皿		11.5	4.0	2.6	暗褐色	細粒含む		やや軟	手づくねササヘラムがき
5	土壌3	土師器	皿		9.0	5.0	1.5	暗褐色	細粒含む		製い	手づくね底面潤滑
6	土壌3	土師器	皿		8.4	3.0	1.7	暗褐色	細粒含む		やや軟	手づくね外縁部で潤滑
7	土壌3	土師器	皿		11.0	1.0	2.3	暗褐色	細粒含む		やや軟	
土壌5												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口径	口径	器底						
8	土壌3	赤石			0.9×1.3	0.3			黒色			
土壌5												
発掘番号	発掘遺構名	種別	器種	計測値cm			色調	年代	胎土	焼成	特徴	
				口径	口径	器底						
1	土壌5	土師器	皿		8.0	4.0	1.2	褐色	赤磁含む		やや軟	手づくね内外面
2	土壌5	土師器	皿		8.5	4.0	1.0	淡褐色	細粒含む		やや軟	手づくね内外面
3	土壌5	土師器	皿					淡褐色	赤磁含む		やや軟	
4	土壌5	土師器	皿					淡褐色	赤磁含む		やや軟	
5	土壌5	木製品	柃目板		最大径(長径)	最大厚						遺物破断面
					12.3×1.5×0.4							

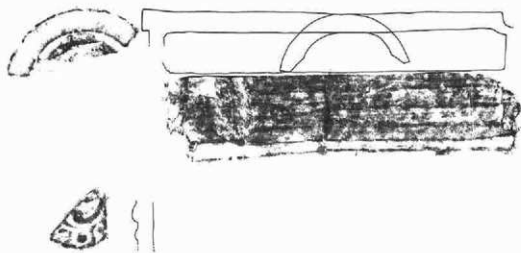
7 その他の遺構

① 集石遺構

第1トレンチに接して表土を取り除いて検出した。直径1.8m深さ0.5mを堀くぼめ、川原石などを投げ込んだ状態であった。瓦敷点が出土したが、いずれも江戸時代後期に属す。軒丸瓦は瓦当を欠くが長さ39cm、表面は灰色、内面は灰白色、ヘラで押さえた痕がある。江戸時代後期の三浦明次入部後、穴を掘って石とともに投げ込まれたものであろう。



第71図 集石遺構実測図



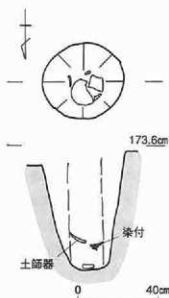
第72図 集石遺構出土遺物実測図1/4

② 主な柱穴

120箇所を超える柱穴を検出し、色々な遺物が出土したが、特徴ある柱穴・遺物について述べる。

ア 柱穴71-溝3の西端の南で検出した柱穴・遺物、直径40cm深さ60cmを測る。約18cmの柱痕に土師器、青花が投棄されて出土した。土師器2は直径14.7cm器高3cmの手づくねで、底部に指圧痕がある。青花3は口径13.8cm器高5cm口縁部内外面に2条、体部と見込みみに二重円などが描かれる。C群15世紀後半に属す。しっかりした柱穴であり、西側へ広がる建物であろう。

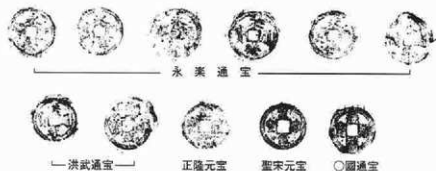
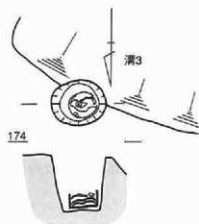
イ 柱穴78-溝3の北端に直径20cmの柱穴を検出して掘り下げていくと、曲げ物の縁、土師器、銅銭が出土した。曲げ物の中に土師器2枚を伏せ、銅銭12枚が数枚の重なりと散乱した状態であった。土師器を伏せた状態であり、蓋として重ねていたと思われる。とすれば曲げ物の中に何を入れていたであろうか。曲げ物は直径13~14cm少し楕円形、5~6cmの縁が残っていた。銅銭と接していた部分には緑青が付着する。土師器皿はいずれも直径13cm器高2.3cmで曲げ物の直径とはほぼ同じである。手づくね成形で灰色を呈する。銅銭は永楽通宝6、洪武通宝2、正隆元宝1、聖宋元宝?、開通宝、不明銭の12枚である。地鎮のためであろうか。



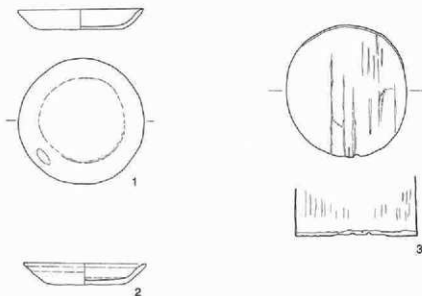
第73図 柱穴71実測図



第74図 柱穴71出土遺物実測図1/4

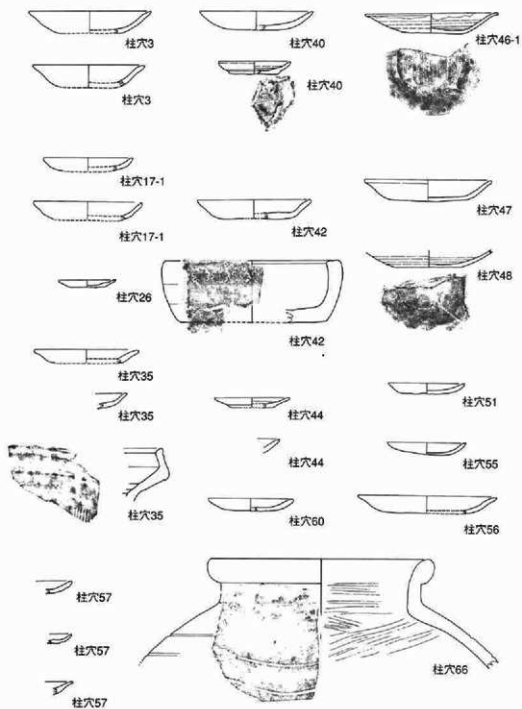


第75図 柱穴78実測図・銅銭拓本1/2

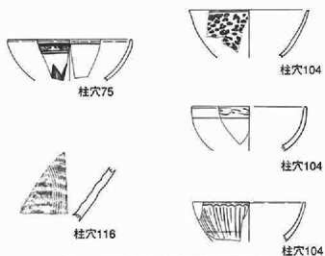


第76図 柱穴78出土遺物実測図1/4

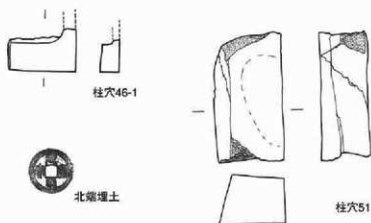
ウ その他の柱穴-検出した柱穴は120箇所あった。建物としてまとまらない柱穴からも遺物が出土している。柱穴0は溝5のなかに柱根が立ったまま検出した。残存長57cm直径10cmの柱はクリ材である。柱穴1にも柱根が残っていた。残存長48cm直径12cmで同じくクリ材である。柱穴3、17-1からは手づくね成形の皿で底部に指圧痕がある。柱穴26出土のロクロ成形の小皿は口径6cm器高0.8cm、硬く焼かれて底部にヘラおこし痕がある。柱穴35の備前焼播り鉢は硬く焼き締められ赤褐色を呈し、スリ目は5条、やや内傾する口縁部の外面に浅い凹線が数条めぐる。15世紀代の所産であろうか。柱穴40の手づくね成形の大皿は内面を丁寧にナデ、底部に指圧痕がみられる。ロクロ成形の小皿は硬く焼かれており、高台状の底部に板目が残る。柱穴42の瓦質火鉢は口径19cm器高6.6cmで灰白色を呈する小型の火鉢である。やややわらかい焼成で表面に化粧土を塗って、口縁部直下に9弁の花形スタンプがめぐり、底部直上に割り菱のスタンプがめぐる。意匠を凝らしたつくりで、茶道具の一つかもしれない。柱穴44のロクロ成形の小皿は口径8cm底部にヘラキリ痕を残す。柱穴46-1・柱穴48のロクロ成形土師器皿は底部に板目が残る。柱穴46-1から硯の未製品も出土した。柱穴49は深い柱穴でオニグルミ材の柱根が残っていた。残存長60cm直径27.5cmの太い柱である。オニグルミは柱の用材としては適材ではないようであるが、使われていた。柱穴51の砥石は直方体で使用痕が4面に残っていた。柱穴60の柱根は残存長35cm直径21cmのクリ材が使われていた。柱穴66の備前焼は口径23cmで玉縁をなして、垂直に立つ、肩部には2条の手描き凹線がめぐる。15世紀初めの所産であろう。柱穴75の青花碗はいわゆる蓮子碗で芭蕉の葉が描かれている。柴付碗C群に属す。柱穴104の青花碗は外面に小紋を描いた碗、青磁碗雷文崩しのC2群、と龍泉窯系の線描き連弁文碗B4群に属す。柱穴104が建物としてまとまらないが、15世紀後半以後の建物の一部であろう。柱穴107の長さ12.2cm幅1.4cm厚さ0.6cmの刀子である。柱穴116の備前焼播り鉢は7～8条の斜めスリ目がつく。16世紀後半の特徴を持つ。



第77-1図 柱穴出土遺物実測図1/4

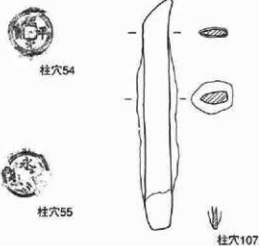


第77-2図 柱穴出土遺物実測図1/4



北端埴土

柱穴51



柱穴54

柱穴55

柱穴107

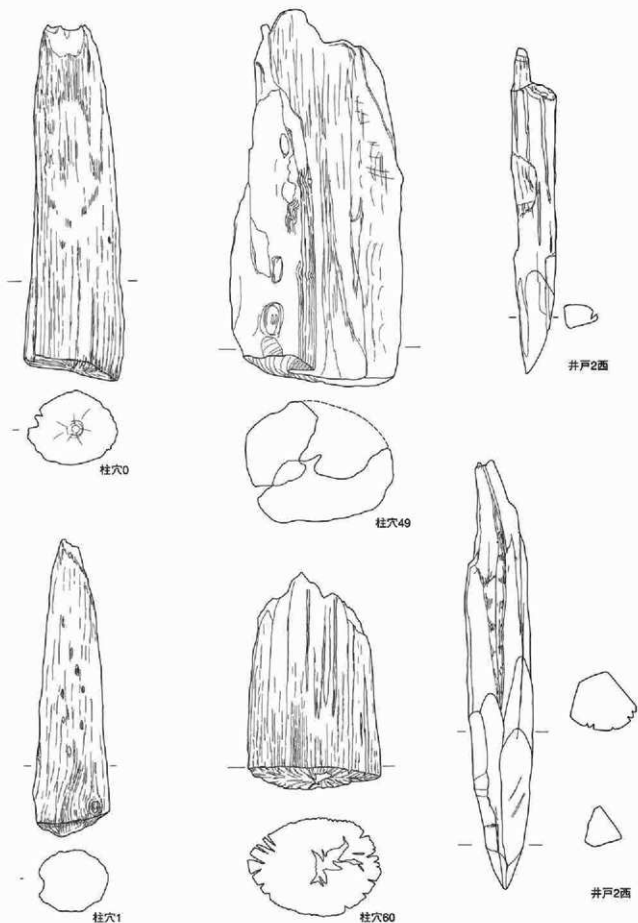
第77-3図 柱穴出土遺物実測図1/2

第11表 柱根一覧表

発掘遺跡名	寸法(cm)			材質
	器種	最大長	最大径	
柱穴0	杯	57	15	タリ
柱穴1	杯	48	12	タリ
柱穴2	杯	54	15	タリ
柱穴23	杯	80	8	ツブラジイ
柱穴28	杯	62	16	タリ
柱穴49	杯	60	28	オニダル土
柱穴60	杯	55	21	タリ
柱穴77	杯	57	11	タリ
柱穴84	杯	39	11	
南戸2西	板	43	4	タリ
南戸2西	板	55	2	タリ

柱穴出土遺物一覧表

柱穴71											
発掘番号	発掘遺構名	種類	形状	計測値 (cm)			色調	年代	粘土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
1	柱穴71	土師器	皿	11.6	4.0	2.4	褐色色		砂粒含む	やや軟	手づくね 灰水塗
2	柱穴71	土師器	皿	16.7	7.0	2.0	淡褐色		砂粒含む		手づくね内面だけいかならず磨り直
3	柱穴71	青磁	碗	13.8	5.0	5.1					口縁部内外面2条 條帯と見出しに2重内付
柱穴78											
柱穴78	土師器	皿	13.2	5.5	2.2	褐色色		砂粒含む	やや軟		定形器に準じた器物の中に収めた状態
2	柱穴78	土師器	皿	13.0	5.0	2.3	褐色色		砂粒含む	やや軟	定形器に準じた器物の中に収めた状態
3	柱穴78	木炭片	断面	12.7×14.0×6.5							樹皮12枚+土師器2枚+木炭片3枚と
				特殊(㎜)							
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.4								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.4								1156金
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.4								1101北条
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.4								北条
柱穴78	鏡貨	水玉通定	2.5								1490型
その他の柱穴											
発掘番号	発掘遺構名	種類	形状	計測値 (cm)			色調	年代	粘土	焼成	特 徴
				口径	底径	器高					
柱穴2	土師器	皿	13	2.4	2.4	褐色色		砂粒含む	やや軟		手づくね 外周部凹痕
柱穴3	土師器	皿	11.7	2.4	2.4	褐色色		砂粒含む	やや軟		手づくね
柱穴17-1	土師器	皿	9.4	1.5	1.5	赤褐色		砂粒含む	硬い		手づくね
柱穴17-1	土師器	皿	11.3	2	2	淡褐色		砂粒含む			手づくね 外周部凹痕
柱穴26	土師器	皿	6	0.8	0.8	灰白色		細粒	硬い		口付口 破へらおこし
柱穴28	土師器	皿	10.7	1.5	1.5	淡褐色		細粒少ない	硬い		手づくねナデ
柱穴28	土師器	皿				灰褐色		砂粒含む	やや軟		手づくね
柱穴28	櫛形鏡	楕円形				外周部磨面 内周部凹痕	13C前		磨製		直線状 ロクロ目スリ目5条
柱穴39	土師器	小皿	11.0	2.0	2.0	暗褐色		砂粒含む			手づくね内面だけ茶ナデや色附凹痕
柱穴40	土師器	皿	7.6	1.4	1.4	淡褐色			磨製 硬い		口付口付目縁部凹痕へきおこしナデ
柱穴42	土師器	皿	12.0	2.0	2.0	淡褐色		砂粒含む	硬い		手づくね内面だけ凹痕ナデ
柱穴42	瓦葺	大鉢	19.0	6.6	6.6	灰白色	13C-13C				表面に化粧土を塗る [陶外周花のスタンプ]体部下周縁のスタンプ
柱穴44	土師器	皿	8.0	1.1	1.1	明褐色一部黒色		細粒含む	やや軟		口付口付へらおこし
柱穴44	土師器	皿				赤褐色		砂粒含む	やや軟		手づくね
柱穴46-1	土師器	皿	14.1	2.1	2.1	灰白色					口付口付ナデ口付目縁部へらおこし ナデ目口付部スリ目
柱穴46-1	粘板瓦	瓦	2.5×2.2×1.06								灰黒面研磨
柱穴47	土師器	皿	13.4	2.3	2.3	淡褐色		細粒含む	硬い		手づくね外周部凹痕
柱穴48	土師器	皿		7.0		淡褐色					口付口付へらおこし口付目
柱穴49	土師器	小皿	8.9	1.2	1.2	淡褐色		砂粒含む			手づくね内面だけ茶ナデ上げ 外周部凹痕
柱穴51	粘板瓦	瓦葺	3.2×2.5×6.8			褐色					西京型用瓦
柱穴55	土師器	皿	8.6	1.2	1.2	淡褐色		砂粒含む	やや軟		空形手づくね内面だけ茶ナデ 外周部凹痕
柱穴56	土師器	皿	14.8	1.9	1.9	淡褐色			磨製 硬い		手づくね外周に凹痕内面に茶ナデ
柱穴57	土師器	小皿				淡褐色		細粒含む			手づくね
柱穴57	土師器	小皿				内周部磨面 外周部凹痕		細粒含む 細粒含む			口付口付へらおこし口付ナデ 手づくね
柱穴57	土師器	小皿				淡褐色		砂粒含む	やや軟		手づくね
柱穴60	土師器	皿	9.0	1.3	1.3	内周部黒色 外周部淡褐色					
柱穴66	燧石	石	21.0				13C後	細粒含む	磨製		外周に自然磨面部に2条の凹線
柱穴75	菅先	杖	12.4				13C後半				C形通子内
柱穴104	菅先	杖	12.0				13C				
柱穴104	青磁	碗	12.2				13C				輪郭部外周部凹痕 口縁部外周部凹痕
柱穴104	青磁	碗	12.0				13C				外周部凹痕4部並列
柱穴107	金属	刀子	最大長 最大幅 最大厚								付刃
柱穴107			12.2	1.4	0.6						鉄
柱穴116	燧石	楕円形				赤褐色	13C後		磨製		斜めスリ目7～8条内面口付目



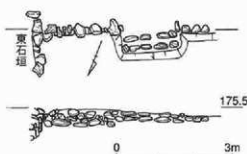
第77-4図 柱根、杭実測図1/6

③ 東石垣脇石垣

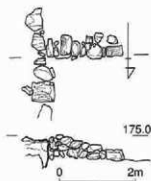
東石垣の南端にほぼ直角に西へ4.5m伸びる石垣がある。東石垣に取りつく2m部分は川原石と山石の乱積にし、その西は土を30cmほど盛って川原石を並べ、階段状にする。その部分は内側に張り出している。後に築かれたと思われるが、時期ははっきりしない。ただ、東石垣が機能しているうちに屋敷の南側に堀か土塁を作ったことも考えられる。

④ 石段脇石垣

石垣1の南は崖まで続いている。脇石垣は直交して西へ約2mのびる。川原石と山石を乱積に2～3段ほど積む。東石垣の脇石垣と同じように、石段が使われている時期に築いたのであろう。ちょうど石段の踊り場を思わせる。



第78図 東石垣脇石垣実測図



第79図 石段脇石垣実測図

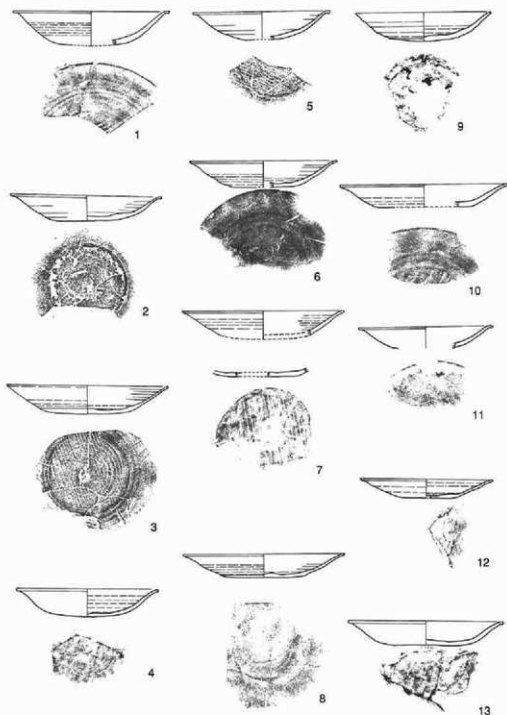
第3節 遺構に伴わない遺物

① 包含層（土器溜り）

建物8の西側の柱穴を検出する上層に遺構としては確認できなかったが、2m四方の範囲から特徴的なロクロ成形の土師器を中心に青花・青磁・備前焼などが破棄された状態で出土したので、一括資料として掲載した。

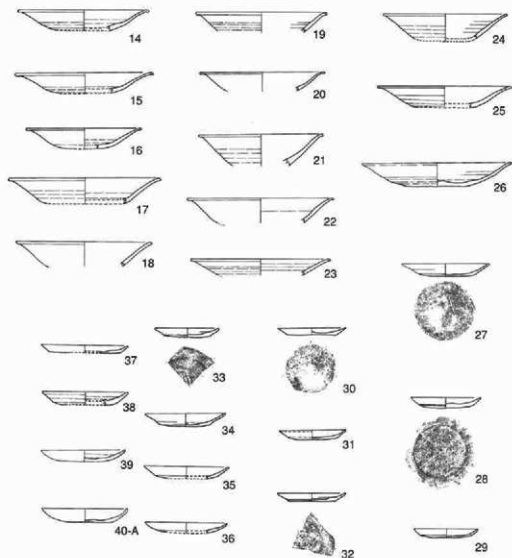
1から13はいずれもロクロ成形である。口径は14～17cm器高2～3cmの大皿である。ロクロ目がはっきり残り、薄い器壁の内面外面ともに丁寧にナデている。口縁端部は開いて玉縁状にまとめる特徴がある。口縁部が斜めに伸びるものはすくない。底部はヘラおこしのあと板目で押さえるものとそのままヘラキリ痕を残すものがある。胎土には砂粒を含まず。水漙しされ、焼成がよく淡い褐色を呈する。器高が高い皿は底部が狭く丸みを帯び、器高が低い皿は底部が広い。25までは底部を欠くが同様な成形である。26の底部中心はロクロ成形のため厚くなる。27から40もロクロ成形で口径6～9cmの小皿で器高が1.5cm以下である。口径と器高の比率が大皿に比べて大きい。大皿が5.7:1に対して小皿は7:1である。極端に浅い皿ということになる。底部にヘラキリ痕が残り、板目が付いているものもある。器壁が薄く、口縁部は少し内弯気味である。胎土は緻密で硬く焼かれている。

40-B～61は手づくね成形で口径10cm以上、器高は1.4～2.6cmの大皿である。底部に指圧痕があり、器壁は厚い。内面をナデ、口縁部は外傾するもの、端部が広がるものもある。45、53、56、57のよう



第80-1図 包含層出土遺物実測図1/4

に口縁部下を厚くするものもある。胎土には砂粒を含み焼成があまく褐色、赤褐色を呈する。底部が広く一見して浅い皿である。ちなみに口径と器高の比率は7.7：1で、ロクロ成形の大皿の5.7：1、小皿の7：1に比べても浅い。62～67は手づくね成形の小皿で口径が10cm以下、器高約1.5cmである。ロクロ成形の小皿のように浅くはない。胎土は大皿と同じく砂粒を含む。内面にススが付くものがあり、灯明に使われている。

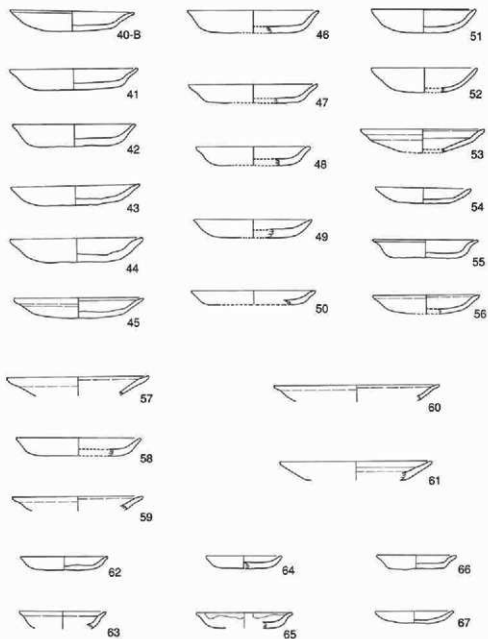


第80-2図 包含層出土遺物実測図1/4

さらに68～73は青白磁である。68は灰色の白磁碗、C群。69は畳付に溶着物がある。72は龍泉窯系の盤底部で淡緑色を呈し、外面に線描き蓮弁文、見込みにスタンプ模様などを線描きする。高台内は釉を剥ぎ取る。B1群。71・73も龍泉窯系の碗底部、線描き蓮弁文と無文で、B4群。74は青花碗で、外面に小紋を描き、口縁端部に2条の線が廻る。見込みに同じ小紋が描かれる。柱穴71出土の碗と同じく柴付碗C群に属すと思われる。75は青花皿の底部で見込みに二重圓線の中に花模様や渦巻きを描く。70は青磁皿で口径10cm、器高4.2cm、くすんだ緑色を呈する。76は青花皿で外反する口縁端内外に圓線がめぐる。

77～79は備前焼揺り鉢である。いずれも硬く焼き締められて赤褐色を呈し、スリ目は7、8条、口縁部がやや内傾し、外面に浅い凹線が廻る。16世紀後半の所産であろう。その他 鉄釘80・81、碁石らしい灰色の小石82・83、土錘84～89が出土した。

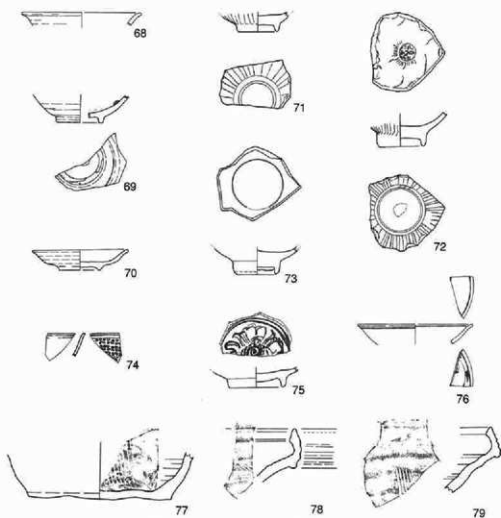
遺物の時代差があり、浅い窪みに投げ込まれたものと思われる。土師器皿41はすぐ北側の溝6、東の鍛冶が2出土の破片と接合し、この3つの遺構が同時に存在したことになる。



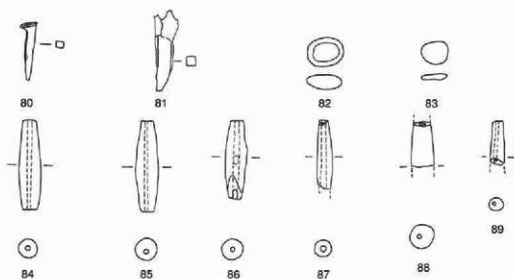
第80-3図 包含層出土遺物実測図1/4

②井戸2西包含層

井戸2の西側は溝6からつながるような浅い窪みがあり、粘土が堆積していた。南北に3本の杭が立った状態で検出された。1、2はロクロ成形の土師器皿である。口径18.5cmと口径13.5cm、ロクロ目が残り、口縁端部は玉縁状をなす。4、5は備前焼摺り鉢である。4は口縁部が垂直に立ち古い様相を持つ。5は口縁端部の内側に稜がある。6は大型の青磁皿か盤である。15世紀代の所産であろう。7は青花碗B群に属し15世紀代か。杭はクリ材である。(第77-4図参照)

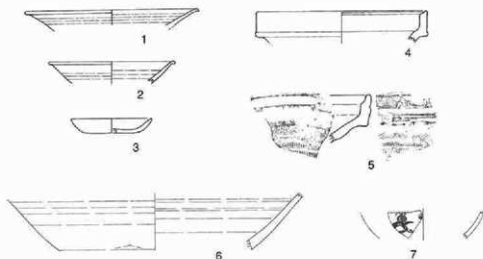


第80-4図 包含層出土遺物実測図1/4



第80-5図 包含層出土遺物実測図1/2

第3章 発掘調査の概要



第80-6図 井戸2西包含層出土遺物実測図1/4

第12表 包含層出土遺物一覧表

発掘番号	種類	器種	口径cm	底径cm	器高	色調	年代	粘土	焼成	特徴
1	土師器	皿	16.4	6.0	(3.7)	灰白色		細砂	直	底に灰目あり
2	土師器	皿	15.8	5.3	2.8	灰褐色		赤こし	焼い	底元空縁わず上部へらおこし
3	土師器	皿	17.0	6.0	3.0	鉄褐色		細砂	焼い	底元空縁 羽根のあとオチキへらおこし 底に灰目あり ロクロ痕
4	土師器	皿	15.0	7.0	3.0	鉄褐色		直	直	ロクロ ロクロ目直線オチキとへらおこし 深さ2.7m
5	土師器	皿	14.4	3.5	2.0	灰白色				底元空縁 ロクロ直上 底部傾斜オチキ
6	土師器	皿	15.3	7.0	2.8	灰褐色				オチキ痕 内側外面の口縁部傾斜
7	土師器	皿	17.0	7.0	(3.6)	鉄褐色		細砂	焼い	底元空縁 内外面にロクロ痕 底に灰目
8	土師器	皿	17.0	7.0	2.5	灰褐色			直	ロクロロへらおこし オチキ
9	土師器	皿	14.2	7.0	3.1	灰白色				ロクロロ 傾斜面 外面ロクロ目 へらおこし深さ2.5m
10	土師器	皿	17.0	10.0	2.4	緑い肌色		細砂	直	ロクロ直 オチキ
11	土師器	皿	14.2	6.0	2.3	灰白色		細砂	焼い	オチキ 傾斜
12	土師器	皿	14.0	5.0	2.0	鉄褐色			直	ロクロロへらおこし ロクロ目 内側傾斜 深さ2.0m
13	土師器	皿	16.0	8.0	2.0	鉄褐色			直	ロクロロへらおこし オチキ深さ2.0m
14	土師器	皿	15.7	5.3	2.5	鉄褐色			直	ロクロロ 内外傾斜 オクロ目
15	土師器	皿	14.3	5.3	2.2	鉄褐色			直	ロクロロ オチキ
16	土師器	皿	12.0	4.0	2.2	内側 灰褐色 外側 鉄褐色				ロクロロ 傾斜
17	土師器	皿	15.0	8.0	2.8	鉄褐色				ロクロロ 内外面 傾斜
18	土師器	皿	14.0			鉄褐色		直		ロクロロ 外面にへらおこし傾斜 オチキ 仕上げ深さ2.5m以上
19	土師器	皿	13.4			鉄褐色				ロクロロ 内外面傾斜 オクロ目 又又付着
20	土師器	皿	13.0			内側 灰褐色 外側 鉄褐色				ロクロロ 内外面傾斜 深さ1.7m
21	土師器	皿	13.0			鉄褐色				ロクロロ 内外面傾斜オチキ深さ2.7m オクロ目
22	土師器	皿	15.1			鉄褐色				ロクロロ 内外面傾斜 オチキ深さ2.5m
23	土師器	皿	14.8			鉄褐色		赤こし	細砂	ロクロロ 内外面傾斜 オクロ目
24	土師器	皿	12.8	(4.8)	2.0	鉄褐色		赤こし	直	ロクロロ 内外面傾斜 オクロ目 深さ2.0m
25	土師器	皿	14.2		2.4	内側 灰褐色 外側 鉄褐色			直	ロクロロ ロクロ目 傾斜 オチキ 深さ1.9m
26	土師器	皿	15.8	6.0	2.5	灰褐色			直	底元空縁 傾斜 オチキへらおこし
27	土師器	皿	9.2	4.4	1.4	鉄褐色		細砂	焼い	ほぼ空縁 オチキ
28	土師器	皿	7.4	3.0	1.1	鉄褐色		細砂	焼い	底元空縁 オチキ ロクロ痕
29	土師器	皿	6.8	3.0	1.0	鉄褐色		細砂	焼い	底元空縁 オチキへらおこし
30	土師器	皿	7.2	3.0	0.7	鉄褐色		細砂	焼い	ほぼ空縁 へらおこし
31	土師器	皿	7.0	3.2	1.3	灰褐色		細砂	焼い	底元空縁 へらおこし
32	土師器	皿	7.2	3.0	0.9	内側 鉄褐色 外側 鉄褐色		細砂	焼い	へらおこし ロクロロ
33	土師器	皿	8.6	2.6	1.0	褐色		細砂	焼い	オチキ
34	土師器	皿	8.4	2.4	1.4	内側 灰褐色 外側 鉄褐色		細砂	焼い	底元空縁 外側は研削
35	土師器	皿	8.5	(4.9)	1.3	内側 灰褐色 外側 鉄褐色				ロクロロ 内外面傾斜
36	土師器	皿	8.5	(4.0)	1.1	褐色				ロクロロへらおこし (底部) 傾斜
37	土師器	皿	9.2	(7.3)	0.6	鉄褐色				ロクロロ傾斜 オチキへらおこし
38	土師器	皿	9.0	5.0	1.4	鉄褐色				ロクロロ 傾斜
39	土師器	皿	8.7	4.5	1.2	灰褐色		細砂	焼い	底元空縁 へらおこし
40-A	土師器	皿	9.0	5.2	1.5	灰褐色		細砂	焼い	底元空縁 へらおこし
40-B	土師器	皿	13.1	5.0	2.3	褐色		細砂	焼い	ほぼ空縁 オチキ(内) 深さ1.5cm(研削面) (底部)
41	土師器	皿	13.5	7.0	2.0	内側 灰褐色 外側 鉄褐色		直		ほぼ空縁 オチキ(内) 深さ1.5cm(研削面) 底元空縁 オチキ(外) 研削
42	土師器	皿	13.0	7.0	2.4	内側 鉄褐色 外側 鉄褐色		細砂	焼い	ほぼ空縁 オチキ(内) 研削(底部) 深さ1.5cm(研削面)
43	土師器	皿	13.6	5.0	2.1	褐色		細砂	焼い	オチキ(内) 研削(底部) 深さ1.5cm(研削面)

















第4章 まとめ

第1節 遺構と遺物の概要

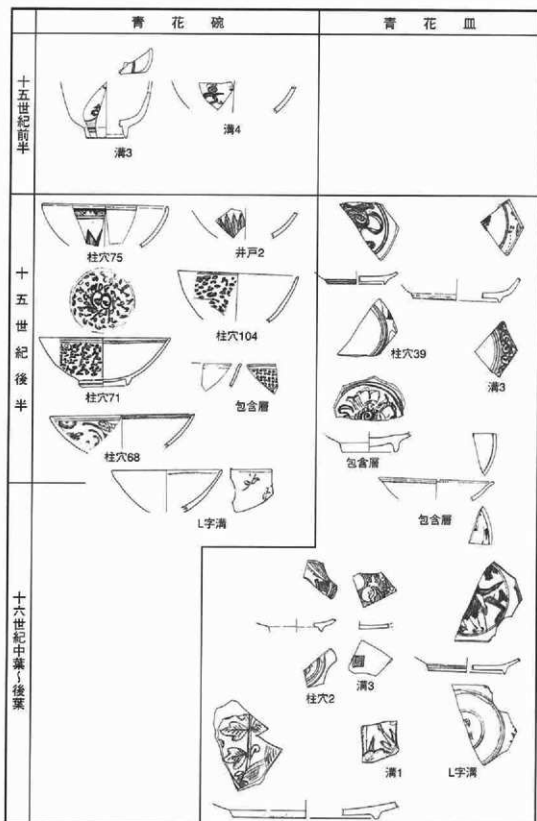
時間的制約と筆者の力量不足のため、十分な検討を加えることができず簡単なまとめになった勝りは免れないが、以下概要を述べてまとめとしたい。

① 陶磁器

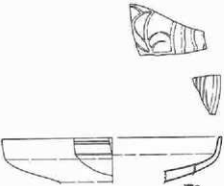
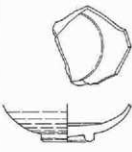

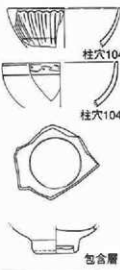
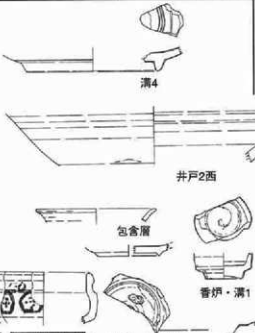

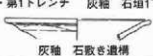
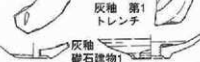
備前焼、天目茶碗、輸入陶磁器、国産陶磁器が出土した。備前焼については摺り鉢が最も多く壺、

	壺・甕	摺り鉢
十五世紀	 <p>柱穴66</p>	 <p>石敷埋土</p>
	 <p>溝5 溝5 土壌2</p>	 <p>井戸2西</p>
十六世紀	 <p>溝5</p>	 <p>土壌2</p>
	 <p>溝1</p>	 <p>土壌5</p>
	 <p>溝1</p>	 <p>溝5</p>
	 <p>石壇下</p>	 <p>溝3</p>
十七世紀	 <p>石敷遺構</p>	 <p>石敷遺構埋土</p>
	 <p>唐津産石敷遺構埋土</p>	 <p>溝3</p>

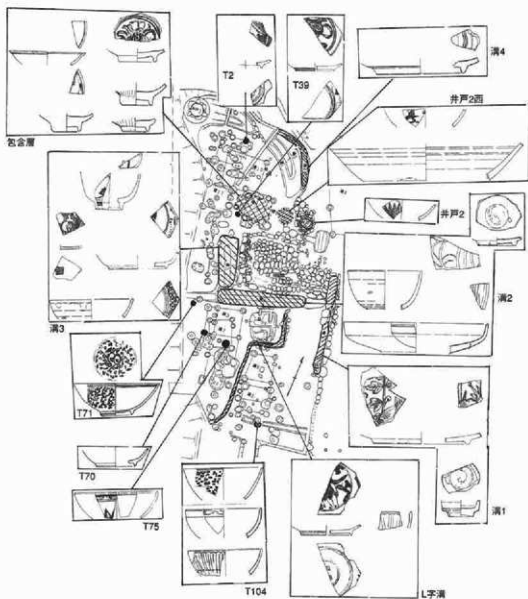
第81図 備前焼編年表案



第82図 青花碗・青花皿編年表案

	青磁・灰釉皿	白磁青磁碗
十五世紀前半	 <p>溝2</p>	 <p>白磁 井戸2東</p>
十五世紀後半	 <p>L字溝</p> <p>溝2</p> <p>包含層</p>	 <p>溝2</p> <p>包含層</p> <p>包含層</p>
十六世紀	 <p>溝4</p> <p>井戸2西</p> <p>包含層</p> <p>包含層</p> <p>香炉・溝1</p>	 <p>灰釉・溝2</p> <p>包含層</p> <p>包含層</p>
十七世紀	 <p>志野・第1トレンチ</p> <p>灰釉 石垣1下</p> <p>灰釉 石散き遺構</p>	 <p>灰釉 第1トレンチ</p> <p>灰釉 礎石建物1</p>

第83図 青磁編年表案



第84図 主な青磁青花出土遺構（Tは柱穴の略）

甕など40点を実測できた。主な備前焼の時代を考慮して編年表にまとめた。壺は玉縁を残す15世紀から、口縁部を折り返してやや外傾する16世紀、水屋甕、德利、鶴首が出現する16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。擂り鉢は口径が15cm前後の小型擂り鉢で口縁部が垂直に立ち上がる。やや内傾して外面に凹線を施す。口端からやや下がった内面に稜線を持つようになる。スリ目が斜め方向に付けられるようになる。17世紀になると口縁部が分厚く、断面三角形になる。備前焼ではないが砂質の胎土で高台を削りだし、細い3条のスリ目をつけた唐津産の擂り鉢が入ってくる。

天目茶碗は茶の湯との関わりがあり11点が出土した。ほとんどが瀬戸美濃焼と思われる。井戸2と溝6出土の天目茶碗が接合し、それらの遺構が共存したことがわかる。

輸入陶磁器には青磁、青花、白磁が70点以上出土し、そのうち50点を実測できた。

青磁には龍泉窯系の碗B4類の線描きの蓮弁文、同じくC2類の口縁部に雷文帯が略式化した碗が柱穴104から出土している。やや大型の雷文風の碗で胴部に大きな線描きの蓮弁文をもち、高台内を丸く釉刺ぎしたC2類のもの、同じくE類の無文で高台内を丸く釉刺ぎした碗、見込みに圏線がある

碗などのほか、片彫り花文の大皿がある。期的には15世紀後半から16世紀前半と考えるのが妥当であろう。青磁は16世紀後半には少なくなる傾向がある。また、肥前系唐津産と思われる灰軸は見込みに砂目を残したものが礎石建物、石敷き遺構など定期的に新しい遺構から出土している。16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

青花には1点ではあるが高台が高い特徴を持つ染付碗B群に属する碗が溝3から出土した。玉取り獅子の文様を描く染付皿B1群は15世紀後半に比定できる。芭蕉の葉が描かれた蓮子碗、二重円と小紋が体部や見込みに描かれた碗、染付皿B1群の十字花文などは15世紀から16世紀前半に比定できる。さらにマントウ芯系の碗、底部に「大明年造」などの文字を書いた皿はB2群に属し、16世紀中ごろとされる。

青花や青磁の出土地点を見ると、掘立柱建物や多くの柱穴を検出した西半地区である。柱穴38、柱穴68、柱穴70、柱穴71、柱穴75、柱穴104、包含層（土器溜り）、井戸2、井戸3、溝1・2・3・4、L字溝から出土している。

青磁青花などに時期については十分な検討を加えることができなかったが、本遺跡から出土したものを表にまとめた。今後の検討資料としたい。輸入陶磁器について、全体に白磁が少ないこと、16世紀後半には青磁・青花碗が少なくなり、それに代わって、国産の灰軸が代用されたと思われる。また、青花皿は継続して使われ、天目茶碗は瀬戸美濃焼が使われたと思われる。

輸入陶磁器がこれほど出土した例が美作地区ではないため、そのありようなどが検討されていない。したがって、今後そうした資料が増加し、検討が加えられるであろう。

第13表 備前焼一覧表

陶磁器種別	種別	器型	器口径 (cm)		色調	状態	年代	出土	焼成	特 徴
			口径	口径						
溝1上層	備前焼	磁り鉢			赤褐色					溝めのスリ目 ロウソク痕 明線
溝1	備前焼	水屋釜	31.4		赤褐色					
溝1	備前焼	磁り鉢			褐色色 (黄色)	16C前半				3条の凹線 重ね焼き
溝1	備前焼	磁り鉢			黒褐色					7条のホキ目 内面にのみろく使用痕 外側に3条の凹線
溝1	備前焼	磁り鉢			赤褐色	第1層下層(溝1) 16C				スリ目が交差 (斜め)
溝1	備前焼	羹	50		口縁 褐色 内面 褐色 外底面 褐色	16C前半				
溝2上層	備前焼	羹			内面 赤褐色 口縁 褐色 外底面 褐色					白色自然釉 ナゲ
溝2上層	備前焼	磁り鉢			黄褐色					スリ目5条
溝2中層	備前焼	磁り鉢			内面 赤褐色 口縁部 褐色 赤褐色					重ね焼 ナゲ 6条のホキ目
溝2砂利層	備前焼	磁り鉢			褐色色					溝3条の凹線 重ね焼 体部 褐色色 外底面を以て白色の自然釉 内面上部に横線 ナゲ
溝2砂利層	備前焼	磁り鉢			褐色色					白色自然釉 重ね焼
溝2砂利層	備前焼	磁り鉢			内面 褐色 外底 褐色 自然釉					
溝3	備前焼	磁り鉢			内面 褐色 外底 褐色 自然釉					
溝4	備前焼	磁り鉢			赤褐色	16C後半	灰色			3条凹線 7条のスリ目 外側に4条の凹線
溝5	備前焼	大皿			赤褐色 内面 自然釉 外底 自然釉	16C		壁紋		外底の横線がシャープでない 胴部へ張り
溝5	備前焼	羹			赤色	15C?	1.5mの砂利層			内面釉ともナゲ
溝5	備前焼	羹			内面 赤褐色 自然釉	15C末	1.3mの砂利層	壁紋		口縁内面に自然釉 胴部に自然釉 内側ナゲ
溝5	備前焼	羹			赤褐色 自然釉	15C末	1~2mの砂利層	壁紋		ナゲ 口縁外側に自然釉
溝5	備前焼	羹	28		内面 赤褐色 外底 褐色 自然釉	15C				
溝6	備前焼	大皿	37		赤褐色	15C後半				ヘッくり 底面
柱穴34	備前焼	磁り鉢	28		褐色色	16C後半				スリ目斜め 外側に凹線3本 自然釉 口縁部ナゲ
柱穴56	備前焼	羹	24		内面 自然釉 外底 自然釉	15C初 15C後半	備前含む 備前含む	壁紋 壁紋		胴部の3条の凹線 内側ナゲ 口縁部自然釉

柱穴2	埋め焼	炭				灰色 自然釉 中心灰褐色				窯痕	
柱穴16	埋め焼	埋り跡				赤褐色 半褐色	16C末				跡めスリ目?~8条 内面ロクロ目
表層	埋め焼	炭				内灰とも 赤褐色を呈す	15C末	1mm砂粒含む	窯痕	内外ナデ	
石段土層	埋め焼	炭	37.2			灰色	14~15C			窯痕	内外面ナデ 製造跡はへう割り 口縁部より透して3筋
礎石建物	埋め焼	埋り跡				内面 赤褐色 外面 灰褐色	16C後半			窯痕	埋り口

陶磁器名	種類	器種	計測値 (cm)			色調	年代	胎土	焼成	特徴
			口径	底径	器高					
石段埋土	埋め焼	埋り跡				暗褐色	16C 最上四半世紀		窯痕	外周ナデ スリ目交差
5層7号灰土	埋め焼	埋り跡	3.4			内面 自然釉 外面 赤褐色	16C末~17C			内外ナデ
赤西石段下 灰褐色土	埋め焼	埋り跡				赤褐色	16C後半		窯痕	口縁部自然釉 (白ゴマ) ロクロ目
赤西石段下 黒褐色土	埋め焼	小型器	26			口縁部 灰色 体部 黒灰色	16C後半			重た能
土層2	埋め焼	炭				外面 赤褐色	15C末			口縁部に自然釉
土層2	埋め焼	炭				外面下部 緑色の 自然釉 外面 暗灰色	16C前半		窯痕	緑色の自然釉状 緑色の物 ロクロの 痕
石敷遺構	埋め焼	埋り跡				赤褐色	16C後半			跡めスリ目 内面自然釉
石敷遺構	埋め焼	埋り跡				赤褐色	16C末			内外ロクロ目
包含層	埋め焼	埋り跡		15.6	厚ム 3.1~4.7	内外面 赤褐色			跡め含む 窯痕	ロクロ目 スリ目は縦く8条 横状
包含層	埋め焼	埋り跡				暗灰色	16C 最上四半世紀			跡めスリ目?~8条 外面(内)側3条
包含層	埋め焼	埋り跡				内面 口縁部 外面 赤褐色				重た能 スリ目7条 ロクロ目 口縁部より透るの遺構
非17号7号	埋め焼	埋り跡	18			赤褐色	15C後半		窯痕	内周ナデ 外面自然釉 縦いスリ目
非17号2号	埋め焼	埋り跡				口縁部 灰色 体部	16C前半			スリ目日本 ロクロ痕 遺り焼
非17号3号	埋め焼	火痕	38			赤褐色			窯痕	底部
北石層	埋め焼	埋り跡				内面 赤褐色 外面 灰褐色 焼成			跡め含む 窯痕	スリ目縦く 5条以上
北石層2	埋め焼	火痕				内面 赤褐色 外面 赤褐色				外面へう割り 内面ナデ △△変形
遺物2埋土	埋め焼	埋り跡				赤褐色				ロクロ目 スリ目縦く8条

第14表 天目茶碗一覽表

陶磁器名	種類	器種	計測値 (cm)			色調	年代	胎土	焼成	特徴
			口径	底径	器高					
碗1	陶器	天目茶碗				内面 茶褐色~茶褐色 外面 赤褐色~赤褐色	灰白色 焼成	良い	ロクロ成形	
碗2	陶器	天目茶碗				内面 黒色	灰白色 焼成		ロクロ成形種類A 5条 透かし	
碗2上層	陶器	天目茶碗	4.0			内面黒色	灰白色 焼成		ロクロ成形 透かしなし 透かし (半) 内丸輪	
碗3	陶器	天目茶碗				内外とも赤褐色	灰白色 焼成		ロクロ成形	
碗6	陶器	天目茶碗				内面 茶褐色~黒色 外面 赤褐色と黒色の斑点	茶色 焼成	良い	ロクロ成形 非17号と同一例体	
礎石建物	陶器	天目茶碗				内外とも黒褐色	灰白色 焼成			
石段下埋 褐色土	陶器	天目茶碗				黒褐色	灰白色 焼成	良好	ロクロ成形	
石段下	陶器	天目茶碗				茶褐色	灰白色 焼成	良い	ロクロ成形	
北石層2	陶器	天目茶碗				緑褐色	灰白色 焼成			
石敷遺	陶器	天目茶碗					灰白色 焼成			内面自然 外面口縁部
非17号2	陶器	天目茶碗	11.6	4.6	6	内面上部赤褐色 下部灰色を呈す	灰白色 焼成	良い	高台欠落 碗6と同一例体	

第15表 青磁 白磁 青花一覽表

陶磁器名	種類	器種	計測値 (cm)			色調	年代	胎土	焼成	特徴
			口径	底径	器高					
碗1	青磁	大皿	(15.3)							高台付盛 (非17号同)
碗1	青磁	香炉	8.9			明緑灰~緑灰				見込調状器ナデ灰 見込区切り 内面無釉
碗2	青磁	鉢		5.0						内外面無
碗2上層	青磁	鉢	(23.0)			明緑灰	灰白 褐色 焼成			文様内書成文
碗2砂埋層	青磁	小皿		6.2		オリーブ灰				施釉無 透かしのみ取付の形 高台内無釉
碗2砂埋層	陶器	碗	11.9				16C末			施釉無 透かしのみ取付の形 高台内無釉
碗2下層	青磁	鉢				見込中心には無台	白色 焼成			ロクロ成形 施釉無
碗3	青磁	鉢								非17号同
碗3	青磁	鉢	(14.2)							施釉無 跡 ロクロ成形有り 高台 透明釉
碗3	青磁	鉢	(16.0)				15C末~ 16C半			文様書成文 高台・透明釉 非17号 ロクロ成形有り 高台 透明釉 外面書成文 透かしあり
碗3	青磁	鉢	(13.4)			オリーブ灰				口縁のみ二重にかかると
碗4	青磁	大皿型		14.2		オリーブ灰				片書成文 透明 半透明の青磁釉
土層1	青磁	鉢	13.3							外面口縁部内面に施釉
土層1	青磁	鉢		5.0		淡緑色				字文様大皿調器と非17号内面はどまりC2群 調のみ残存 施釉無
非17号2	青磁	鉢					15C末~16C	灰白		

第4章 まとめ

井戸3	青花	織		4.9					高台外側に線あり
井戸3	青花	大皿		(15.3)					高台付蓋残存(蓋1と同一)
第1トレンチ	陶器	向付	(10.1)			14C後半~17C前半			灰濁土質ロクロ成形 鉄銹亀文類文 窓野焼 (正石山)
第1トレンチ	陶器	小皿	(4.9)			14C後半			厚底高筒形 灰濁土質 扉目線あり
礎石建物1	青花	織	11.3			赤褐色		細粒含む	ロクロ口 口縁部にスズ付布
礎石建物1	陶器	小皿	(3.8)			灰濁		やや軟質	灰濁土質 磨削 ロクロ成形 磨り出し高台 高台部焼 灰濁土質 扉目線あり
礎石建物1	陶器	小皿	4.1			灰		灰濁焼~灰濁	ロクロ成形 磨り出し高台 見込みナナ折
井戸2西側垣	青花	大皿				灰キープ	15C後半~16C前半	積層	外のみ焼存 ロクロ成形 外面無磨り厚く粉土 線磨下のみ灰色
井戸西側垣	青花	織							刷のみ残存 扉目 窓野焼
石皿1類土	青磁	小皿	10.3			淡緑色		3.3	刷のみ残存 扉目 窓野焼
石皿1類土	青磁	小皿		(6.4)		キープ灰	16C		底に砂目 瀬戸産地
石皿1類土	青花	織	12.6						全周無磨 内面に土目跡 瀬戸産地産小皿 ロクロ成形磨り出し輪高台
石皿1類土	青花	織	12.6						C群
石皿1類土	青花	織	11.2				13C後半		C群
石皿1類土	青花	小鉢	9.9						C群
石皿1類土	青花	織				灰白色			
石皿1類土	青花	織				灰白色			
L字溝	青花	小皿	11.5			内外面 外周 薄い底及び縁			白色 積層
L字溝	青花	小皿		8.2					同一個体土皿2より出土
L字溝	青磁	織				淡緑色			透明焼 青花産地2群
酒罎	白磁	(14.2)				灰白			継泉窯 B4群
石敷遺構	陶器	織	10.5			灰白 磨層 裏面に灰濁あり 灰白粉濁量			口縁のみ ロクロ成形 白磁 貫入あり
石敷遺構	陶器	織	10.8			淡褐色光沢あり			赤紫 灰濁
石敷遺構	磨洋焼	磨り鉢					17C前	砂質	灰濁
石敷遺構	磨洋焼	小皿	15.3			黄灰	1610~1630年代	灰濁~灰濁	磨洋
石敷遺構土	白磁	織		5.6		白			見込み以内の凹み 透網 磨り貫入あり 白磁焼C群
灰倉母	青磁	織		4.0		淡緑色	12C後半		黒青文 B14群
灰倉母	青磁	織		4.0		緑色	12C後半		黒青文 B11群
灰倉母	青磁	織		4.7		緑色	12C後半		黒文 B13群
灰倉母	青磁	織		10.0		暗くすさんだ緑色			C群
灰倉母	青磁	織					15C後半		
灰倉母	灰濁	織		4.8					内外面 灰濁 高台残付
灰倉母	向付	織	12.4			灰白			口縁部残存 白磁焼 磨り灰形 白磁C群
灰倉母	青花	皿	12.0						外反す口縁部 見込に花形焼
灰倉母	青磁	織		5.6					外周 ケズり 内周 見込灰濁り 磨り面物あり
灰倉母	白磁	織		4.8		灰白			花形焼 建物3
柱穴68	青花	織	14.5						先沢ない 器体に磁がっていない C群 建物3
柱穴70	白磁	織	60.0			内外ともに灰白色			C群
柱穴71	青磁	織	13.8	5.0	5.1		15C後半		C群
柱穴75	青磁	織	(13.4)				15C後半		浅めの丸型焼 蓋子焼 C群
柱穴104	青磁	織	(12.0)				15C後半		C群
柱穴104	青磁	織	(12.2)			灰キープ	15C後半		磨層 灰白色 粒粒状 粉土 磨層 磨層 灰白
柱穴104	青磁	織	(12.0)			灰キープ	15C後半		内外面 磨層 磨層 磨層 B4群
柱穴2	青花	小皿	(5.3)						粉土 建物11
柱穴29	青花	小皿	(6.1)				15C後半		磨り皿B1群 玉粒土文様 建物3

② 土師器

中世遺跡の発掘に伴って日常什器としての土師器(かわらけ)は非常に多く出土する遺物である。本遺跡でも出土点数が最も多い。特に井戸2から西へ建物8と建物9の検出面上に青灰色粘土層が広がっており、備前焼・輸入陶磁器などととも土師器皿が、廃棄された状態で多数出土した。器高・口径が計測できるものだけでも、この包含層から74点、8条の溝から89点、柱穴内から61点、土壌から12点、遺構以外から33点、合計269点を超えるほどである。それらのうち手づくね188点、ロクロ成形71点を計測して、法量を分布図にあらわして見ると第85図のようになる。

土師器皿は口径20cm以下、器高は3cm以下であるが、小皿と大皿に分類できる。小皿は5cm~10cm以下、大皿は10~20cm以下としてまとめることが出来るが、10cm前後を中皿とすべきかもしれない。

さらに、手づくね土師器は10cm以下の小皿が多く114/188個と60%を超える。器壁が厚く重量感がある。底部と体部の境は後縁がなく明瞭ではない。口縁部はやや立ち上がりながら拡張するものが多い。底部と体部の外面には指圧痕がみられ、口縁部、内面はナデている。胎土には砂粒を含み、焼成はやや軟らかいものが多い。口縁部にスガが付着し、灯明皿として使われたものがある。法量分布をみると、手づくねの皿は大皿と小皿の区別ははっきりとしない。口径10cm前後も多いからである。詳細に見ると器高は小皿では1cm、1.25cm、1.5cm、2cmの線上にドットが横に並んでおり、制作過程で皿の使用に応じた基準があるように思われる。

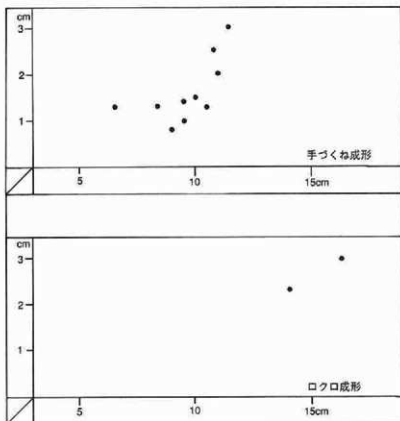
本遺跡出土の土師器皿のなかに、ロクロ成形による器壁が薄く底部でも5mm以下で、口縁部は1mm、口縁端部を丸くおさめるなど特徴的なものが多い。底部はヘラキリのあとに板目痕が付いている。さらに、胎土には砂粒を含まず、水こしされて緻密である。ロクロ痕が明瞭に残るものの底部以外は丁寧に横ナデされ、焼きが堅く淡褐色を呈する。一見して手づくね皿とは峻別できる。手づくねと共伴するが包含層から36個、溝から14個、柱穴から17個の合計67個の法量分布をみると、大皿と小皿が明瞭に分かれている。包含層出土の土師器35個は口径が10~13cmのものがなく、大小に分かれていることがわかる。溝や柱穴出土のものも同様の傾向がある。また、小皿で器高0.8cmと1cmの線上にドットが横に並ぶのは手づくね成形の場合と同様に制作過程で一定の基準があったと思われる。10cm以下の小皿は41/67個と61%を超える。ロクロ成形の土師器は法量分布から見て、大小2種類の皿を注文して作らせたか、持ち込んだ可能性がある。

それは胎土分析の結果にも現れており、手づくね成形の土師器とは異なる胎土を使っていることなどからも首肯できる。ただ、近隣の久世町、落合町、大佐町、北房町でも中世の遺跡が発掘されているが、本遺跡出土の土師器に類似する例がないためその生産地を確定できない。元来日常什器であるため、さほど遠くから持ち込まれることはないであろうから、高田城を中心とする地域の特徴的な産物であるかもしれない。

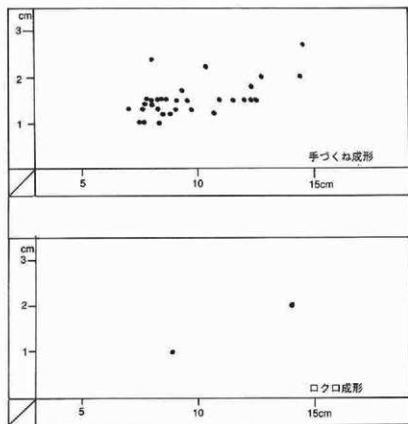
たとえば、本遺跡から約30km西にある田治部氏屋敷敷地から15世紀から16世紀にかけて作られた建物群と多くの土師器が輸入陶磁器、国産陶磁器、鉄器などと出土している。土師器はロクロ成形の口径約10cm器高4cmの碗で、底部にヘラキリ痕や板目がつき、口縁部に向かう体部は内弯する特徴をもち、小皿も口径8cm以下で底部にヘラキリ痕、板目がつく。13世紀半ばから14世紀後半に位置づけられている。本遺跡では小皿は類似するが、体部が内弯する碗の出土はない。小地域で作られた土師器であろうか。

その他に底部に糸切り痕がある小皿が溝1、溝3から3点出土しているが、出土数は少なく遺構から見て16世紀末以後と思われる。

中世の土師器研究は各地で積極的に行われているが、本遺跡出土のロクロ成形の土師器皿は苦田ダム関連の河内構遺跡で数点出土している以外に類例がない。河内構遺跡の土師器は「口径16.8cm器高2.9cm灰白色を呈し、底部に回転ヘラ切り、板目がある。」と記録されている。実見したが同一工人が制作したと思われるほど似ている。その他小皿など20点近くあって、ヘラキリ、板目が残っている。また、河内遺跡からもロクロ成形の土師器皿1点が出土しており、同様に口縁端部を丸くおさめる手法である。河内遺跡も河内構遺跡も共伴遺物からみて、戦国時代に比定されている。本遺跡とほぼ同じ時期にあたり、距離的には40km以上離れているが、いかなる関連があるのか、今後出土例を待たねばならないが、興味ある事例である。

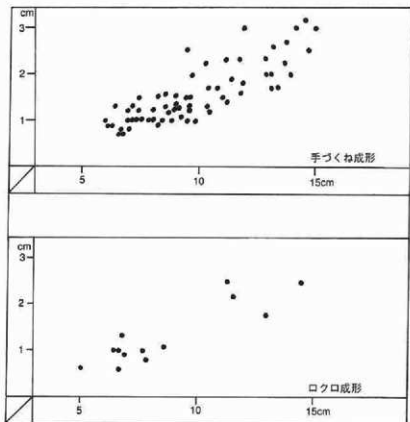


土痕出土の土師器皿法量分布

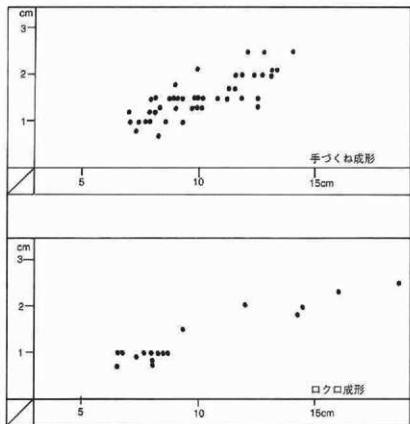


遺構に伴わない土師器皿法量分布

第85-1図 土師器皿法量分布

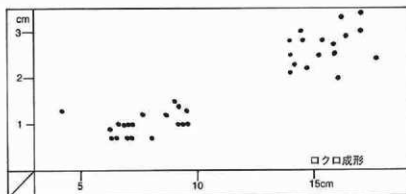
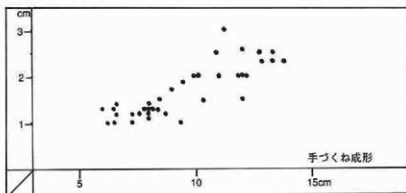


溝出土の土師器皿法量分布

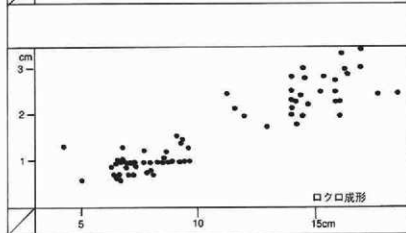
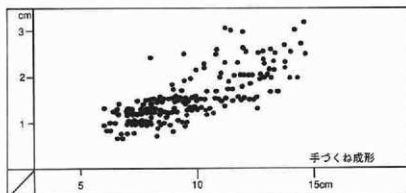


柱穴出土の土師器皿法量分布

第85-2図 土師器皿法量分布



包含層出土の土師器皿法量分布



土師器皿全部の法量分布

第85-3図 土師器皿法量分布

土師器は中世館からの出土例が多いなかで、16世紀後半から手づくね成形の京都系土師器が九州から関東、越後までその分布があることが知られ、武士階級が京都風の儀式の際に使うために模倣して作った土師器であるといわれている。京都系土師器は手づくね成形で口縁部下が肥厚し、ナデ調整などの特徴がある。岡山県を除く中国地方各県の遺跡で出土例が研究されている。本遺跡出土の土師器のなかに京都系土師器があるかどうかなど詳細な検討を加える機会は後日に譲りたい。ただ、当初ロクロ成形の土師器は洗練された作りであることや近隣に出土例がないこともあって、京都系ではないかと考えた。

しかし、京都系土師器は手づくね成形であり、本遺跡のロクロ成形土師器は根本的にそれとは異なることになる。そこで、手づくねとロクロ成形土師器の胎土に視覚的に大きな違いがあることから、胎土分析をして生産地が特定できないか、胎土によって移入したものかなどに迫ることができればと、岡山理科大学白石純氏に胎土分析を依頼した。その結果は付載にわしいが、手づくねとロクロ成形の胎土が異なること、ロクロ成形の土師器には遺跡付近の粘土を使っていないことがわかった。このことからロクロ成形の土師器は移入された可能性、工人は別々に存在した可能性も視野に入れて検討していきたい。

③ 金属器

鉄製品53点銅製品4点を合わせて57点出土した。釘が最も多い。武器武具には小札、刀、小柄、刀子などがある。溝などからの出土が多いが、鍛冶が4基が検出されており、鉄器の生産が行われたことがわかる。

銅製品の中に銅鏡17枚が出土した。そのうち柱穴7から12枚がまとまって出土以外は単独で出土した。輸入銭のうち開元通宝(唐)咸平元宝(北宋999年)皇宋通宝(北宋1038年)聖宋元宝(1101北宋)正隆元宝(1156金)のほかは永樂通宝である。判読できないが「○國通宝」と読めるもの、北端埋め土から「萬歲登寶」とよめる696年唐鑄造の輸入銭がある。

第16表 金属器一覧表

図録番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	時期	特 徴
		最大長	最大幅	最大厚				
石皿下	小孔	21	34	2	鉄			
石皿下		29	34	6	鉄			
石皿下		28	7	1	鉄			
石皿下		35	11	1	鉄			
石皿下		82	8	7	鉄			
石皿下		49	5	5	鉄			
石皿下		26	4	3	鉄			
石皿下		41	35	5	鉄			
石皿下	刀子の柄	44	9	4	鉄			
石皿下	釘	25	6	5	鉄			
溝水溝内	鉄片	34	60	5	鉄			
シ字溝		29	5	5	鉄			
シ字溝		37	5	6	鉄			
シ字溝		36	9	1	鉄			
シ字溝		25	6	4	鉄			
シ字溝		27	5	3	鉄			
シ字溝		33	4	3	鉄			
シ字溝		33	5	4	鉄			
溝J	鉄製付録	44		15	鋼		高倉付16mm(台高)と9mm(高倉中心の目付)で高倉と車体と内張り向きを固定	
北石垣埋土		21	6	6	鉄			
北石垣埋土	小柄	97	12	4			側巻 内屈鉄	
石敷き遺構		25	40	3	鉄			
石敷き遺構	フック	90	3	3	青銅			
石敷き排水溝		17	4	3	鉄			
石敷き排水溝		21	4	3	鉄			
石敷き排水溝		24	3	3	鉄			
石敷き排水溝		26	2	2	鉄			
石敷き排水溝		42	5	3	鉄			
石敷き埋土		26	24	5	鉄			

第4章 まとめ

包含物		32	5	3	鉄		
土層2		38	23	4	鉄		
土層3		31	5	3	鉄		
土層3		22	3	3	鉄		
土層4-1	釘か	27	3	2	鉄		
溝2	こうすい	87	5	2	青銅		
溝2	掘り杓片	90	3		青銅		
溝4	刀子	26	10	2	鉄		
溝5		45	5	2	鉄		
溝5		73	7	1	鉄		矢か?
溝5		97	8	1	鉄		矢か?
溝4	釘	47	5	5			
掘削跡1	釘	38	5	5	鉄		
掘削跡1	矢筈	57	5	4	鉄		
掘削跡2	刀子の柄	38	12	3			
掘削跡2	釘	35	5	4	鉄		
掘削跡3	釘	38	6	4	鉄		
掘削跡3	釘	25	5	4	鉄		
掘削跡3		54	5	4	鉄		
掘削跡3		64	12	11	鉄		
柱穴69	弓矢干	45	11	11	鉄		
柱穴104	刀子	122	14	6	鉄		
井戸2	釘	38	4	4	鉄		
井戸2土層	釘	47	5	5	鉄		
井戸2土層	刀片	65	22	4	鉄		
第1トレンチ底		53	5	4	鉄		
第1トレンチ底		37	4	4	鉄		

銅銭一覧表

出土遺構	種類	数量	年代
建物4	開元通宝	213枚	2.2
柱穴54	咸亨元宝	999之末	2.4
柱穴78-1	永樂通宝	1109円	2.3
2	永樂通宝	1109円	2.4
3	永樂通宝	1109円	2.5
4	永樂通宝	1409円	2.5
5	永樂通宝	1409円	2.5
6	永樂通宝	1409円	2.5
7	洪武通宝	1260円	2.3
8	洪武通宝	1260円	2.5
9	正隆元宝	1156分	2.4
10	聖元元宝	1101北宋	2.4
11	○無銘		2.4
12	不明		
石壁5遺構	聖元通宝	1038北宋	2.5
柱穴25-1	永樂通宝	1409円	2.4
北堀堀の土	萬曆通宝?	696枚	2.3

④ 木製品

溝や井戸から19点が出土した。溝、井戸以外からの出土は柱穴78の曲げ物と土層5の曲げ物の底板である。柱穴78の曲げ物は土師器と銅銭12枚を入れた状態であった。薄い杉板を直径12.7cmの杉の底板に巻いている。残存高4cmである。土層5の底板は直径11cmである。細かい柃目の板を使っている。

箸は5本。長さ25cm、20cmを測る。材質はスギとおもわれる。溝1から長さ24cm幅1.9cm厚さ1mmで先端を尖らせた舟状の板が出土した。溝2から赤い漆を塗った折敷の縁が出土した。長さ27cm幅2.5cmを測る。溝2から差し歯の下駄が出土している。長さ13cmでカゴト部分を欠くが、幅6.3cm厚さ3cmで差し歯は下駄の台まで貫通する2箇所の駒穴が見られる。女性用であろう。

横櫛が井戸2から出土した。長さ6cmで半分を欠くが厚さ1cmで櫛齒は欠けている。これら以外はすべて漆塗の櫛である。7個が出土した。内面に赤い漆、外面に黒い漆を塗るものと内外面とも黒漆塗りがある。井戸2から出土した櫛の外面に松や鶴を赤漆で描いたものもある。漆器についてはくらしき作陽大学の北野信彦氏の分析によると、漆器は中世の所産で丁寧な塗りが施されているという。詳細は付載を参照されたい。

また、掘立柱建物に残った柱根と井戸2西の杭を合わせて12本の樹種を岡山県木材加工センター見尾貞治氏に鑑定を依頼した結果、クリ材が最も多く使われていたが、柱穴23はツブラジイであった。

柱穴49はオニグルミの巨木であった。

クリは日本列島に分布する落葉樹で縄文時代から柱などに使われていることはよく知られている。タンニンの含有が多いために耐朽・保存性が極めて高く、水湿に耐える特性を持っていることから、本遺跡でもよく残っていたと思われる。ツブラジイは本州の千葉県以西に分布するシイの仲間の常緑広葉樹。板材、家具材として利用される。耐朽性は低いといわれる。オニグルミは北海道まで分布する落葉大高木で、種子は食べられ、本遺跡からも果皮が出土している。家具彫刻材工芸に使われる。とくに銃床用材として賞用される。耐朽性は低く掘立柱には適していない。本遺跡の建物には柱材にクリが使うことが多かったことになる。この傾向も中世において一般的であったのかどうかなど、今後の研究を待ちたい。

第17表 木製品一覧表

発掘遺物名	種別	器種	口径	高さ	器高	器径	木取り	年代	出 所
柱穴26	木部	曲げ物	22.7						銅器12枚 土師器類2枚 緑青あり
溝1	木部	漆串?	1.9		23.7				先とがる
溝1	木部	漆串?	1.5		12				先とがる
溝1	木部	漆	0.5		20.7				ヒノキ
溝1	木部	漆	0.5		25.3				ヒノキ
溝1	木部	漆	0.5		14.2				ヒノキ
溝1	木部	漆器か?	4.5						ヒノキ
溝1	木部	漆器 椀			6				外面 黒色漆 一部に赤の紋文部 内面 赤色漆
溝2	木部	漆器 椀			6.5				内面 赤色漆 外面 黒漆 高台穴あり
溝2	木部	下駄	0.25	13.0	中 6.3	厚 3.0			側面分 漆厚0.5 側中11.0 側厚1.0
溝2	木部	漆器併敷	2.3		24.5				赤色漆
溝2	木部	漆器 椀	16.6						内外面赤漆外面に赤漆で磨削(脱?)
溝2	木部	漆器 椀	13.0		7.2	(5.4)			内面赤漆 外面黒漆磨削(ツル皮?)
溝2	木部	漆器 椀			7.0				内面に赤色漆で磨削 外側にも黒漆に赤漆塗
溝2	木部	漆器 椀	16.0		10	1.0			
溝2	木部	漆	0.5		12.5				ヒノキ
溝2	木部	漆	0.5		7.5				ヒノキ
溝3	木部	漆器 椀	13.1		6.4	(5.1)			内外面とも黒漆
溝3	木部	漆器 椀			(7.0)				内外面とも黒漆

⑤ 石製品

砥石は1点出土した。直方体の長さ5.8cm、断面形はややいびつな正方形で、4面ともによく使用されて滑らかである。淡い褐色を呈する粘板岩である。

礬石は6個出土した。形や大きさにバラツキがあるが、黒石が2個とも楕円形である。白石は灰色に近くやや厚いものもある。

硯は溝5から出土した、海部分が壊れた小型の硯である。粘板岩製である。この地域には見られない石が使われており、持ち込まれたと思われる。石散き遺構から小型の未製品が出土した。ノミの跡が明瞭に残っており、海部分が欠けたために放棄されたと思われる。その他未製品が6点出土しているがいずれも高田硯の石材とは異なる。

高田硯はその歴史は古く、「石見牧家文書」の中に、三浦家の家臣であった牧兵庫助が大友宗麟へ硯を送ったらしく、天正2年11月19日宗麟の書状の中に「硯一面送給候、祝着候、云々」と記され、兵庫助は村上武吉や浦上氏、原田氏らにも硯を送っている。当時すでに良品として有名であったのであろう。

しかし、本遺跡出土の硯はほとんどが未製品でありここで作られていたと考えられる。

第18表 石製品一覧表

組織遺物名	種類	形状	寸法値 (cm)			色調	特徴
			最大径×最大径	厚さ	重量		
石製遺物	粘板石	礎	7.5×4.4	1.0	灰褐色	未完成 粘板石	
包含層	礎石	礎石	1.6×3.0	0.8	灰色		
包含層	礎石	礎石	1.4×1.3	0.3	灰色		
礎2下層	粘板石	礎片		0.4	灰色 灰点	未完成 磨滅あり	
礎2上層	粘板石	礎	8.0×7.4	1.7	灰色	未完成 スリ切り痕	
礎3	粘板石	礎	6.0×4.4	1.0	褐色	未完成	
礎5	礎石	礎石	2.0×1.9	0.7	褐色		
礎穴6-1	粘板石	礎片	3.5×2.3	1.0	灰色	底 顔面磨滅	
礎穴5	粘板石	礎片	8.8×6.6	0.5	灰色	未完成 表面磨滅あり 金属により摩滅	
礎穴2	礎石	礎石	1.2×1.7	0.8	褐色		
基礎2上層	礎石	礎石	1.2×2.3	0.4	褐色		
基礎3	礎石	礎石	0.9×1.5	0.3	褐色		
基礎2	礎石	礎石	1.5×2.3	0.5	褐色		
礎穴1	粘板石	礎石	3.2×2.5×0.8		褐色	両面使用痕	

⑥ 土製品

土罐が23点出土している。包含層からが最も多く、16点を占める。最も大きな土罐は長さ6.8cm最大幅約3cm、重さ49gを測る。その他は細身で長さ3～5cmの一般的な土罐である。非常に硬く焼かれたものもあり、両端をヘラキリしたものが2点ある。

瓦の出土は少なかった。軒丸瓦3点、丸瓦10点、平瓦4点が実測できた。軒丸瓦に完形はなく珠文と巴の一部が残る瓦当1点があるが、外縁は浅く、瓦当の取り付けも雑で、丸瓦との接着面はカキヤブリの手法である。礎石建物1に伴う丸瓦の内面にコビキAの手法が残ることから、16世紀後半期と思われる。高田城本丸出土の丸瓦に吊りひも痕があり、天正12年から宇喜多秀家の領有以後重要な拠点であった高田城を一部修理したことが考えられる。平瓦は21cm×20cmのやや小ぶりである。礎石建物に伴う遺物が16世紀後半から17世紀初頭に比定できることから、妥当である。白石純氏の胎土分析の結果、三の丸遺跡出土の瓦がⅠ・Ⅱ類の2種類の胎土にわかれ、高田城本丸出土瓦はⅡ類と胎土が類似していた。また、太鼓山の南麓から採取した粘土も三の丸遺跡の瓦と同じように2種類にわかれたことから、在地で焼かれた可能性があるという。粘土採取地近くには奈良時代の須恵器窯もある。上層の集石遺構出土の瓦は江戸時代後期の三浦明次入部後のものと思われる。瓦から見て、三浦氏が1576年に滅亡した後、瓦葺建物が建てられることになる。したがって、礎石建物1は15世紀第4四半期以後と考えられる。三浦氏の後、高田城を守ったという毛利氏の家臣橋崎元兼、天正13年以後宇喜多氏が領有した時期であろう。

第19表 瓦一覧表

組織遺物名	形状	寸法値 (cm)				色調	胎土	焼成	特徴
		全長	丸瓦径	瓦厚	厚さ				
石瓦下	平瓦	19.5	16.3	1.5	表面 灰褐色 裏面 淡褐色	黄褐色を含有 硬砂粒を含有	やや軟	表 灰ナゲ 裏 磨ナゲ	
礎3	平瓦	21.3	19.7	1K.6	表面 褐色 裏面 灰褐色	硬砂粒を含有	真	両面 灰ナゲ 裏 磨ナゲ	
礎2	平瓦	26.0	14.0	1.8	表面 黄褐色 裏面 灰褐色	やや重い灰色 硬砂粒を含有	真	表 灰ナゲ 裏 磨ナゲ	
礎3	平瓦	26.0	12.0	1.6	表面 黄褐色 裏面 灰褐色の戻	硬砂粒を含有	やや軟	表 磨1cmの灰ナゲ 裏 磨ナゲ	
組織遺物名	形状	寸法値 (cm)				色調	胎土	焼成	特徴
		全長	丸瓦径	瓦厚	厚さ				
礎1	丸瓦			3.9	1.8	黒色	灰白色		内縁に細いコビキA 外縁は磨滅
礎3	丸瓦	21.2	18.9	2.3	2.7	1.6	表面 黒色カーボン 裏面 灰褐色	灰白色 硬砂粒を含有	内縁に細いコビキA ケタナ目 ヘラ削り
礎5	丸瓦	7.0		1.8	0.8	1.8	褐色 灰粒 硬砂粒を含有	やや軟	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
礎石建物	丸瓦	8.0		4.1	1.5	1.5	黒色 硬砂粒を含有	真	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
礎石建物	丸瓦		9.8		2.0	2.0	灰黒色 硬砂粒を含有	真	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
基礎3	丸瓦	12.2	3.4		2.0	2.0	内厚 黒色 硬砂粒を含有	真	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
基礎2	丸瓦	10.5	3.0		2.7	1.5	褐色 硬砂粒を含有	真	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
基礎1	丸瓦	7.0			2.0	2.0	黒色 硬砂粒を含有	真	内縁 コビキA 表面 コビキA ヘラ削り ナゲ
石瓦下埋土	丸瓦	3.0	3.0		2.5	赤褐色 (焼熟)	硬砂粒を含有		内縁 ナゲナ目

発掘遺構名	部材	計測値 (cm)			色調	胎土	焼成	特 徴	
		直径	外径						厚さ
			端	縁高					
石垣下	群丸瓦	14.0	1.5	6.5	1.0	黒色	砂粒を含む	やや軟	巴 漆文
井戸3	群丸瓦	12.0	1.5	6.7	1.0	瓦面黒 灰白色 内面 黒色		やや軟	瓦面丸瓦に貼り付け
溝1 砂切層	群丸瓦	9.3						やや軟	
溝2	群丸瓦	13.0			4.5	灰白色	砂粒を含む	やや軟	
集石遺構	群丸瓦		36.1		4.4	表 黒色キーボシ 内面 灰白色		堅い	内面 赤目 ヘタ割り
集石遺構	群丸瓦				1.6	灰白色			巴 漆文

第20表 土師一覽表

発掘遺構名	部材	計測値 (cm)				色調	時期	胎土	焼成	特 徴
		最大径	最小径	口径	壁厚					
集石遺構	土師	45	21	6	130	褐色		砂粒を含む	やや軟	
石段壁土	土師	54	11	4	6	灰色～赤褐色		砂粒を含む	やや軟	定形
石段壁土	土師	53	11	3	3	黒色		砂粒を含む	堅い	定形
石垣下	土師	68	28	6	48	淡褐色		砂粒を含む	やや軟	定形 手づくり
石垣下	土師	68	29	5	48	淡褐色		砂粒を含む	やや軟	定形 手づくり
石垣下	土師	25	9	3	12	赤褐色		砂粒少し	やや軟	
石垣下	土師	25	10	3	15	赤褐色		砂粒少ない	やや軟	
石垣下	土師	17	10	3	12	赤褐色		砂粒少ない	やや軟	
石垣下	土師	16	11	3	12	赤褐色		砂粒少ない	やや軟	
土師2	土師	47	12	8	121	黒色		焼成	堅い	
土敷き層土	土師	25	12	4	12	淡褐色		砂粒を含む	やや軟	
溝1	土師	25	12	3	100	褐色		砂粒を含む	やや軟	
瓦倉壁	土師	49	12	2	9	灰色～赤褐色		砂粒少ない	堅い	定形 両面ヘタ割り
瓦倉壁	土師	50	12	3	10	黒色		砂粒少ない	堅い	定形 両面ヘタ割り
瓦倉壁	土師	43	11	2	7	淡褐色		砂粒を含む	堅い	ほぼ定形
瓦倉壁	土師	38	8	3	5	暗褐色		砂粒少ない	堅い	ほぼ定形
瓦倉壁	土師	24	12	3	13	淡褐色		砂粒少ない	やや軟	
瓦倉壁	土師	23	8	2	12	褐色		砂粒少ない	やや軟	
鍛冶炉4	土師	45	12	2	6	褐色		砂粒少ない	堅い	定形
溝2	土師	26	10	3	5	褐色		砂粒少ない	堅い	ほぼ定形
溝2・3の境	土師	43	10	2	6	赤褐色		砂粒少ない	堅い	ほぼ定形
溝4	土師	58	10	3	7	暗褐色		砂粒多い	やや軟	定形
溝4	土師	48	12	3	6	暗褐色		砂粒を含む	やや軟	ほぼ定形
溝4	土師	29	12	4	167	暗褐色		砂粒を含む	やや軟	

第2節 遺構の変遷と時代観

遺物や遺構から見て遺構の重なりは溝4・5・6、建物8・9・10・11などのように3～4回はあったと思われる。掘立柱建物群の重なりから溝4・5・6をもとに、また、出土遺物のなかに井戸2と溝6から出土した天目茶碗が接合したこと、鍛冶炉2と溝6と包含層から出土した土師器皿が接合したことも勘案して想定してみた。

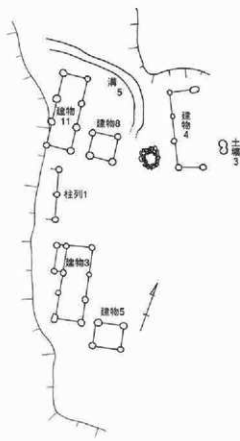
基本的には石敷き遺構より北側の遺構群は井戸2が溝4・5・6と繋がっていたとして、溝4・建物10か建物12→溝5・建物11・建物8・柱列1→溝6・建物9・柱列2→石敷き遺構と変遷したと考える。また、建物4→鍛冶炉2→北石垣2→北石垣2・石垣1と変遷する。溝2より南側については遺構の切りあい関係が十分に把握できていないが、遺物や検出面からみて、建物7→建物3・柱穴106→建物5か建物6・土敷5→最も新しいL字溝・石垣1・石段のように遺構が変遷したと考えた。3つのブロックの変遷を相互につなぐ遺構が少ないために、かなり難解になるきらいがある。

遺物から見ると備前焼は15世紀後半が古い時期で、16世紀前半、16世紀後半、17世紀初頭にそれぞれ比定できる遺物が出土しており、輸入陶磁器も15世紀代は少なく、16世紀のものが多くなり、16世紀後半には青磁が減り、国産陶磁器が増えてくる傾向がある。17世紀初頭まで続く。以上のことから、大きく4期を想定してみた。

第1期は溝4の区画には建物12か建物10が建てられたと思われる。ただ、その建物は共存し得ないのでいずれかが先行する。鍛冶炉を伴うと思われ、炉4-1が貼り床下から検出されたので古く、建



第86-1図 遺構の変遷 (I期)



第86-2図 遺構の変遷 (II期)

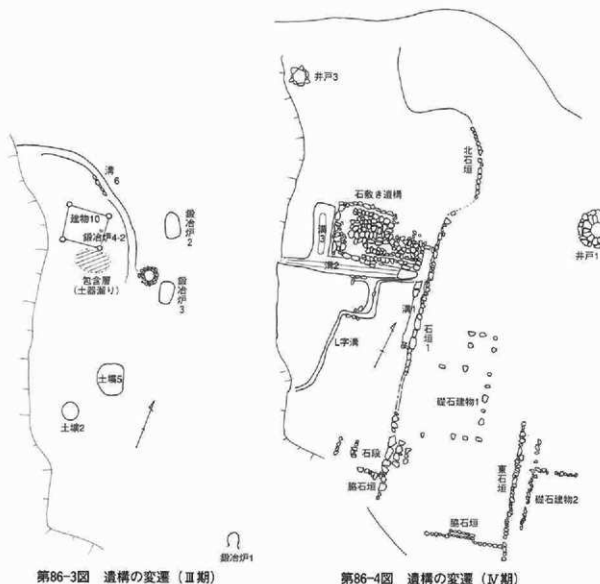
物12に伴うと考えた。溝4の区画内に取まり、南へは柱列2、さらに南側に建物7、その南に建物5が配されていたと思われる。井戸2も存在していたと考える。15世紀代半ば以前と考えたい。

第2期は溝5の区画から考えてみると建物8・9と建物11、柱列1、南では建物3・建物5か建物6、溝5の東には一段高い建物4が地山を削平して建てられていたと考える。建物の方位が建物4も含めて、ほぼ北北西に向き、3間×1間の建物の東に1間×1間の建物を配する形が見える。建物3・4・11はほぼ同じ規模で面積は約120㎡である。柱列1は西側に建物が広がると思われる。最も多くの建物があった時期と思われる。建物11の柱穴からB群の青花碗が出土しており、15世紀後半から16世紀前半と考えたい。

第3期は溝6の区画から考えると建物10か建物12が建てられ、鍛冶炉1、鍛冶炉2、鍛冶炉3、柱列1が共存していた。また、井戸2から出土した天目茶碗は溝6と接合した。

したがって井戸2も存在していたことになる。鍛冶炉2から出土した土師器片と溝6出土のものは同一個体であり、さらに包含層の土師器とも接合できた。このことは鍛冶炉2が廃棄される時溝6は埋まっていなくて、包含層(土器溜り)部分は浅い窪みであったことになる。南半分には建物が配置がなく、土塋5や土塋2が存在した。包含層から線描き蓮弁文の青磁碗C群などが、土塋2から雷文風の青磁碗が出土している。この期は建物が1棟しかないことになり、遺跡に空白部分が多くなる。16世紀中葉ごろか。

これまでの3期は一定の期間をおいたわけではなく、建物は立て替えられたと思われる。第4期は山側の斜面を削り、東石垣を築いて礎石建物2を建て、石垣1を築いて礎石建物1を建て、さらに溝



第86-3図 遺構の変遷 (Ⅲ期)

第86-4図 遺構の変遷 (Ⅳ期)

1を挟んでそれに直交する石敷き遺構と溝3を作った大造作の時期であろう。おそらく、三浦氏は滅亡して毛利氏の家臣である、橋崎元兼が入った時期と思われる。瓦から見ても天正年間のものではなく、コビキAの手法の瓦が礎石建物に伴うことから16世紀後半か17世紀初頭の時期と思われる。なお東石垣の南端の礎石垣と石段脇の石垣はこの後築かれたであろう。

結論として、これらの遺構は誰によって作られたのであろうか。それは出土遺物の中に証明できるものはない。ただ、期的には15世紀から17世紀初頭までの約200年間に亘る遺物が出土していること。それらは全国各地で発掘された中世山城跡や城館から出土する遺構や遺物のありようと類似していること。高田城の籠にあり、規模が大きい建物群と出土した輸入陶磁器、国産陶磁器、武具、天目茶碗や碁石、漆器など一般庶民とは異なり武士階級的生活居住地と考えられること。などから室町時代から戦国末期まで、高田城を拠点に美作西部を支配していた三浦氏がその家臣の館の一部と推定したい。館とすれば規模が狭小であるが、西半分は遺構の密度が高く、柱列1・2や青花を出土した柱穴71、柱根が残っていた柱穴49、60などは西側へ広がる建物の一部であるから、遺跡の範囲はさらに西側へ広がっていたことが考えられる。調査面積は約1,000㎡で第3期までの掘立柱建物群の範囲は

500m以下である。

中世において、城と城主や家臣の居住地がどのようなものであったかは明らかではない。山城の麓に城主の居館が在ったという説が一般的である。また、家臣団は城下に常駐せず、それぞれの知行地にて、一朝有事の際、はせ参るといわれている。しかし、城下に居住空間を持つことは当然であろう。

三浦氏の家臣であった牧家に「高田城主次第」という文書が残っている。後に書き写されたもので「右本書損じ申し候、委しき訳相知レ不申候へ共荒々写置申し候、以上」と記しており、その信憑性に疑問があるものの一定の参考になりうる。そのなかで「作州高田大つぶさ城主」について文亀元年から天正13年までの次第を書き、そのあとに三浦貞久、貞勝、貞守、貞広の代は二の丸 牧兵衛 知行千石取、本段出張 牧河内 貳千石取、小屋ノ段 牧兵庫 貳千石取、三の丸 草加部平内 貳百石取（略）などと書いている。三の丸に草加部某が居住していたことになるが、それをそのまま信じて当てはめることはできない。戦国時代末期には城主と家臣の関係が変わり、次第に城下へ集結させる形態になったらしいが、江戸時代のような城下町を形成していない。したがって本遺跡の掘立柱建物群が草加部氏の屋敷とはいえないが、こうした形で家臣の居住地が在った可能性もある。むしろこれから、城主三浦氏や家臣の牧氏、船津氏、草加部氏らの居館はどこにあったのかを探る必要がある。高田城本丸、太鼓山と山腹に残る多くの郭、麓に残っているはずの居館跡を総合的に調査することが勝山の歴史を解明することになると思われるし、大げさに言えば中世を解明する貴重な文化財こそ高田城であると思われる。

第3節 時代の動きと三浦氏

本遺跡が高田城の西麓に位置し、時期的にも城主三浦氏の活動と深い関わりがある。相模国の三浦半島が本拠地である三浦氏は鎌倉幕府の最有力御家人であった。三浦泰村は宝治の合戦で北条時頼らに滅ぼされるが、同族の佐原氏の支流である盛連の子息らが時頼に加勢し、命脈を保つことができた。乱後まもなく佐原盛時は「三浦介」許され、「三浦」を名乗り復活することになる。

1333年鎌倉幕府を倒してから、後醍醐天皇に離反した足利尊氏は新田義貞・楠木正成らと対立して九州に逃れた。1336年、弟の足利直義とともに、東上する途中に三浦介高継に対して、「美作国因徳対治の事、備中・美作兩國の軍勢を備し、嚴密の沙汰を致すべし」と美作の新田勢を退治するように命令している。高継は美作から南下して、山陽道で直義軍に合流し、淡川の合戦では大手の大将として播磨・美作・備前の軍勢とともに戦い、楠木を破っている。（『梅花論』）貞宗もともに戦ったであろう。翌年勲功によって越後の奥山庄金山郷を与えられている。また、高田庄も高継の跡を受け継いで領有したのかも知れない。『吸江寺文書』によれば、1354年貞宗は美作国高田庄甘波村（神庭）の替えに、土佐国吾川山庄上谷川村を吸江寺へ永代寄進していることから、高田庄を領有していたことになる。また、1360年妙見宮に寄進した鯛口の銘に「下野守貞宗」と刻んでいることから、同年山名時氏が高田城や笹向城を攻撃したとき、貞宗が城主であったことになる。

『作陽誌』には貞宗のあと行連-範連-政盛など6代の城主の名が書かれるが、彼らの具体的な事跡はない。三浦本家の系図には貞宗-行連は書かれているがそのあとに続く範連-政盛の名は見当たらない。貞宗の死後120年以上も経た1487年になって、貞連の名前が文献に記されることになる。したがって行連までの城主については疑問がある。三の丸遺跡においても14世紀後半から15世紀後半ま

での遺物が少ないことと符合する。

長享2年(1488)赤松政則が山名氏を倒して美作まで侵入し、被官の浦上氏を院庄に置いたころ、この高田城を本拠としていたという三浦貞直は赤松氏に属したと思われる。その前年の9月には貞直は將軍足利義尚の六角征伐に近江へ出陣している。同じ年に塩湯郡(美作町湯郷)の代官職を所望したり、見明戸(湯原町)代官職に任じられている。さらに、笹向城を攻略して山名右近亮を駆逐するなど、領地拡張に積極的な活動を展開している。貞直は1509年に没し、貞直が相続するが父の領地拡張を継承して、久世保を押領した。天文年間の三浦氏は高田庄、草加部村、久世保、大庭保惣領分、真島荘、古見・田原、赤野郷、垂水郷、関・一色、月田、井原郷、美甘新庄・本荘を本領としていたらしい。今の真庭郡中南部に匹敵する範囲である。三の丸遺跡の第1期から第2期にあたり、中国から青磁、青花、銅銭などの物資が流入した時期である。

1520年赤松氏が美作に侵入し岩屋城を攻め、やがて浦上村宗が播磨・備前・美作を支配する。これからあとは出雲を中心に勢力を持ってきた尼子氏は安芸・備中・美作・伯耆へ勢力を広げてくることになる。出雲に最も近い美作はその最初の標的であった。

享祿5年(1532)5月出雲の尼子詮久(後の晴久)は備中国を経て美作に侵入し高田城は攻められて落城し、城主貞直が死んだ。高田城には尼子の家臣が城番をしたらしい。1537年ごろには浦上氏が美作を支配していたようであるが、三浦氏は支配下にあったと思われる。天文13年(1544)尼子国久は高田城や笹向城を落城させた。1545年には三浦貞久は円融寺を再建したり、見明戸八幡宮を建立している。三浦氏はこの地域での支配を続けていることになる。1548年貞久が病死し、喪に乗じて宇山が攻めて落城した。岩屋城主であった貞直の弟大原貞尚は尼子晴久に願って貞直の子才五郎へ所領安堵を受けた。晴久は天文21年(1552)美作など6カ国の守護に補任され、勢力を東へ広げていく中で、浦上氏との対立を深めていった。晴久は中山神社を再建して人心を取握しようとした。

1559年高田衆は大原貞尚の援助を得て蜂起し、宇山誠明を駆逐して貞直の弟貞勝を城主に立てた。この背後には美作奪還をもくろむ浦上宗景の存在があった。尼子晴久は没して義久が家督を相続した。1560年毛利氏に属していた三村家親は備中松山城に入り、美作への進出を企てた。1561年12月家親は高田城を攻めて貞勝を自害させた。貞勝の室は備前にのがれ、やがて宇喜多直家に召しだされて、宇喜多秀家を生んだ。三村家親は東美作へ勢力を広げて浦上氏と対立するが、家親は宇喜多直家に狙撃され挫折した。こうした状況のなか、尼子義久は人質の貞直を高田城に返すことも考え、大原貞尚を後見に擁立し所領を回復した。1566年尼子氏の富田城が落城したとは浦上宗景と同盟関係にあったらしい。16世紀中ごろは尼子氏や、三村氏の激しい攻撃に翻弄され安定した状況はなかったようである。三の丸遺跡では建物が少ない第3期にあたるが、16世紀半ばから後半にかけての遺物も出土する柱穴があり、西へ広がる建物があったと思われる。

永祿11年(1568)毛利氏が高田城を攻めて、家臣の金田らの謀反者が出て落城し、貞盛は自刃した。そのあとには毛利の家臣牛尾氏らが在番として入った。高田衆は元亀元年(1570)山中鹿之助の援助を得てその所領を回復し、再び貞直を城主に擁立したようである。1570年代の政治情勢の中で三浦貞直と重臣の牧兵庫助高春の動きが目される。「石見牧家文書」によれば、織田信長が中国へ侵攻しようとするなかで、毛利氏と戦争をしていた豊後の大友宗隣は再興を願う出雲の尼子勝久、備前の浦上宗景、美作の三浦貞直、瀬戸内海の村上武吉と連携を取りながら、毛利氏包圍網を形成しようとした。その時の情報交換の文書が残っており、牧兵庫助が活発な活動をしたことが知れる。大友氏らの

家臣にも「親」を送って喜ばれていることも興味深い。彼の政治的能力が優れていたことが文書から読みとれる。また、毛利氏という強大な政治勢力の侵攻に対応する三浦氏のような小さな武士団の動きを伺うことができる。

しかし、大友氏らが画策した毛利氏包圍網は浦上氏と対立した宇喜多直家が毛利氏と手を組んだことで崩れ去った。浦上氏滅亡に乗じて天正3年(1576)9月小早川隆景に高田城は包圍された。家臣の牧兵軍らは宇喜多直家に和平の仲介を依頼し、貞広が城を明け渡すことで決着した。貞広は播磨国で病死したと伝えられ、三浦氏は滅亡した。

高田城には橋崎元兼が入り、毛利の支配は1584年まで続くことになる。三の丸遺跡の第4期がこの時期に当たると思われる。16世紀第4四半期である。石垣1や東石垣の面に礎石建物が建ち、石敷き遺構、井戸3が作られた。志野焼、瀬戸美濃灰釉、斜めスリ目の播磨鉢などが出土した。

有名な僧中高松城の水攻めのあと、豊臣秀吉によって毛利と宇喜多の領国境を高梁川としたため、美作の毛利方の城に立て籠もる家臣の中には岩屋城の中村頼宗のように、頑強に退去を拒み、小競り合いも生じたが、天正13年(1584)には退去した。宇喜多氏が領有することになった高田城には三浦貞勝の子で宇喜多秀家の義兄弟に当たる桃寿丸が城主となつたらしい。桃寿丸は京都で地震に遭って圧死したという。彼の死後牧藤左衛門家信が代官となったようである。高田城の本丸から出土する瓦はこの時期に高田城を修復したときのものであろう。

このあと高田城は関が原の戦いで敗れた宇喜多秀家に代わって小早川秀秋が美作を領有し、慶長8年(1603)森忠政が美作を領有し、各務氏、大塚氏が城番に入った。元禄10年(1697)森家改易によって、高田は幕府領となって高田代官所などの支配下となる。平和な江戸時代後期の明和元年(1764)三河の国から三浦明次が2万3千石で入部する。書院は三の丸遺跡の北側に建てられ、大手門の中は城内と呼ばれた。三の丸遺跡には東御殿が立てられる予定であったが、高い石垣が築いただけであったと思われる。上層からは東御殿に関する遺構は検出されなかった。

参考文献

第3章参考文献

備前焼については備前市教育委員会石井氏、岡山市教育委員会乗岡氏に実現していただき、ご教示をいただいた。

伊藤 晃 『備前焼の流れ』『木村コレクション古備前図録』岡山県教育委員会 昭和50年

乗岡 実 『備前焼播鉢の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』2000

岡山市教育委員会 『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』1997

岡山市教育委員会 『史跡岡山城本丸中の段発掘調査報告』2001

輸入陶磁器については京都府文化財センター藤島康雄氏の鑑定に負うところが多い。

貿易陶磁研究会・中世土器研究会など 『貿易陶磁研究会関西大会資料集』1998

日本中世土器研究会 『中近世土器の基礎研究XIV』京都系土器器皿の伝播と受容-中世後期を中心に- 1999

岡山県教育委員会・国土交通省苦田ダム工事事務所 『河内構遺跡・河内遺跡』苦田ダム建設に伴う発掘調査1『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170

岡山県教育委員会 『田治部氏屋敷址』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』67 1988

上杉孝良 「三浦一族」-その興亡の歴史- 三浦市教育委員会・三浦市観光協会 平成8年

岡山県 「福年史料」『岡山県史』

岸田裕二・長谷川博史 「岡山県地域の戦国時代史研究」広島大学文学部紀要第55巻特輯号2

1995

第4節 保存の経過と保存工法

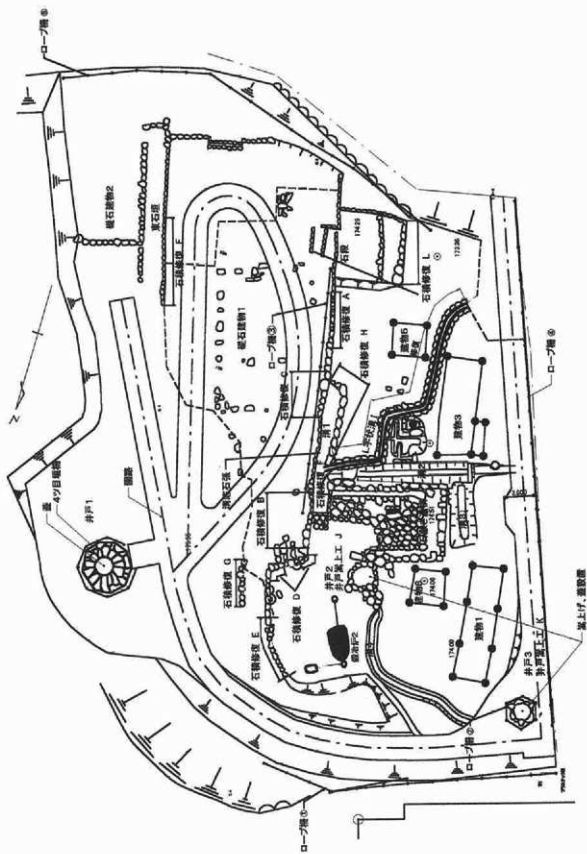
勝山町は平成14年度に勝山町役場北の宅地、畑地を職員駐車場とするために買収した。当該地は高田城の西麓にあり、一帯が城内・三の丸の字名であり、明治初年の絵地図には「東御殿跡」と記されていた。したがって、埋蔵文化財の包蔵地の可能性が考えられたので、勝山町に対して確認調査を実施したい旨を依頼し、岡山県教育委員会文化財課の指導を仰ぐことにした。以下保存までの紆余曲折を記す。

- ・平成15年5月1日 岡山県教育委員会文化財課尾上元規主任に現地を査察していただいた。まず試掘・確認調査すべきとの助言があった。
- ・6月6日 勝山町文化財保護審議会は確認調査に同意した。
- ・6月24日から3日間、上段の畑地に第1～第3トレンチを下段の畑地に第4・5トレンチ重機によって入れた。その結果、第1～第3トレンチで礎石建物・石垣を検出、備前焼・天目茶碗・瓦類が出土した。これらの遺構遺物は室町時代から安土桃山時代の武家の屋形である可能性が出てきた。第4・5トレンチからは遺構も遺物も出土しなかった。
- ・6月26日 岡山県教育委員会文化財課尾上主任は戦国時代の遺跡であり、礎石などを残して歴史公園として保存するよう助言があった。
- ・7月4日 町文化財保護審議会は現地査察をし、○高田城の麓にあること、○周辺から三浦下野守貞宗の名前が掘られた跡口が出土していることなどから、三浦氏や高田城に関係する武家の屋形と推定し、勝山にとって重要な遺跡であるという観点から町教育委員会に対し現状保存すべきとの建議をすることを決定した。
- ・7月8日 建議書を町教育委員会に提出。(資料1)
- ・7月17日 教育委員会は未発掘部分の調査後現地を査察して結論を出すことになった。
- ・7月22日 総務課と教育委員会は駐車場との関連について現地で協議した。
- ・7月24日から発掘調査実施。
- ・8月5日 文化財課尾上主任は現地を視察して、可能な限り現状保存し将来的には歴史公園として、町並み保存地区との一体化した活用策を指導された。
- ・8月7日 町教育委員会は現地を査察し、文化財保護審議会からの建議の通り保存することが適当との結論に達し、三の丸遺跡の保存に関する要望書を勝山町長へ提出した。(資料2)
- ・8月25日 津山朝日新聞(夕刊)に「三の丸遺跡三浦氏の館跡の可能性高まる」掲載。
- ・8月25日 これを受けて勝山町談会総務・文教厚生合同委員会では三の丸遺跡への対応が協議された。そのなかで教育委員会は保存を要望したが、この程度の遺跡に金をかけて観光資源にはならないし、石が1つや2つ出ただけだから埋めて駐車場にすればよいという文化財保護審議会の評価を

無視する意見が出た。これに対して、勝山にとって誇りある遺跡である、考古学的価値が高いといった意見が出た。結局、現地説明会を開き住民の支持があるかどうかを見ること、調査内容をまとめて提出する。その後再度合同委員会で協議し結論を出すことに決まったあと現地視察をした。

保存については文教厚生委員会の継続審議となった。

- ・ 9月6日 山陽新聞真庭園版に「高田城主の館跡か？」掲載。
- ・ 9月9日 文化財課尾上主任現地視察と指導。
- ・ 9月12日 読売新聞岡山県版に「中世領主・三浦氏の居館跡」掲載。
- ・ 9月14日 遺跡の約50%が調査終了したので、現地説明会を実施し、町内外から100名を超える見学者があった。
- ・ 9月18日 町議会での協議のため10月27日まで発掘調査を中止する。
- ・ 10月17日 町議会総務・文教合同委員会そのなかで、土地買収の際埋蔵文化財の存在は知らされなかったことに批判があり教育長が謝罪した。さらに、教育委員会は担当課と文化財について開発調整会議を開いていないことも指摘があった。なぜ発掘のための予算をつけたのかという批判まで出て発掘することへ強い反対があった。しかし、発掘調査は3月末までとなった。
- 午後橋本調査員が町議会総務・文教合同委員会に招致され、三の丸遺跡について詳しく説明する。各委員の文化財への理解に温度差があり、保存か否か議論された。埋めて保存する方法もあるという意見もあったが、モルタルと土の混合土で固める現状保存が認められた。ただ、その保存方法で何年間維持できるか、保存整備の予算が少ないのではないかと、勝山の歴史がわかる遺跡であり保存されることは良いことだ、町指定史跡・県指定史跡として保存されることが望ましいなどの意見が出た。結論として、三の丸遺跡が城下町勝山のルーツであり、現状に近い状態で保存することが望ましいという意見が大勢を占め、保存が確定し調査の継続が承認された。
- ・ 10月27日 発掘調査を再開する。石敷き遺構より西側と北側の表土を除去する。多くの遺物とともに井戸・掘立柱建物・鍛冶炉・数条の溝などが検出された。
- ・ 11月26日 文化財課尾上主任が調査と保存について現地指導。
- ・ 平成16年1月5日より2月25日まで町議会から発掘調査中止の指示があった。
- ・ 三の丸遺跡保存のための来年度予算は1300万円が計上された。
- ・ 2月13日 平成16年度岡山県フロンティア21地域活力創出支援事業に三の丸遺跡保存活用事業が適応できるかどうか真庭振興局と協議した。
- ・ 2月16日 勝山町長・助役と教育委員会が三の丸遺跡保存について話し合い。午後から、町議会全員協議会が開かれ、中芝課長代理と橋本調査員が出席し、三の丸遺跡について詳しく説明した。全体的には三の丸遺跡の保存に賛成の意見が大勢を占め、最終決定は総務文教委員会に付託することになった。
- ・ 2月26日 調査が再開された。
- ・ 3月3日～7日 勝山ひな祭りで400人もの見学者があった。
- ・ 3月9日 町議会総務・文教合同委員会が現地を視察し、駐車場面積が減少するが、発掘区域のほぼ全域が保存されることになった。
- ・ 3月10日 岡山県フロンティア21事業（略称）の申請書を真庭振興局へ提出。
- ・ 3月20日 保存整備のために「岡山県フロンティア21」補助金。



第87図 高田城三の丸瀬跡保存整備設計図

第5節 付載

1 三の丸跡出土の土師器・瓦の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析目的

三の丸跡の調査では多量の土師器皿が出土した。そして、この皿は製作手法の違いから回転台と手づくねに分類されている。また、皿の表面の肉眼観察でも胎土が異なっていると考えられる。そこで、理化学的な胎土分析を実施し、胎土の差異について検討した。また、瓦に関しては、以前分析した、本丸出土の瓦および、町内の中心部に位置する安養寺境内から採取した良質の粘土と比較することで、瓦がどこから供給されたか検討した。また、三の丸跡出土の瓦より時期は新しくなるが、現在までに蓄積している津山城に葺かれていた瓦胎土とも比較した。

2. 分析試料

分析に供した試料は、表1に示した三の丸跡出土の皿41点、瓦9点、安養寺境内より採取した粘土8点である。この粘土は同一場所から4つの粘土塊を採取し、同じ粘土塊より2カ所サンプリングしたものを分析した。

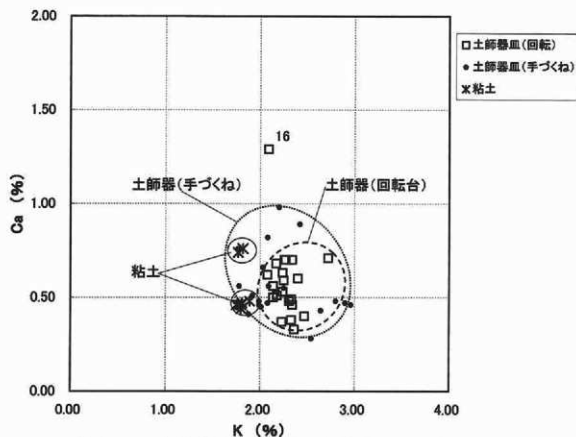
3. 分析結果

理化学的な分析手法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分(元素)量を測定するもので、その成分量の違いから生産地を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

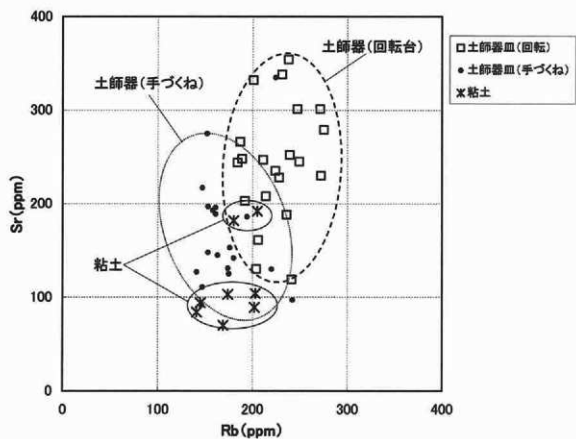
測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ製SEA2010L)を使用し、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Rb・Sr・Zrの13元素を測定した。表1の出土試料分析値一覧表からCa(カルシウム)、K(カリウム)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

第1・2図では、土師器皿の制作技法の異なる回転台と手づくね技法の差が胎土でも違うかどうか検討した。その結果、第1図では回転台と手づくねは識別できなかったが、第2図では分布域がずれ、判別が可能であった。

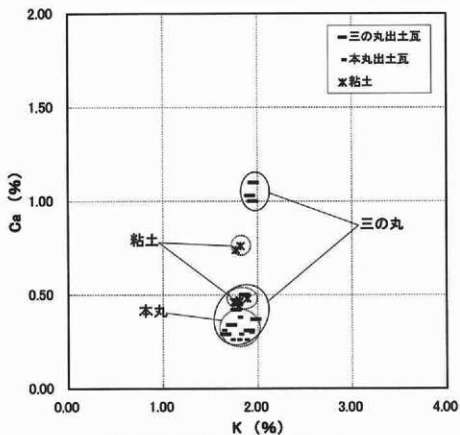
第3・4図では、三の丸および本丸出土の瓦および粘土の比較を行った。まず、三の丸出土の瓦が2つの胎土に分かれた。それは、3、8、9(I類)と1、2、4、5、6、7(II類)である。また、本丸出土瓦はII類と胎土が類似していた。そして粘土も三の丸出土瓦と同じI・II類の2つに分かれた。



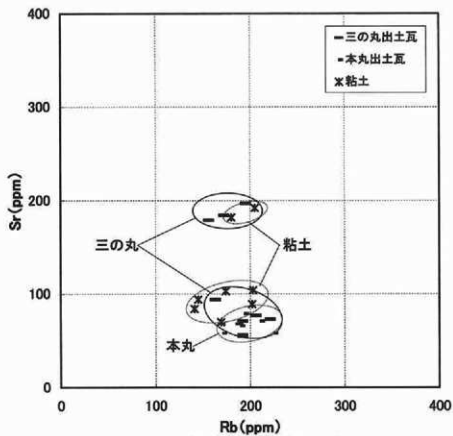
第1図 三の丸出土土師器皿(回転台・手づくね)の胎土比較(K-Ca)



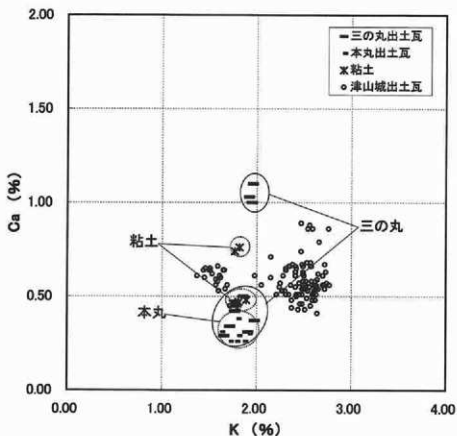
第2図 三の丸出土土師器皿(回転台・手づくね)の胎土比(Rb-Sr)



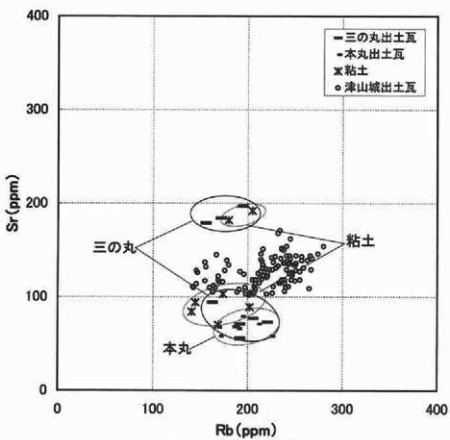
第3図 瓦・粘土の胎土比較 (K-Ca)



第4図 瓦・粘土の胎土比較 (Rb-Sr)



第5図 瓦・粘土の胎土比較 (K-Ca)



第6図 瓦・粘土の胎土比較 (Rb-Sr)

第5・6図では、三の丸・本丸跡と津山城出土瓦の比較を行った。その結果、津山城の瓦とは胎土的に異なっていた。

4. まとめ

三の丸跡出土の土師器皿、瓦の各試料の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

- (1) 土師器皿の分析では、制作技法の差が胎土にもあった。これは、もともとの粘土の違いによるものなのか実顕顕微鏡による肉眼観察を行ったところ、回転台使用の皿は、精された粘土で、砂粒もほとんど含んでいないが、手づくねには砂粒が含まれていた。従って、製作手法の違いにより、粘土も使い分けしていたのか、それとも異なる工人による製作なのかこの胎土分析ではわからなかった。
- (2) 瓦の分析では、三の丸のものが2つの胎土（Ⅰ・Ⅱ類）に分類され、Ⅱ類はCa量およびSr量の含有量が少ない領域で、この領域に本丸出土の瓦が分布し胎土が類似していた。また、粘土との比較でも粘土の胎土が2つに分かれ、これらが三の丸のⅠ・Ⅱ類と類似していた。
- (3) 時期が異なるが、津山城出土の瓦と比較したところ、重複せず識別できた。

以上の結果より、土師器皿では、回転台と手づくねのあいだで明確ではないが胎土に違いがみられた。また、瓦では三の丸出土のものが2つの胎土に分類でき、本丸出土の瓦とも類似していた。そして、安養寺が立地する丘陵の粘土は2種類にわかれ、三の丸・本丸の瓦と類似していることから在地で焼かれていた可能性がある。しかし、データの数が少ないこともあり今後生産地のデータを蓄積し再検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、橋本惣司先生には、いろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

2 高田城三の丸跡出土漆器における材質・技法の調査

くらしき作陽大学

北野 信彦

1、はじめに

勝山町内の高田城三の丸跡からは、室町時代後期の16世紀後期から近世初頭期段階に至る中世城館関連の遺構と遺物が多数検出されている。この中には、幾例かの漆器資料も含まれていた。中世段階の当該地域は、備前・備中・美作・さらには日本海側の山陰地方への交通の要所にあたるが、この地域における出土漆器の報告例は稀少であり、その性格には不明な点が多い。今回、勝山町教育委員会のご好意により、これら出土漆器資料の材質・技法に関する文化財科学的調査を行う機会を得た。本報では、この調査結果を報告する。

2、出土漆器の調査

2.1 調査対象資料

今回調査を行った漆器資料は、ろくろ挽き物である椀や小皿型の飲食器類と板物である折敷破片などの実用的な生活什器類と、断片的で木胎部分が欠損しているため残存状況が不良な漆塗膜面の漆器破片資料の合計17点である。それぞれの年代観は明確ではないが、基本的には中世後期段階の資料群が中心であり、若干年代観の新しい近世段階の資料も混入しているものと考えられている。

2.2 調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、挽き物・板物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、蒔絵・漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた、①木胎の樹種同定、②木取り方法、③漆塗り構造の分類、④赤色系漆の定性分析、などの材質・技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

(1)木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柀目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフランin・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2)木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

(3)漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に1mm×3mm程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂(エポキシ系樹脂/アラルグイトGY1251J.P ハードナー-HY.837)に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、

顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行い、一部の代表的な漆器については生物顕微鏡を用いた薄層の透過観察を併用した。

(4) 赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料に関する定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000エネルギー分散型 X線分析装置 (EPMA・電子線マイクロアナライザー) を連動させて使用した。分析設定時間は600秒。さらに、クロスチェックを行うために堀場製作所 MESA-500型の蛍光 X線分析装置に設置して、電子線 (X線) を照射し、特性 X線を検出した。設定条件は以下の通りである。分析設定時間: 600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧: 15kV および 50kV、電流: 240 μ A および 20 μ A、検出強度: 40,000 cps、定量補正法: スタンダードレス。

2.3 調査結果

本資料のうち、挽き物類である椀型の資料群は、(1)内外黒漆を塗布するか、内面朱漆・外面黒漆を塗布し、地塗りの黒漆に朱漆で塗絵を筆描きする。いずれも高台高が比較的高く、胎部は内厚でやや大振りの器形を有するタイプと、(2)高台底のみには黒漆を塗布するもの、地の内外面は無加飾で朱漆を塗布する。高台高は比較的低いが、胎部の厚みは薄造りであるタイプ、の大きく2つのグループに分類された。このような器形を有する椀・皿類は、基本的には室町期から近世初頭段階に多く見られる器形分類の漆器資料である。その他では、やや年代的には下る可能性が高いが、板物類である折敷破片なども含まれていた (表1)。

これらの樹種同定の結果、いずれも広葉樹材が選択されており、前者の資料群では、やや一般的な良材であるクリ (5点)、ブナ (2点)、トチノキ (1点) が、後者の朱漆器では、最良材であるケヤキ (3点) の使用が確認された。また、板物である折敷破片 (資料No. 9) は、針葉樹のスギ科スギが使用されていた。挽き物類の木取り方法は、いずれも横木地であり、板目取りと柃目取りいずれも認められた。通常、江戸時代中期以降の椀木地の用材にはトチノキ・ブナ・ケヤキ材が中心となるが、中世後期から近世初頭期段階には、全国的に樹種の多様性が見出され、とりわけクリ・コナラ・シオジ材の使用が地方を越えて特徴的である。その点からは、本資料は当該時期の年代観の特徴をよく表しており、帰属年代を考える上でも、在地性が強いかな否かを考える上でも参考となる。

表1 三の丸遺跡漆器資料観察表

No.	器型	樹種	木取	表面塗り技法		塗地構造		使用顔料			備考	
				内	外	内	外	内	外	文様		
1	椀型	ブナ	A	赤	黒	外-絵赤	I	II	朱		朱	
2	椀型	ブナ	B	赤	黒	外-絵赤	I	I	朱		朱	
3	椀型	クリ	B	黒	黒	内外-絵赤	II	II			朱 朱 朱	
4	椀型	クリ	B	黒	黒	外-絵赤	I	II			朱 朱 朱	
5	椀型	クリ	B	赤	黒	外-絵赤	I	II	朱		朱 朱	
6	椀型	クリ	A	赤	黒		II	I			朱 朱	
7	椀型	トチノキ	A	赤	黒		I	I			朱 朱	
8	椀型	クリ	I	赤	黒		II	II	朱+ベンガラ	朱+ベンガラ	朱 朱	代用板漆器
9	折敷破片	スギ	-	赤	赤		V	V	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、布着せ補強
10	小皿	ケヤキ	B	赤	赤		III+IV	III+IV	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、泥下地系2層
11	椀型	椀面のみ	-	赤	赤		III	V	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、泥下地系2層
12.1	-	椀面のみ	-	赤	赤		V	V	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、布着せ補強
12.2	-	椀面のみ	-	赤	赤		III+IV	III+IV	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、布着せ補強
13	椀型	ケヤキ	-	赤	赤		III+IV	III+IV	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、布着せ補強
14	椀型	ケヤキ	-	赤	赤		III	III	朱	朱	朱 朱	板漆系漆器、朱絵組、布着せ補強
15.1	-	椀面のみ	-	赤	黒	外-絵赤	V	VI	朱		朱 朱	漆油樹脂化、朱絵組
15.2	-	椀面のみ	-	赤	黒	外-絵赤	I	II	朱		朱 朱	漆油樹脂化、朱絵組

個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると理解した。挽き物類のうち、後者のグループである朱漆器類は、資料No. 10、13、14にケヤキ材の木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を施したサビ下地が観察された。また、資料No. 12-1は、他のサビ下地とは異なり、種類の異なる泥サビを2層塗り重ねてあった。金属顕微鏡観察の結果からは、資料No. 9も含め、これらの資料の場合は、生漆に粘土鉱物もしくは珪藻土を混ぜてサビ下地としたものというよりは、膠や糊などに泥系の粘土鉱物を混ぜて用いる泥下地である可能性もある。

次に、朱漆器類の地塗り層は、泥もしくはサビ下地の上に朱漆を1層塗布する資料（資料No. 9、12-1、15-1）と、サビ下地の上に中塗りの黒漆を施し、さらに上塗りの朱漆を塗布する資料（資料No. 10、11、13、14）に分けられた。前記したように布着せ補強が観察される資料のうち、No. 10、13は、黒漆層と朱漆層が少なくとも2回は塗り重ねられており、一度は塗り直し補修の手が加わった可能性が指摘された。一方、前者の挽き物類では、炭粉下地の上に薄く黒漆や透明感が強い赤褐色系、もしくは朱漆を薄く塗布した漆器資料群が中心であった。このうち、資料No. 8の場合、内外面朱漆を地塗りする朱漆器の形態を有するものの、クリ材に炭粉下地を施し、薄く黒漆と朱漆が塗り重ねてあった。資料No. 10、11、12-1、13、14、15-1などの朱漆器類とは明らかに異なる簡便で廉価な材質・技法からなる量産タイプの代用朱漆器であった。なお、本報では、赤色系漆を塗布した赤色系漆器をいずれも朱漆器と呼称している。これは赤色系漆の使用顔料を電子線マイクロアナライザーおよび蛍光X線分析の結果、水銀および硫黄成分が検出されており、さらに顕微鏡観察した結果、いずれも朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）の赤色顔料を用いた朱漆であると理解したためである（図1）。朱漆に使用された朱顔料は、黄味が強い朱色、鮮赤色、暗紅色に至るまで赤い色味は資料により若干異なっていた。これは、個々の資料の土中埋没時の劣化状態の違いが朱漆の色調の変色度合いに影響を与えた可能性もあろうが、金属顕微鏡観察では、極めて細かく粒度がそろった朱顔料を使用している資料（資料No. 10、13、14など）、粗い粒度の朱顔料も多数含む資料（資料No. 12-1など）、その他の中間タイプの少なく3種類のグループに分類された。但し、資料No. 8のみ朱にベンガラ（Fe₂O₃）を混入した赤色顔料かもしれない。なお、クリ・ブナ・トチノキ材を用い、炭粉下地を施して薄い朱漆層を塗布するか、薄い黒漆層に朱漆で漆絵を施した実用の量産タイプの挽器の資料群（資料No. 1～8など）の朱顔料もこの中間タイプに属していた。

3、考察

以上、本資料のうち、挽き物類はいずれも椀・小皿型などの飲食器類を中心とした極めて実用的な生活什器としての漆器である。ところが、これらを、材質・技法といった生産技術面の組成からみると、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ優品資料まで、いくつかの品質のランクに分類された。そしてこれらは、前記したように、(1)内外黒漆もしくは内朱漆・外黒漆を地塗りし、それらに朱漆で漆絵を筆描きする。いずれも高台高が比較的高く、

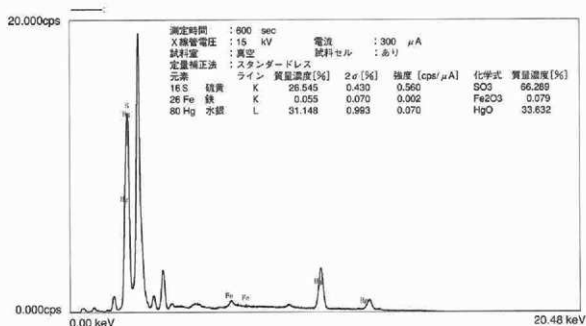


図1-1 朱漆 (1) 赤色系漆の使用顔料

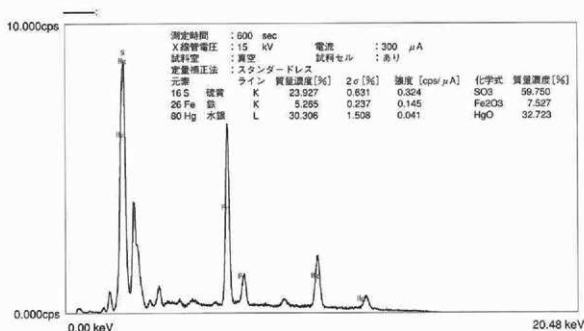


図1-2 朱漆 (2) 赤色系漆の使用顔料

胎部は肉厚でやや大振りの器形を有するタイプと、(2)高台底のみには黒漆を塗布するものの、地の内外面は無加飾で朱漆を塗布する。高台高は比較的低いが、胎部の厚みは薄造りであるタイプ、の大きく2つのグループに分類され、それぞれの生産技術面の組成は大きく異なっていた。前者は通常の中世段階から近世初頭期段階に一般的に使用されていた生活什器としての漆器碗類であるが、後者は、中世以来の代表的な漆器の一つとして、主に寺社什器を中心とした実用本位の「根来手」「根来碗」、もしくは「根来塗」と呼称された朱漆器類と類似している。漆工史の分野では、実用的な朱漆器に中世大寺院であった紀州根来寺の名前を冠する理由として、根来寺山内工房で良質な寺院什器としての朱漆器生産を行っていた点をあげ、根来塗の終末は、豊臣秀吉による根来寺焼き討ち、すなわち山

内勢力の衰退にあるとしている。一方、中・近世考古学の分野では、室町時代中期以降の寺院関連遺跡ばかりでなく、上級武家地や尾張清洲城下町遺跡のような地方城館関連遺跡からも多数の朱漆器類が検出されており、寺院什器のみに限定されず、地方武家階級を含めた広範な社会階層に朱漆器の使用が為されていたことが想定されている。このような朱漆器の代表的な使用状況を示した絵画史料には、中世後期頃の上級武家の食事風景を描いた「酒飯圖」がよく知られている。本資料の場合、肉眼観察ではほぼ同様のつくりを持つと考えられたこのような根来系朱漆器も、サビ下地の上に(1)赤色漆が単層塗布されている資料、(2)下層に黒漆もしくは赤褐色漆を塗布し、その上に朱漆を塗り重ねる資料、(3)黒漆もしくは赤褐色漆と朱漆が数回互層をなす多層塗り構造を有し、塗り直し補修の痕跡が確認される資料、など多岐におよんでいた。そして、資料によっては布着せ補強を施すなど、漆工史の分野では正統的な根来塗技法を有する資料(資料No.14など)も見出されるとともに、炭粉下地に薄く朱漆を一層塗すもしくは黒漆の中塗りに上に朱漆の上塗りを薄く施すなどの代用朱漆器の存在も確認された。調査者は、これまで中世末期段階の根来塗漆器資料として、和歌山県埋蔵文化財センターや岩出町教育委員会がそれぞれ発掘調査を行っている中世根来寺々寺域関連遺跡(根来寺坊院跡)出土朱漆器の材質・技法の分析を行った経験を持つが、そのときの分析結果と、本資料の根来系朱漆器のそれとは、代用朱漆器の存在も含め、類似した傾向を示していた。すなわち、室町時代中期以降、本地域においても地方武家階級を中心に多様な品質の根来系朱漆器の使用がなされていたこと、その中には塗り直し補修を施すなど丁寧な使用が行われていたことなどが理解されたことになる。もちろん、高台高が比較的高く、胎部は肉厚でやや大振りの器形を有するタイプの漆器碗資料も、同時期に広範な地域で普段使いの日用什器としての出土が確認されている。以上の点からは、本資料には、普段使いの漆器、ややハレの儀式食などに使用するような朱漆器の両者が見出された。そして、多方面への交通の要所であった当該地域の有力武家城館内で使用されていた生活什器である漆器は、機内を中心とした漆器生産技術の範疇に入っていた資料が中心となることも同時に理解された。もちろん、このような漆器に、地方在地性が強い小規模の漆器生産地の製品を加えながら、両者相互補完して、それぞれの時と場所のニーズに答えた調達と使用が為されていたのであろう。

(引用文献)

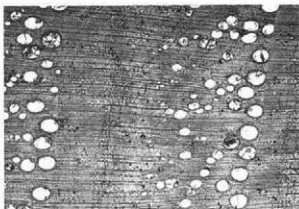
- 北野信彦(1993)「日常生活什器としての近世漆器碗の生産と消費」『食生活と民具』p.81-101、日本民具学会編、雄山閣出版
- 北野信彦(1995)「出土漆器資料の製作技法」『清洲城下町遺跡V』p.124-139、愛知県埋蔵文化財センター
- 北野信彦(1997)「漆器資料の分析と検討」『根来寺坊院跡 - 県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査報告書-』p.102-107、和歌山県文化財センター
- 北野信彦(2000)「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学 第9巻』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館
- 北野信彦(2002)「根来寺坊院跡出土漆器資料の製法について」『和歌山県立博物館研究紀要 第八号』p.28-37、和歌山県立博物館
- 北野信彦(2002)「清洲城下町遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『清洲城下町遺跡 Ⅲ』p.323-342、和歌山県埋蔵文化財センター

3 三の丸遺跡出土木片の樹種識別について

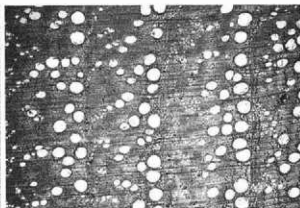
岡山県木材加工技術センター

見尾 貞治

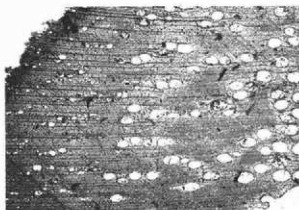
【識別結果】



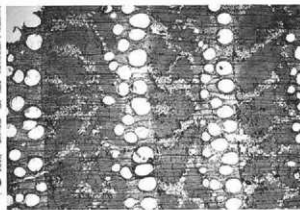
柱（柱穴38）横断面（木口面）×20 クリ



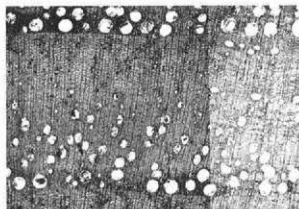
柱（柱穴0）横断面 ×20 クリ



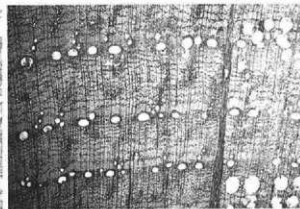
柱（柱穴2）横断面 ×20 クリ



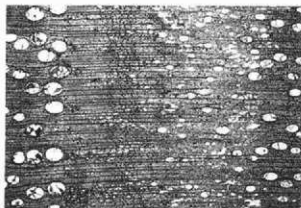
柱（柱穴1）横断面 ×20 クリ



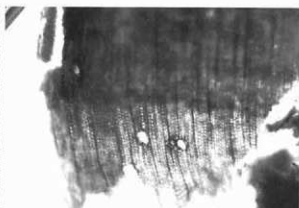
柱（柱穴77）横断面 ×20 クリ



柱（柱穴23）横断面 ×20 ツブラジイ



柱 (柱穴60) 横断面 ×20 クリ



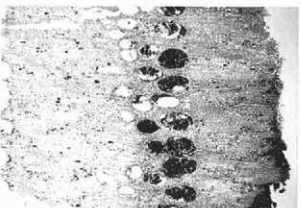
板 (溝3出土) 横断面 ×40 マツ



柱 (柱穴49) 接線断面 ×40 オニグルミ



板 (溝5出土) 横断面 ×20 クリ



板 (井戸2出土) 横断面 ×20 クリ

【識別結果】

・方法

材の組織構造の特徴を顕微鏡下で観察し、下記の文献を参考にして検索した。

顕微鏡観察用試料の作製は、可能なものについてはそのままカミソリ刃で薄片を切り出し、水で封入した。状態の良いくないものはパラフィンで包埋し、ミクロトームにより薄切して簡易プレパラートにした。

・参考文献

- ①木材識別カード：小林・須藤、日本林業技術協会、1960
- ②日本の木材：日本木材加工技術協会、1966
- ③木材の組織：島地・須藤・原田、森北出版、1976
- ④日本産木材顕微鏡写真集：林、京都大学木質科学研究所、1991



①発掘前 東より



④第5トレンチ 北より



②発掘前 南より



⑤第1トレンチ 東より



③発掘前 西より

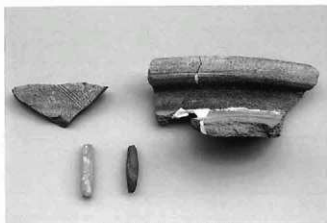


⑥第2トレンチ 北東より

図版 2



①碓石建物1



⑤石段埋土 出土遺物



②碓石建物1 北より



⑥碓石建物1 出土遺物



③東石垣と碓石建物2



⑦石垣埋土 出土遺物



④碓石建物2



⑧石垣埋土 出土遺物



①北石塚1 西より



④北石塚2 天目茶碗出土状況



②北石塚1、2



⑤北石塚埋土 出土遺物



③北石塚1 小柄出土状況



⑥北石塚 発掘状況

図版4



①石敷き遺構



④石敷き遺構 視出土状況



②石敷き遺構 西より



⑤石敷き遺構 出土遺物



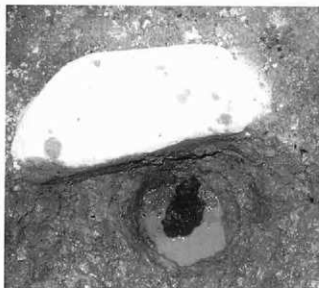
③石敷き遺構 排水溝



⑥石敷き埋土 出土遺物



①建物3



④柱穴77 柱根



②建物3 西より



⑤建物4



③柱穴68より青花出土状況



⑥建物4 開元通宝 出土状況

図版6



①建物5、6 西より



④建物8 南より



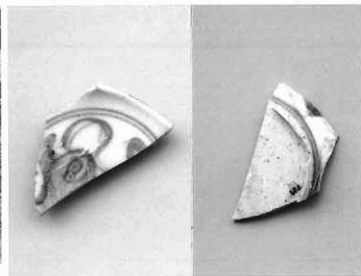
②建物7 西より



⑤建物9 南より



③建物8 東より



⑥建物9 柱穴39出土青花



①建物10 西より



④柱列1 南より



②建物11 南より



⑤柱列2 西より



③建物12



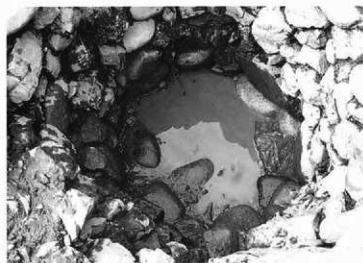
⑥柱列2 柱穴54出土咸平元宝



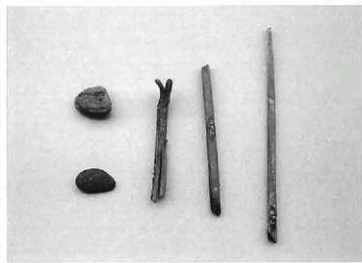
①井戸2 発掘状況



④井戸2 出土遺物



②井戸2 底の敷石



⑤井戸2 出土遺物



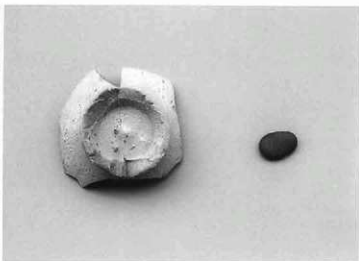
③井戸2 出土遺物



⑥井戸2 勝山中学校総合学習風景



①井戸3 南より



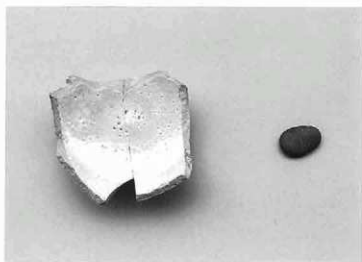
④井戸3 出土遺物



②井戸3 出土備前焼水屋甕



⑤井戸3、溝1 出土遺物



③井戸3 出土遺物



⑥井戸3 出土遺物



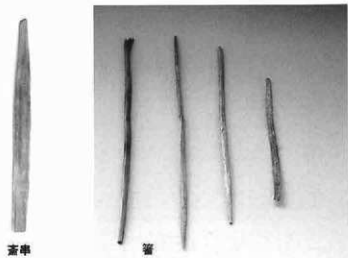
①溝1 北より



④溝1 出土漆器椀



②溝1 底に敷かれた石



箸

箸

⑤溝1 出土箸串、箸



③溝1 北より



⑥溝1 出土遺物



①溝2 竹管出土状況 東より



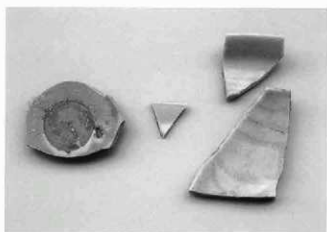
②溝2 土層断面



③溝2 折敷出土状況、銅製品



④溝2 木器出土状況



⑤溝2 出土青磁



⑥溝2 出土青磁



⑦溝2 出土灰釉碗



⑧溝2 出土灰釉碗



①溝3 北より



②溝3 下層様



③溝3 南端



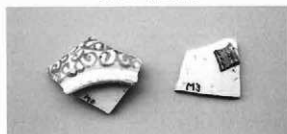
④溝3 鉄繫付皿出土状況



⑤溝3 出土遺物



⑥溝3 出土青花



⑦溝3 出土青花



⑧溝1、2、3周辺



①溝4、5、6周辺



④溝5 出土備前焼



⑤溝5 出土土師器



②溝4 出土遺物



③溝5 出土基石、碇



⑥溝6 出土遺物



① L字溝



② L字溝 北より



③ L字溝 出土遺物



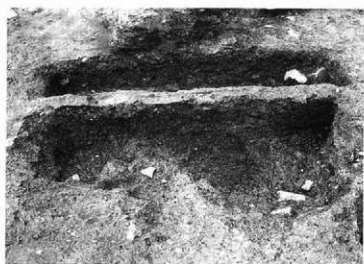
④ L字溝 出土遺物



⑤ 鍛冶炉1 北より



⑥ 鍛冶炉2 東より



① 鐵冶炉3



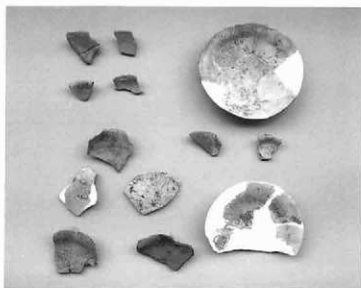
④ 鐵冶炉1、2、3、4 出土遺物



② 鐵冶炉4



⑤ 土坑2



③ 鐵冶炉1、2、3、4 出土遺物



⑥ 土坑2 出土遺物



①土壙3



④土壙3



②土壙3



⑤土壙3 出土遺物



③土壙3



⑥土壙5



①集石遺構



⑤柱穴78 発掘状況



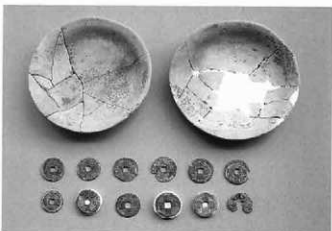
②集石遺構 丸瓦出土状況



⑥柱穴78 発掘状況



③柱穴71 発掘状況



⑦柱穴78 出土土師器、銅銭



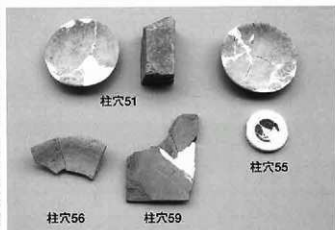
④柱穴71 発掘状況



⑧柱穴78 出土土師器、銅銭



①その他の柱穴 柱穴38 柱横出土状況



柱穴51

柱穴55

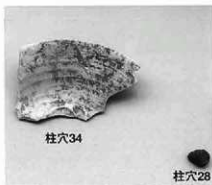
柱穴56

柱穴59

⑤その他の柱穴 出土遺物
銅銭は永楽通宝



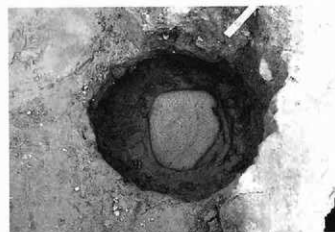
②その他の柱穴 柱穴39 青花出土状況



柱穴34

柱穴28

⑥その他の柱穴 出土遺物



③その他の柱穴 柱穴60 礎石



⑦東石垣の脇石垣



④その他の柱穴 柱穴66 土師器、備前焼出土状況



⑧東石垣の脇石垣



①井戸2西



④井戸2西 出土遺物



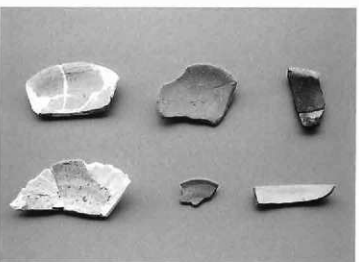
②井戸2西 杭出土状況



⑤井戸2西 出土遺物



③井戸2西 漆椀出土状況



⑥西溝 出土遺物



①包含層 土師器出土状況



④包含層 ロク口土師器



②包含層 土師器出土状況



⑤包含層 ロク口土師器



③包含層 土師器出土状況



⑥包含層 富原小学校校体験学習



①北石垣2出土
天目茶碗



②白磁、青磁、志野烧



⑧青花



③白磁、青磁、志野烧



④柱穴104出土 青磁、
青花



⑨青花



⑤柱穴104出土 青磁、青花



⑩白磁、青磁



⑥青磁



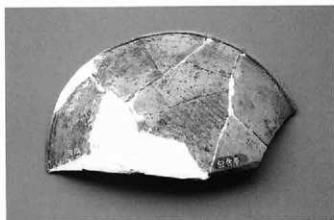
⑪白磁、青磁



⑦青磁



①ロクロ成形 土師器 小皿 (上半)
手づくね 土師器 小皿 (下半)



⑥ロクロ成形 土師器 底部



②手づくね 土師器 大皿



⑦ロクロ成形 土師器 板目



③手づくね 土師器



⑧ロクロ成形 土師器 大皿
ヘラキリ痕と板目



④ロクロ成形 土師器 大皿



⑤ロクロ成形 土師器 口縁外面



⑨ロクロ成形 土師器 大皿 板目



①鉄槩付皿



②小柄の柄部分



③鉄釘



④鉄製品



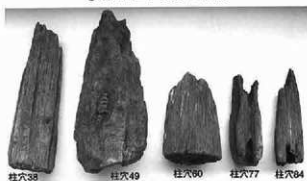
①溝2出土 残存した漆



②井戸2出土 残存した漆



③溝1出土 残存した漆



柱穴38

柱穴49

柱穴50

柱穴77

柱穴84

④柱根 (1)



柱穴0

柱穴1

柱穴2

柱穴23

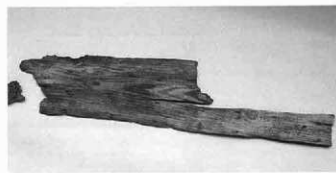
⑤柱根 (2)



⑥井戸2西 杭



⑦溝3 封じ土堤



⑧溝3出土 板材 松



⑨土壙5 曲物底



①火鉢 外面のスタンプ



④瓦 (2) コビキA (左)



②丸瓦



⑤獣骨 (左) 井戸2上層 (右) 溝5出土



③瓦 (1) 右は江戸後期



①町議会合同委員会視察 保存区域決定



⑥高田城三の丸遺跡歴史公園完成式
平成17年1月30日



②町議会合同委員会現地視察
平成16年3月9日



⑦富原小学校6年生



③現地説明会(1) 平成15年9月14日



⑧お世話になったボランティアの人々



④現地説明会(2)



⑨説明板



⑤平成15年12月20日 雪の積った
三の丸遺跡



⑩遺跡整備完成全景

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかだじょうきんのまるいせき						
書 名	高田城三の丸遺跡						
副 書 名							
巻 次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編 著 者 名	橋本惣司						
編 集 機 関	勝山町教育委員会						
所 在 地	〒717-0013 岡山県真庭郡勝山町勝山319 TEL (0867)44-2011						
発行年月日	西暦2005年3月30日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査要因
高田城 三の丸 遺跡	岡山県真庭郡勝山 町勝山59	33581	35度 05分 06秒	133度 41分 38秒	2003.6.24 ～ 2004.3.31	1000	駐車場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
高田城 三の丸遺跡	屋敷跡	中世	石垣 3 石段 1 礎石建物 2 建物 9 掘立柱建物 柱列 2 柱穴多数 井戸 3 土壇 3 鍛冶炉 4 溝 6 石敷遺構 1		瓦類 備前焼 土師器 輸入陶磁器 国産陶磁器 鉄釘 刀 小札 銅銭 漆器碗	山城麓の屋敷跡 歴史公園として 現状保存	

高田城三の丸遺跡

平成17年3月30日発行

編集・発行

勝山町教育委員会

岡山県真庭郡勝山町勝山319

〒717-0013 Tel0867-44-2011

印刷 株式会社 きょうせい

広島市中区八丁堀2番6号

